

全集 日本野鳥記 1 2 野鳥隨筆

山縣深雪

一、纏め上げた記録とも別れて

私は民国二十七年の夏渡満し、満洲炭礪に勤務の傍ら三十一年夏まで四カ年間、東満各地で野生鳥の分布調査・生態観察・採集・飼育をやり三十一年十二月にその成果をまとめて『満洲の野生鳥』を上梓しました。

その後中支の華中礪業で一カ年、再び北満の鶴岡炭礪で一カ年、三十三年の夏蒙疆竜烟鉄鋼へ派遣されまして一カ年、それぞれ勤務の傍ら野生鳥を調査し観察を続行しました。実は在蒙中に『続満洲の野生鳥』『華中・蒙疆の野生鳥』の二冊を上梓したく思って居りましたが、戦争が終結して、にわかに引揚げということになり八月二十三日にて着のみ着のままで天津へ集結したこととて、一切の所持品を何もかも失ってしまいました。

山階芳麿侯、黒田長禮侯、中西悟堂、小林桂助等の諸先生から御依頼された野生鳥の研究は一切の記録と標本を失ったこととて、ひとり私一個人の失望だけではないのですが、どうもやむを得ないことでありました。蜂須賀正氏侯や島津久健男御依頼のカンガルーネズミや蛇などの調査や採集はよい機会に恵まれずに終わりましたが、野生鳥の調査や観察は一応まとまったのでありました。続満洲、華中、蒙疆の鳥の記録の一部は、トランクに詰め宣化城内の聖紀寮へ、蒙疆の記録の一部と標本は、拙著や参考書などとともに？家堡(ほうかほう)の完遂寮にそれぞれ残してありますから、心ある現地の人々に拾われるようにと心ひそかに祈って居ります。

学問に国境のあるはずはありません、世界中のどなたが研究されるにいたしましても、私の拙い記録が少しでも参考にしていただけるとすれば同好の士としてこれほどうれしいことはありません。

竜烟鉄鋼の山際満寿一理事長と孫理事のおすすめで『華中・蒙疆の野生鳥』は蒙疆で出版することになって居たのですが、何しろ戦争中であり、鉄鉱増産の縁の下の力持で業務に忙殺されて居りまして、辛うじて調査・観察の成果を記録したのが関の山だったのです。

引揚げの際は宣化から天津まで二昼夜無蓋貨車の中で雨かぜに打たれたことですから、健康を害し、すっかり風邪を引いてしまいました。早速医師の診察を受けましたところ、シャツを着替えるとのことでしたが、シャツの着替えなど一枚も持って居るはずがありません、ほんとうに裸になった私です。

負け惜しみと笑われるかもしれませんが、ほんとうに裸になって見て、はじめてサッパリした気持ちです。私達の帰国はもう間もないことです。帰国いたしましたら恩師武者小路実篤先生の教えをまもり世の平和のために微力をつくしたいと思って居ります。私の小さな研究に永年御協力を賜りました現地の皆様に東亜新報紙上をかりて厚く御礼申上げる次第であります。(筆者は元竜烟鉄鋼社員、現在天津芙蓉疎開分団にあり)

一九四五・一〇・一六「東亜新報」

二、害鳥・益鳥

昭和二十七年六月十一日衆議院農林委員会は「ツグミは害益不詳であり、アトリとカシラダカは害鳥であるから狩猟鳥に加うべきだ」という趣旨の決定をして農林大臣宛に公文書を出した - という「野鳥」第百五十五号の記事を読んで、私も少なからず心が動揺した。

私にとっては小鳥はみんな親友なのだから -

罪もない友人が、極悪犯の烙印を捺されて有罪と決定したというようなへんな気持ちである。

私は黙し難いものを感じて証人に立ち、弁護もしたいと思う。

ツグミは害益不詳であり、アトリとカシラダカは害鳥であるとは何事であろう。

そもそも野鳥を害鳥・益鳥などと分類することが間違いではあるまいか。

ツグミが冬季に僅か乍ら禾本(かほん)科植物の種子を食すことは事実である。

けれども、ツグミ達が遠い族をして渡来するのは、ヒエ・アワ等の穀物は収穫後の事なのである。落穂を拾うことが果して犯罪だといえるであろうか。

然も、主食物はノイバラ・ヘクソカズラ・イヌザンショウ・ヤエムグラ・ウド・タラ・ヌルデ等の野生植物の種子なのである。

農地に出て昆虫やミズミ等を捕食するのも罪悪だとは申されまい。

野鳥の悉くを害鳥だとか、益鳥だとか、そのどちらかに片づけないではすまないというのはどんなものであろうか。

人類にとって、少しでも都合の悪いところのある鳥は害鳥だというのは、益鳥などという鳥はなくなるだろう。益鳥といわれているツバメにしたところで、益虫だといわれているトンボ等を好んで捕食するから、ツバメも害鳥だという事になってしまうだろう。利害をよく比較検討した上で、プラスよりマイナスが多かったなら害鳥、マイナスよりプラスが多かったなら益鳥だというような、しっかりした根拠のあるものなら、害鳥・益鳥の分類もやむを得ないものであろうが -

したがって私には、ツグミは害益不詳どころではなく、立派な益鳥だと思われる。

アトリとカシラダカは害鳥である - どうしてアトリとカシラダカは害鳥なのであろうか。両種共、冬季は禾本科植物の種子や松杉科の種子等を啄食(たくしょく)するが、四季を通じてどれだけ害虫といわれている昆虫等を捕食するか、あまりにもプラス・マイナスの値に差がありすぎるほどである。

冬鳥ではないか等と狭い料簡は出さないことである。私はアトリもカシラダカも立派な益鳥だと信じている。嫌われもののスズメやカラスでも、そのスズメが四季を通じて、捕食する昆虫と、秋季僅かに一~二カ月間の農作物の被害は八かりにかけてみるまでもないことである。

あらゆる野鳥が、農林関係上、害・益を伴う。それを目安のないスケールではかっているから、害鳥などという誤まった答が出されてしまったのだろう。みんな無実の罪だといえるであろう。

蠅の幼虫、ウジを最も多く捕食するのがスズメである。スズメは農林関係上では、他の野鳥よりも比較的マイナスが多いけれども、衛生関係上では、最もプラスの多い鳥だといえる。

だから害鳥などという野鳥はどこにも住んではいけない筈である。

けれども私は、野鳥を食用に供してはいけないとか、捕獲飼育などしてはいけないなどというのではない。

無知に因る無用な濫獲 - 害鳥だから駆除せよなどというが如き - によって、絶滅させられる種でもあってはと、最もそれを怖れるものなのである。目的とその方法が正しければ、食用も、飼育もよいのではなからうか。然し乍らもう自然の平衡が失われつつあるのだから、速かに禁猟区を増設して、もっともっ

と鳥類保護をはかるべきだと思う。

一九五二・一一「野鳥」

三、カラス

カラスは害鳥だとか、不吉な鳥だとか、いろいろとりざたされてよく問題になる鳥である。カラスに限ったものではないが、絶対の害鳥だとか、益鳥だとかいう鳥がある筈がない。ハシボソガラスが大害鳥だなどと、理科教育研究委員会編「鳥類魚貝図鑑」にも烙印が捺されてあるが、私にはどうしてもハシボソガラスが大害鳥であるとは思えない。野鳥の何種であっても害鳥などと烙印を捺す前に、もっとよくその食性や習性や生態を研究すべきではなからうか？野鳥の観察研究を深めれば深めるほど害鳥などと輕輕しく言えるものではなくなるだろう。

私は戦時中大陸にあって、特に蒙疆の竜烟鉄鋼になどは、宣化の本社と麗家堡の礪業所間の通信には伝書鳩が使用されていたものであった。

会社専用鉄道沿線の電話線はしばしば八路軍によって切断されたり、盗み聞きされたもので、電話では連絡の出来ない場合が少なかった。それで伝書鳩によって用事が果され、秘密も保持されたものであった。

その伝書鳩が途中で鷲鷹科の猛禽に襲撃される場合があった。傷ついた鳩が辛うじて帰着する都度、私は鴉科の鳥達に深い感謝の祈りを捧げずには居られなかったものである。私はハシボソガラス・ハシブトガラス・カササギ等が、鷲鷹科の猛禽に襲撃を受けた中小禽を勇敢にも救助してくれた現場を幾度か目撃したことがあったからである。それは単に伝書鳩が救助されただけでなく - 場合によっては数千の社員従業員家族等を救助してくれたものでもあった。人間には恩知らずがある。カラスを害鳥だなどというが如きは恩知らずの人間と言えるであろう。

ハシブトガラスやハシボソガラスが田畑の作物や果樹等を荒すと、目の敵にする人があって、水田の有機肥料を食害するタニシ等を食しているカラスまでを追い払う如き迂愚もある。農林其他の関係上大切な野鳥 - その中小禽を猛禽から守護してくれるカラスの功績。小さなことでも直接の被害にはすぐ騒ぎ立て、大きな間接の功績は黙殺するというのは何としても片手落ちと言うべきであろう。

春が来るとカラス達は益々目の敵にされる。私は昨十七日朝、社用で当村松井都落の N 区長の家を訪問した。N さんは馬ノ田の十石堀改修工事現場に出役したとのことだったので、十石堀沿いに上流の工事場に向った。初夏のような暖かいというよりも暑い日和だったので、ジャンパーの下にジャケットとメリヤスシャツという服装の私は汗で苦しかった。私は途中で小休止してタオルで汗をふきとっていた。ところが南方で越冬したヒヨドリの群がハイッー、ハイッー!ヒョッ!ヒョッ!と互いに呼応し乍ら次ぎ次ぎと十石堀の上空を横断して北方へ飛翔した。第一群が二五羽、第二群が二二羽、第三群が約一二〇羽、第四群が一五羽、第五群が約五〇羽であった。地鳥のヒヨドリが群毎に呼応したが、途中で羽を休めるヒヨドリは一羽もなかった。又飛立って同行しようとする地鳥も無かった。

そのときハシブトガラスがヒヨドリの群が渡る都度にやはり呼応した。ヒヨドリ達もそれに呼応し乍ら通過した。

ハシブトガラスは安全信号。ヒヨドリ達は悦んで感謝の信号であったろう。私は微笑を禁じ得ないものがあつた。

小休止後馬ノ田工事場の東方約二〇〇米ほどの地点を通ったときであった。私は堀下の谷間 - ハンノ

キ林 - にハシプトガラスの死体を発見した。どこを調べても外傷がない。嘴元に小蟻が数匹ついていただけで、ウジ蠅などまだ寄りついていなかった。腐臭も発していないから、早朝か前夜でも落ちたものであろう。胸の張り切った肉つきをみて病死ではなさそうに思われた。農薬の犠牲では無かろうか？そこは細々と水の流れている谷間であった。私は傍のアケビの蔓を切って両足を結び、その死体を持ち帰った。工事場で N さんからスケールを借りて測定しようと思ったのであった。

工事場は休み日であった。近所の M さんの家で聞けば区長さんは十石堀の水源地まで水路検分に行ったとの事であった。

私の手にしているハシプトガラスの死体を見て M さんの母は、

「カラスですね、家でも苗代用に一羽欲しいので、XX さんに銃猟して貰おうと相談したのです」という。

私は一寸考えさせられてしまった。測定解剖の上は地中に埋葬しようと思っていたからである。そうすると又一羽犠牲になるだろう。これはここでスケールを借りて測定してから M 家に進上すれば、他の一羽がたすかるわけである。人助けならぬ、鴉助けが人助けにもなるというものである。

私はすぐ、そう決めて、スケールを借りて測定した。嘴長六八耗・翼長三六四耗・尾長二二三耗五、？ 蹠長五三耗で、尾翼共皆完全無欠のものであった。解剖は M さんに依頼した。後から性別と胃中のものを報告してくれる筈である。

にくまれもののカラスである。然し私にはどうしてもにくめないカラスである。

一九五四・七「野鳥」

四、カラスの反響

「野鳥」第一六六号の拙稿「カラス」に反響が生じた。先ず金沢の市川昌徳氏から、次のような久しぶりのおたよりがあった。

拝啓、残暑厳しき折、益々御健勝奉賀候。無事御帰還の由承り居り候処、此度「野鳥」誌上にて相不変有益なる御発表に接し、うれしく存じ候。カラスの怪死に就いては小生昨年来同様のことを気付き居り候。然し時季が晩秋より冬、春にかけ田畑に農薬を現在使用せざる時季に見られ繁殖季に入りて、群棲せざるため不明、御説の如く農薬としては地上に残留して秋季も効力ありとも思われず。御発表は春らしく昨十七日と御記載。金沢城へは市外二里ほどより夜のねぐらのため沢山カラス集まり、ハシプトガラス・ハシボソガラス・ミヤマガラスを拾得、一朝二、三羽も落ち居ること往々。朝まだ体温あり、或は早くも鼠に食われ、居ることも有之候。今夏は繁殖期後一羽のみ発見いたし居り候。冬、早春に農薬としては不当と存ぜられ小生死因いまだに疑念に御座候。然し田野に蛙の姿なく、蝙蝠(こうもり)、燕の少くなりしは農薬と見てよろしかるべく候。今後ともよろしく。 敬具

八月二十九日

私は、早速市川昌徳氏に御返事を送って置いたが、「カラス」文中の昨十七日朝とあるのは四月十七日である。末尾の一九五四・四・一八の日付が脱落したものであった。

私の拾ったハシプトガラスの死因は、その後 M 氏の報告によって農薬フラトールと判明した。それは、今春南中郷村で全都落挙げて、同時に野鼠及び家鼠駆除の目的で、フラトールのだんごを田野や人家に配置したとのことで、鼠駆除の効果を大いに挙げ得たのはよかったが、犬・猫・鶏などの家畜もそれを食べ

たのがあって、家畜の犠牲を生じたことは残念であったとのことである。

私の拾ったハシブトガラスも胃中のものによって、その犠牲だったことが判明したわけである。ただ遺憾なことには農薬によるカラスの犠牲をさして、農薬の効果と - つまりカラスは害鳥だと信じている人の少ないことである。

昨年当村で、農薬パラチオンを使用したことがあり、害虫駆除の効果は大いに挙げ得たものようであったが、取扱った農業技術員が中毒し、T病院に入院、辛うじて生命だけは - という事で、危く自分自身を駆除するところであったという。

本年の燕帰来が少なかったということは、農薬パラチオンの被害ばかりではなかったとしても、鴉の減少したことは、農薬の直接被害であったことを確認した例が他にもある。大字石岡のM氏の談によれば、農薬フラトールのだんごを畑に置いたところ、ハシブトガラスが飛来して啄んだので、その行方を見守っていて、探したらそこでその死体を発見したとのことである。本年は当村内の鴉が減少し、スズメガやカレハガの発生が猛烈を極めている。これは最大の天敵である鴉達の減少によるものではなからうか？

当炭礪の住宅には、ヨシノザクラが処々に植付けてあるが、これら毛虫発生により、盛夏だということに裸 - 人間の裸ならとにかくとして - になったのがある。山の桜も同様なものがある。毛虫の蔓延は農薬フラトールの間接被害にもよると云えるだろう。私の隣家では裸にされたヨシノザクラが、今、時ならぬ花を咲かせている。まだまだ気温や地温が高いので、吸上げた養分が、来年の芽を發育させての開花となったものではなからうか？

花咲爺ではないが、私は、試みに盛夏の頃に桜の葉を全部落して、その秋に花を咲かせたことがある。然しそれは木が弱った。毛虫の群が居間に上って困る、何とかしてくれと庶務の私達へ苦情を申立てる職員などもある。その一人は隣りにあることだから、私も実は被害者なのである。どうにもしようがない。何にしても、せっかくの桜樹が枯損してはと、私は心配なのである。

隣家の家畜を殺害しようなどと、わざと農薬を使用する人は無からうけれど、鼠ばかりではなく、鴉を駆除しようとして、農薬を使用する人は無いでもない。

「権兵衛が種播きや、鴉がほじくる。三度に一度は追わずばなるまい。」

鴉を追わなくてはならない場合には、追うとしても、大それた駆除などということはつつしんで貰いたい。(一九五四・九・一二)

一九五五・五「野鳥」

五、野鳥の乱獲と狂い咲き

二十八日付の読売新聞茨城版紙上の「珍しい八重桜の狂い咲き」を読み、心が痛んだ。近年桜の狂い咲きが各地でふえているようであるが、これは野鳥を乱獲したため、害虫のスズメガ・カレハガなどがはびこったのが主な原因と思われる。夏に虫害を受けて、その葉を食いつくされた枝は翌年になって咲くはずの蕾が開花してしまう。

私は試みに夏に葉をつみとって秋になって花を咲かせたこともあるが、毎年続けると枯れてしまう。害虫を防ぐためには農薬を使う方法も考えられるであろうが、広く深く将来のことを考えれば、自然の平衡を破った野鳥の乱獲を禁止する以外に道はないと思われる。自然の平衡が保たれるようになるまでは年々減少している野鳥を保護し、禁猟を実行すべきだと信じる。

一九五六・一一・六「茨城読売・私の席」

六、春が来ても

春が来た。

もう彼岸である。

ウグイスが囀鳴(てんめい)する。ヒバリが舞揚る。

問もなく、ツバメやオオルリ等が、生れ故郷を慕って帰来するであろう。

桜の蕾が、日増にふくらんでくる。ウソが蕾を啄んでいる。

秋に渡来して、冬中路傍の切土の奥を埒としたジョウビタキが、この頃尾羽を失っている。渡去するまでには新しい尾羽が伸びるであろうか。昼間子供たちのとりもちにかかってか？ 或は夜間その埒を襲われでもしてか？ 辛うじて命だけは - というところであろう。

埒の下には、すぐそれとわかるその糞がうずたかい。春が来たので生れ故郷へ帰れると悦んでいるであろう冬鳥達。

それなのに、この頃私を憂うつにするものがある。おそらく故郷へは帰れそうもない、傷つけられたツグミを見たからである。

近年、空気銃の被害が増大するばかりである。傷つけられたツグミはさぞつらからう。

カシラダカなど、賑やかに囀り初めたから、もう一挙に飛去するであろうに -。

戦時中、私は大陸で、ジョウビタキやベニマシコなどの営巣を観察したが、今では冬鳥として渡来したのを散見するだけである。

陽春。故郷での小鳥達の生活は実に楽しそうである。小鳥の故郷は極楽であろう。

私は、終戦後故郷に帰還した。

私の故郷は、小鳥の故郷のように楽しいものだろうか？ 天津滞在中に、総領事館へ預けた貯金通帳は返されない。横浜正金銀行天津支店に依頼した送金は着いていない。一切の所持品財産 - 小鳥の観察記録や参考書・標本等も持帰られなかった。裸になって帰った故郷で就職してみれば、元の助手・鉱員・給仕の下役。

春が来て、小鳥達には、その故郷がさぞかし楽しいあこがれであろう。

春が来ても、生れ故郷に帰ってはいても、生れ故郷に帰られそうもない傷つけられたツグミのように、私の心も傷つけられている。

一九五三・五「野鳥」

七、愛鳥雑感

相当教養の高い人なのに、軽々しく「絶対に」などという言葉を使ったりする向きが無いでもない。

私は、そういう時いつも、その人のために悲しむものである。

スズメは絶対に害鳥だとか、ツバメは絶対に益鳥だなどと -。

小鳥に関しては素人だなど思うだけではない。どこか、人間としてまだまだの人だなど考えさせられてしまう。

あれほどの人であり乍らとしみじみ惜しくなることがある。

野鳥の飼育を、問題にする人がある。

私は、野鳥の飼育をそれほどまでに問題にすることはないだろうと思う。

有島武郎さんではないけれど、「愛は惜しみなく奪う」もので、キリストではないけれど、「愛は惜しみなく与う」もので、愛とは、その双方のものなのであろう。

野鳥を飼育するということは、愛することではなからうか？

野鳥を飼育することによって、自然界の平衡が破られるものではないだろう。

巣引鳥を飼育する目的は別として、野鳥の飼育には雄だけのものが多いようである。

野鳥を飼育すると、意識なしにも情操が高まり、自然科学の研究にもなる。

マイナスはあってもプラスの方が多いただろう。

「花鳥を愛すは聖なり」 - 古人はほんとうのことを、うまく言表わしたものである。

害鳥駆除だなどと、カスミ網を張ったり、空気銃で野鳥を追廻す人が、まだまだないではない。そんな人の無いようにしたいものである。害鳥だなどとは口実で、どんな小鳥でもどしどし殺している。

自然界の平衡が破られる怖れがある。

一九五五・五「野鳥」

八、タヌキとツツドリ

五月八日の第二日曜日に、私達は大北溪谷の水源地、多賀・久慈両郡境の高原、上君田牧場(東径一四〇度三三分・北緯三六度四八分・標高約八〇〇米)へ、ワラビ刈(私は野鳥観察を兼ねて)に出向いた。

馬は牧場の禾本科植物を、くまなく食べつくすが、ワラビやフキ等は食べないそうで、広い牧場全体にワラビがある。

牧場の入口には、杉森があって、そこでは夏鳥のオオルリが囀鳴し、路傍の篠藪では、私達のトラックに驚いたウグイスがしきりに警戒鳴。

牧場の谷間には、牧馬が避暑する雑木疎林があり、今が山桜の花盛り。

その雑木林の水辺では、ホオジロ・キセキレイ・セグロセキレイ・カワセミ・カワガラス・シジュウカラ・ヒガラ・エナガ・ヤマガラ・コゲラ・アカゲラ・キジバト・メジロ・ヒヨドリ・モズ・カケス・ハシボソガラス・クマタカ・トビ等の留鳥が鳴いたり、飛翔したりする。

夏鳥のサソショウクイ・センダイムシクイ・ヤブサメ・アマツバメ等も鳴く。

それらの野鳥を耳にし目にし乍ら、ワラビを摘む二重の楽しみ。

正午頃、ポン、ポン、ポン、ポン、というツツドリ(夏鳥)の声。

私は、それを耳にして、「タヌキの腹つぶみ」を連想させられた。

「動物文学」第一一七輯(しゅう)の、平岩米吉先生の「狸腹つぶみ」 - ラジオ東京で放送したもの - によると、

狸の腹つぶみ

平岩米吉

秋になりますと、月のよい夜中に、狸がうかれ出て、腹つぶみを打つということが、昔から言われております。で、これに関連して、狸の伝説と習性を一つ二つ申上げてみたいと思います。

今から八百年ほど前、鎌倉時代の始めの寂蓮法師の歌に「人住まで鐘も音せぬ古寺に狸のみこそ、鼓うつなり」とあるのを見ますと、狸の腹鼓ということは、ずいぶん古くから人々に言いはやされて来たことがわかります。

腹つづみは本当に鼓の音のようだと云うことですが、江戸時代の柳沢棋園が筑紫のある寺で、月の美しい夜、腹つづみを聞いた時は、耳を澄ますと、砧の音のようではあるが、それとは少しちがった音が、はるか向うの岡の方から響いて来たそうであります。

それから、腹つづみは何で打つかと云いますと、尻尾を股の間に入れて、それで打つのだと考えられております。これは狂歌で有名な太田南畝が、京都の二人の風流人が、琴と横笛を楽しんでいると、狸が庭へやって来て、尻尾で、腹を打って、それに合せたと書いているのでもわかるのであります。

では、どうして腹つづみを打つというような、出来る筈のないことが、想像されるようになったかと、申しますと、これには第一に足の短い、胴の太い、ずんぐりした狸の姿が考えられます。その上、狸の毛が長いので、よけい腹が大きく見え、眼の囲いの黒い隈取りなどもおどけた愛嬌のある感じですが、次に狸は気持ちのよい時は、犬がよくやるように、背中を下に仰向に臥ることがありますが、この姿勢で尻尾を動かせば、丁度腹を打っているようにも見えるわけです。また暑さに弱く、夜活動する性質なので、秋の月夜などは一番元気に歩きまわることになります。これらの事に、人間の世界の、豊かな収穫に腹を打って喜ぶという風習が結びつけば、秋になると、狸が腹つづみを打って浮かれ出すという、まことに朗らかな想像も成り立って来るであります。 (註記省略)

右のように、タヌキは腹つづみを打つと古来からの伝説があるけれど、それは、ツツドリを、タヌキの腹つづみだと思い込んでしまったものではないだろうか？ 月夜に、ポン、ポン、ポン、ポンと、音がする。さて何の音だろうかと、近寄って見たら、狸が居た。

ああ、狸の腹鼓だったのかと、早合点 - というようなことは、ありそうなことである。その音をよく調べたら、ツツドリの声だった - というところまでは、観察出来なかったのかもしれないのである。野鳥の木の葉がくれは、とても上手なのだから。

さて、ツツドリとタヌキを結びつけることは、決して偶然ではない。野鳥には、敵だと思ふ他の動物などが現われると、近寄って騒ぎ立てたり、よく観察したりする通性がある。そこへ人が近よれば、安心して囀鳴をはじめたりもする。(一九四〇・五・三〇満洲新聞の拙稿「可愛い小鳥を観察しましょう」参照)ツツドリが鳴いていると、そこへタヌキが出現した。ツツドリは間近でタヌキを観察していると、ツツドリを耳にした人が何の音だろうと観察に近づく。その人はタヌキを見つける。そこでツツドリが又鳴いた。ツツドリの姿を見ずに、タヌキだけを見て、その人は、タヌキの腹鼓だったと早合点する。

- 古人に限ったわけではなく、現代人でも、そのような早合点は、いくらでも繰返されているのではなからうか？

昼食に一盃やり乍ら、

「ツツドリが鳴きましたね」と、高橋和夫医師。

「タイムスに書いてくれ」と、渡辺三郎課長。

背負籠に、ワラビを一杯に摘んだ先崎政雄君。

私も六戸へ配れるほどの収穫で、うれしかったが、期待していた、イカル・ヤマセミ・コジュケイ・キジ・ヤマドリ等の留鳥や、キビタキ・アカショウビン・サンコウチョウ・オナガ・カッコウ・ホトトギス等の夏鳥の声が聞かれなかったことと、ツツドリの声は耳にしたけれど、タヌキを目にしなかったこと

は、残念だったといえば、それは、慾張り過ぎるというものだろうか？

一九五五・七「野鳥」

九、山梨県三頭山探鳥記

私はかねがね東京支部の探鳥会へ参加したいものと思っていた。茨城には数名の会員がいるだけだから、支部などというわけにはいかない。私は無所属というところだが、東京支部に仲間入りさせて貰っている。ヤドカリみたいな存在なのである。

六月二十六日は三頭山の探鳥会との知らせを受けて、二十五日に高野伸二氏を訪ね、同行させて貰うことにした。

空模様が気にならないでもなかったが、私は平気だった。松井虎二郎氏が参加する筈だというし、満洲以来十数年振りまで再会出来るのがうれしい。未知の同好との会見も楽しみである。

十六時新宿に集合、松井さんの老けたのに先ず一驚した。往年の元気な青年将校が - 。私にも昔の面影はないだろ。松井さんも驚いたに相違ない。

六月四、五日の新潟県松之山に於ける全国委員会に出席の機に、車中で中西悟堂先生から御紹介を受けた武田敏信氏に再会。昔からの友 - というより実兄のような親しみが感じられるから、野鳥の友はなつかしい。一行は立川で乗換えて奥多摩の氷川に定時着。バスで小菅の紅陽館に着いたのは夕方であった。参加した会員三十一名。その中には、武田敏信・山本徳太郎・鈴木孝夫・笹川昭雄・加藤清高・池貝喜代三・大鳥憲太郎の全国委員諸氏の顔があったが、中央委員が一名も参加されなかったのは一寸淋しい感じがした。それと平岩康熙氏にも久し振りで再会出来るだろうと実は内心期待していたものであった。

その夜の懇談会では武田・加藤両氏の松之山探鳥会の成果報告があった。その報告中に、アオサギをゴイサギの幼鳥(通称ホシゴイ)と誤認されてあったので、私はそのアオサギからはじまって、ノジコとアオジの話をした。松之山探鳥会の帰路、長野県の委員野溝竜太郎氏が、松之山のノジコをアオジだという。

「双眼鏡で観察した結果はアオジだった」と。ところが私の耳にした囀鳴によればノジコであった。それから - これは私に一杯入ったからでもあったろうか？ それは奥多摩支部の御好意での一本が、そろそろきいたのかもしれない - 飼鳥論をはじめてしまった。

「私の失敗即成功談とでもいうべきものである。在満中に東寧のキジを観察して、ホクマンキジは冬鳥らしく、コウライキジが留鳥であろうと説明し、うかつにも『野鳥』に発表したことがあった。その後ホクマンキジを飼育した結果、夏羽は頬の白点が消滅して、コウライキジに近似するもので、夏季に野外で、コウライキジだと思ったのは実はホクマンキジで、ホクマンキジも留鳥であることが判明した。後から誤正して『野鳥』の諸氏を誤らせずにすませたけれど、飼育してみないとわからないことがいくらかもある。ノジコとアオジの観察にしても、私は飼育したればこそ、その鳴声だけで判定したのである。」と、それから、「野鳥の飼育は愛鳥精神にもとるものではない。ただ見て過ぎるだけで、どうして愛鳥精神だと云えるだろうか？」と、いったところが、早速問題になった。

「探鳥会などは愛鳥精神ではないというのか？」というわけである。

そこで私は私の舌足りない点を補足した。「ただ見て過ぎるということは、探鳥会等を指したものではなく、野鳥に無関心だという意味である。無関心 - それは愛ではないということである。」

それで一応私の意見は了解されたようだが、

「野鳥を飼育するのは可哀想だから、研究が済んだら放鳥したらどうか？」という意見が出た。そこで私は、

「その研究が中々終わらない。飼殺しないとその寿命がわからない。自然界では、気象・外敵などの悪条件が伴うから、飼育をつづけるよりない。私は心ですまないとは思いつつ、毎冬渡来越冬するベニマシコの一群を全部捕獲して、半数を飼育し、半数には標識をつけて放鳥し、毎年観察をつづけたが、四年以上渡来した個体が無かった。飼育したものは七年以上に及んだものがある。生物は生きるということが最大の希望ではなからうか？生きるためには遠い渡りもしなければならない。自由に飛翔 - とはいふけれど、遠方の渡りは苦しみであるだろう。食糧が豊富にあれば野鳥は渡りをしないでもすむ。飼育も食糧を豊富に与えて愛すれば、悦んで囀鳴をする。禽舎や鳥籠を刑務所と同視することはセンチであろう。罪人を扱うのとは大いに異って飼鳥には愛があるからである。野鳥の寿命は自然界のそれより飼育の方が長命であることは、先日上野動物園長の古賀忠道先生とも話したことで、私の自信ばかりではない。野鳥を研究しつつしたなどとは、とんだことで、まだまだわからないことが沢山あるのだから、探鳥と併せて飼育もし、動物園や博物館などでも研究することである。中西悟堂先生にしても、探鳥・採集・飼育と種々の研究苦心を積重ねたればこそ今日あるわけで、若い学生諸君も参加されていることだし、次代を背負って貰わなければならない諸君にはつまらないことを気にして、センチにならないで、広く深く研究を繰返して貰いたい。野鳥の飼育にはマイナスはあってもプラスが多い。私は野鳥の飼育は愛鳥精神にもとるものではないと結論する。」

そこで私の話は終わった。

その夜は、私の期待したコノハズクの声を目にする事が出来なかったが、裏田圃のカエルの声に混じて、清流のカジカガエルの声を目にした。小菅のそれは田圃のカエルの声が感染しているらしく、聞いた。

翌朝、山本さんと高野さんから、三頭山探鳥記として、昨夜の談話も是非書いてくれとのこと。さて、二十六日の三頭山の鳥であるが、早朝宿で居乍らに私の観察したものは、先ずホオジロ・ノジコ・オオルリ・キセキレイの声と、アオバト・ヤマセミ・スズメ・ツバメ・コサメビタキ・カケスの目撃。宿を出て、バスに乗り。下車してからの第一声はカワガラス。次いでウグイス・シジュウカラ・ヒガラ・コゲラ・ヤブサメ・メジロ・カッコウ・ヤマガラ・エナガ・マミジロ・ツツドリ・ミソサザイ・コルリ・コマドリ・コノハズク・キビタキ。峠を越してからはジュウイチ・ヒヨドリ・ハシブトガラス・センダイムシクイ・キジバト・アカゲラ等であった。何と云っても個体の多かったのはウグイス・オオルリ・アオバト・ノジコ・シジュウカラ等であった。一行の中から、

「あのウグイスは変っている」という声がかかった。なるほど、それは珍らしくも、ホーホ・ホーカララ ララララ ケキョー と、コマドリの声が感染したものであった。私達はそこで、しばらく足を止めさせられた。それは、星野嘉助氏に録音して貰ったら、と惜しまれたほどのものであった。

コノハズクは、ブッ ポウ、ブッ ポウの二音繰返しだけであったのはもの足りなく感じられた。コマドリも、満洲のシマゴマのような複雑な変化が聞いたかった。然しその姿態は存分観察出来た。私が路傍で見つけたオオルリの巣には一卵あったという。加藤さんが炭焼小屋の切土穴で見つけたミソサザイの巣には四雛があり、産座にはカケスの羽毛が布かれてあった。エゾハルセミのセミグレにさまたげられて、鈴木孝夫さんが、たしかに鳴いたというのを、私はききもらしてしまったのもあった。アオバトの巣はまだ発見しないとかで、熱心に探していた向きもあるが、成功しなかった。ゴジュウカラとカヤクグリ

を見たという話もあったが、私はそれも目撃し得なかった。非常にすんだよい声で囀鳴していたシジュウカラ?と変化に富んだオオルリの各一個体があった。谷間にはワサビが栽培されてあった。三頭山は標高一五二七米五。空模様の割には富士山がよく見えた。頂上で昼食後は加藤さん一人がガイドとなり、奥多摩の諸氏は別路下山した。探鳥を了えて河内でバスを待つ間に雨となったが、恵まれた探鳥会であった。立川駅で乗換の際、同駅に営巢したイワツバメ約二〇羽を目撃出来たのもうれしかった。

当日の参加者は、武田敏信・太田八重子・祖父江辰子・小川政雄・鈴木礼子・高桑喜与子・石川百合子・弘中剛・山縣深雪・楠川雅之・森田敏・森井繁事・美川淳而・松井虎二郎・高橋敏夫・笹川昭雄・浦本昌紀・岡田泰明・富永明夫・山本徳太郎・志水清孝・藤巻裕蔵・塚本洋三・大谷ツヤ子・高田美恵子・高野伸二・鈴木孝夫・池貝喜与三・大鳥憲太郎・池貝治夫・加藤清高の諸氏であった。

尚一行の記録した鳥種は次の通りであった。

1 ホトトギス・2 ジュウイチ・3 カッコウ・4 ヨタカ・5 マミジロ・6 コルリ・7 ホオジロ・8 ウグイス・9 オオルリ・10 ヤブサメ・11 キビタキ・12 キセキレイ・13 シジュウカラ・14 ノジコ・15 キジバト・16 センダイムシクイ・17 ヒョドリ・18 カケス・19 コサメビタキ・20 ハシブトガラ

ベ・21 ヤマセミ・22 ミソサザイ・23 メジロ・24 アオゲラ・25 アカゲラ・26 スズメ・27 クロツグミ・28 ツツドリ・29 カワガラス・30 アオバト・31 トラツグミ・32 アカハラ・33 ゴジュウカラ・34 コゲラ・35 コノハズク・36 コマドリ・37 ヒガラ・38 ヤマガラ・39 エナガ・40 ノスリ・41 ツバメ・42 コガラ・43 イワツバメ

一九五五・九「野鳥」

一〇、常磐線大北溪谷

古来からウミウの蕃殖地として名あり、近年はコシアカツバメの常磐線茨城県内での北限地ともなった高萩市。前名松原町とある如く、周辺松山に囲まれた常緑の高萩市。その高萩市横川の大北溪谷は、茨城県北の観光地として、終戦後にわかに世人の激賞するところとなった。昭和二十六年、横川林道の開通がもたらした収穫である。

昭和三十一年二月十一日から、高萩駅-南中郷駅-日棚-松井-石岡-横川-下君田-上君田を結ぶ国鉄バスの開通となったことは世人の宿望成れりというものであろう。大北溪谷の観光には、高萩駅と南中郷駅から、国鉄バスに乗車すれば、乗換なしに目的地に着く。磯原駅から石岡の下堂地乗換というコースもある。

高萩駅から南中郷駅まで四・五軒。国道六号線を直線に走る。東は太平洋。西は阿武隈支脈。南中郷駅から四軒で県道日立・勿来線に至る。そこは二又川炭礪口で、月産五万屯を目指す常磐炭礪茨城礪業所第三坑の石炭積込場がある。水洗場や乾選場も目前にある。延長二八八米の十石隧道を抜ければ、大北溪谷入口の下堂地である。炭礪口から一・五軒。左岸は炭礪住宅街で、東京電力大北川第二発電所(出力千キ口)が見える。ここで水成岩(第三紀層)がつき、火成岩(白花崗石)となる。

水明橋からは奇石径岩の連続。横川まで五・五軒の林道。溪谷を遡るこの区間こそ、大北溪谷中での景勝帯である。先ず入口から一・二軒で東京電力第一発電所(出力四千キ口)がある。それから奥は天然の雑木林となる。春は山桜。紅・紫・白の山ツツジ。セミシグレのような野鳥の囀鳴。田圃のカエル等の声に感染していない、カジカガエルの清鳴。秋は燃えるよう波全山の紅葉。冬は雪。

滝見橋-鯰岩-継石不動尊-ヤマメ滝-紅葉橋-月明橋等を経て横川滝に至る。深い溪谷の中腹を走るバス。

滝の上には常磐炭礪横川発電所(出力千五百キロ)がある。

横川から下君田へ五軒。途中の小山には東電の調水池がある。下君田から上君田まで三軒。上君田から徒歩で三軒登れば(標高八一六米)広い牧場があり、五月中旬にはワラビの最盛期となる。

この観光には、高萩駅、若くは南中郷駅から朝のバスに乘車し、終点で下車せずに折返し横川で下車して、下堂地までの五・五軒の林道を徒歩で下り乍ら眺めるのがよい。帰路下堂地から磯原行バスに乘車すれば、炭礪街・大北川の下流・磯原海岸の天妃山等の観光も出来るわけである。

茨城には水戸・筑波・潮来・袋田等の景勝地が古くから知られているが、大北溪谷の世に知られなかった所以は、林道開通以前には溪谷に通路が無く、石尊山・十里上峠の旧道を通行していたからである。地元の横川・君田でさえ林道開通後に驚いて、溪谷の観楓会を開催したという事実だけでも、それと肯げることだろう。知る人もなく埋もれていた溪谷の景勝であった。大北溪谷は低山では稀な野鳥の好蕃殖地でもある。筆者の調査記録を紹介すれば次の通りである。

1 夏鳥

(雀科)スズメ

(花鶏(あと)り科)コカワラヒワ・ホオジロ・イカル

(燕科)ツバメ

(雨燕科)アマツバメ

(雲雀科)ヒバリ

(鶺鴒(せきれい)科)キセキレイ・セグロセキレイ

(翡翠(かわせみ)科)カワセミ・ヤマセミ・アカッヨウビン

(鶯科)ウグイス・ヤブサメ・センダイムシクイ

(四十雀科)シジュウカラ・コガラ・ヒガラ・ヤマカラ・エナガ・キクイタダキ

(メジロ科)メジロ

(椋鳥科)ムクドリ

(鶺鴒(みそさざい)科)カワガラス

(鴟科)モズ

(鶇科)ヒヨドリ

(鶇科)キジ・ヤマドリ・コジュケイ

(鴉科)ハシブトガラス・ハシボソガラス・カケス

(啄木鳥科)アオゲラ・アカゲラ・コゲラ

(鷲鷹科)トビ・ノスリ・クマタカ・コチョウゲンボウ

(鳩科)キジバト・アオバト

(山椒喰科)サンショウクイ

(鶺鴒(ひたき)科)コサメビタキ・オオルリ・キビタキ・サンコウチョウ

(杜鵑(ぼととぎす)科)カッコウ・ホトトギス・ツツドリ

(怪鴟(よたか)科)ヨタカ

(梟鴟(ふくろう)科)アオバズク・フクロウ・オオコノハズク

(千鳥科)イカルチドリ

(鶯科)ゴイサギ

以上二十六科五十五種が蕃殖する。

尚溪谷の下流では(鶯科)セッカ・オオヨシキリ、(鶺鴒科)ハクセキレイ、(雀科)ホオアカ、(秩鷄科)ヒクイナ、(カイツブリ科)カイツブリ等も蕃殖する。

2 冬鳥

(雀科)マヒワ・ベニヒワ(稀)・オオカワラヒワ(稀)・ウソ・ベニマシコ・ハギマシコ(稀)・オオイシコ(稀)・イスカ(稀)・アトリ・ツメナガホオジロ(稀)・ミヤマホオジロ(稀)・コホオアカ(稀)・コジュリン(稀)・オオジュリン(稀)・クロジ・シメ・カシラダカ・ニューナイスズメ(稀)・アオジ・ノジコ(稀)(鶺鴒科)タヒバリ(稀)・ピンズイ

(鶉(つぐみ)科)ジョウビタキ・ルリビタキ・ツグミ・シロハラ・アカハラ・マミチャジナイ(稀)・トラツグミ(稀)・オオトラツグミ(稀) - 本種は昭和二十二年十月十二日に筆者が一個体採集し、標本は林野庁三島冬嗣氏所蔵の珍種 - ・クロツグミ・マミジロ(稀)

(雉科)ウズラ

(鶺鴒科)ミソサザイ

(連雀科)キレンジャク(稀)・ヒレンジャク(稀)

(岩ヒバリ科)カヤクグリ

(鷲鷹科)ハヤブサ

(雁鴨科)オシドリ(稀)・マガモ・コガモ

(梟鴉科)コノハズク

以上十科四十二種の渡り鳥が越冬する。

探鳥には五-六月の囀鳴期がよく、観楓には十一月上旬から十二月上旬までがよい。

一九五七・五「野鳥」

一九五七・八・一「常磐炭礪燃料タイムス」

一一、福島県鮫川探鳥記

残暑きびしいから、涼しい鮫川で地引網を引こうではないかということで、親善の含みもあり、庶務課有志が、八月二十七日勿来市植田町の鮫川に集合した。

中郷鉦の有志は七時三十分の常磐炭礪バスで磯原に下り、磯原駅から乗車。神の山鉦の有志は常磐炭礪バスで大津に下り、大津港駅から乗車。一同植田駅で下車した。

いつものこと乍ら、私は探鳥を目的としているので、早速植田駅ホーム上屋のイワツバメの営巣を観察した。近年福島県内でのイワツバメの南限は植田駅で、本年もそれに変わりはない。然し街を歩いてみて、ツバメの個体数の減じたことは、いずこも同じというところ。

鮫川旧橋の下で、迎いの川舟を待つこと約一時間余。堤防下の水溜りでは、ミズアオイの紫青色がいつも涼しげである。

貸ボートに乗って時間を消していた向きもあるが、私は野鳥の観察。先ずウのまねするカラスならぬ、トビのまねするハシブトガラス一個体を見た。スズメの群れは河原のヒエを盛んに啄んでいた。ホオジロは桑の梢で囀鳴。キセキレイは水辺で昆虫を捕食。キジバトが畑から飛び立って西方の山林へ飛翔。山林からコカワラヒワが飛来。ムクドリの一群は部落の森から森へ飛翔した。

川舟二隻に分乗し、川口めざして下るほどに、田圃のあたりからクイナの声。河原ではシロチドリを散見、八羽まで数えたところで、第一回の網引。ミゾゴイが一羽驚いて飛立つ。網引中に、ビッ!ビッ!ビッ!.....とセッカの声。第二回の網引に下る途中、中洲の草むらから飛上ったセッカの一羽は、ジャッ!ジャッ!ジャッ!.....と警戒鳴を發し乍ら、舟が中洲を通過するまで追いかけた。右岸では、はるかの空でヒバリの声。左岸の完成間近い常磐共同火力 KK 勿来火力発電所(出力七万 KW)を眺め乍ら、第二回の網引をはじめると、あたりにオオチドリ四羽。

更に下って川口附近で第三回の網引。そのあたりでアオアシシギ二羽目撃。ハクセキレイ二羽飛去。北方の松林の空ではチョウゲンボウが一羽滞空。海岸の上空を円舞する鷹二羽をミサゴかと思ったが、近づいた一羽でトビと判明した。

第三回の網引では、一貫二百匁もあるというスズキがとれて一同雀躍した。四、五回でやめて、憩の宿「菊浦」で宴会。漁獲物は早速料理して貰って賞味した。ボラが一番多く、サヨリ・ウグイ・フナなども少なくなかったが、スズキは一尾だけであった。

観察した鳥は、

1 イワツバメ(約二〇)2 ツバメ(約五〇)3 ハシブトガラス(一)4 スズメ(多)5 ホオジロ(二)6 キセキレイ(一)7 キジバト(一)8 コカワラヒワ(一)9 ムクドリ(約一〇)10 クイナ(一)11 シロチドリ(約二〇)12 ミゾゴイ(一)13 セッカ(六)14 ヒバリ(二)15 オオチドリ(四)16 アオアシシギ(二)17 ハクセキレイ(二)18 チョウゲンボ(一)19 トビ(三)

参加した有志は、中郷鉦では、沼田吉文・上村長吉・鈴木光貞・馬場善治・飯樋章・根本衛・斎藤公・柴田幸孝・渡部恒子・渡部恵子・小林ナミ子・内ヶ崎操子・菊池絹子・小林武子・関沢清子・長沢静香・筆者・家族の少年少女七名、汽車に乗遅れて後から千葉直彦。神の山鉦では、小林忠・今西清・金子明・小松崎常雄・今西愛子・鈴木千代子・河村房子・富岡房代・石井民子・家族の少年少女四名。(順不同-略敬称)

やむを得ない事情で参加し得なかった有志に中郷鉦の福岡敏男・高橋和夫・作山正午・須藤アサ・神の山鉦の中安讓二郎・藤崎精その他の諸氏がある。

馬場医師父子からツバメについて質問があったり、金子医師の狩猟の話があったりはしたが高橋医師や福岡氏が参加されていたら、もっとも鳥の話がはずんだことであつたらう。

鮫川の川口では、戦前カイツブリ・ホオアカ・オオヨシキリ・カワセミ・なども蕃殖したものであるが、それらを観察し得なかったことと、都合で参加し得なかった人々のあつたことは、私にとっては一寸もの足りない一日であつた。

一九五七・八・二八

一二、足長蜂

私は野鳥を飼育しているので、四季を通じて、絶えず菜や大根を庭に作っている。

紋白蝶等が、それに卵を産みつける。

私は毎年青虫や黒虫の駆除が容易でない。

春になると、私の庭は紋白蝶達の家になる。イチジクやヒマワリ等の葉裏が、その寝室である。

スズメが青虫をくわえて行くことがある。

足長蜂が菜や大根の葉を、一枚毎に裏表を調べては、青虫をくわえて行く。毎日うまずに続けている。昨年の春はタマツバキの生垣に、足長蜂が営巣蓄殖したので、毎日観察を楽しみにした。私が虫取りに庭に出ると、飛んでくる。

私の手元から離れない。青虫が地面に落ちると拾って行く。

どうしたことが黒虫を見向きもしない。スズメも黒虫を敬遠する。

飼育中の野鳥も悉く、青虫ならよく食べるが、黒虫を好まない。

私の庭では、足長蜂が、青虫のよい天敵であるが、黒虫の天敵が見当らない。

今年の春は、昨年の巣から、二米ばかり西方の百合の葉裏に営巣した。

その百合にズイムシがついて、下葉からだんだん枯れて順々に落葉した。その葉も枯れて落ちそうになったので、落ちないうちにとあって、六〇糶ばかり離れているツツジの枝にその葉を移した。親蜂が巣についているので安心していましたが、三日目には巣にいなかった。

それから、ずっと巣に来ない。巣を移されたので、どこかへ移動したのだろうか。

その巣が地に落ちたなら、どうなったであろうか？

巣が落ちないように、糸でその葉を茎によく巻きつけてやったら、どうだったろうか？

私は虫取りが益々容易でない。

一九五三・一二「動物文学」

一三、猫 汁

猫は嫌だ。 - だが猫汁は嫌ではない。

猫は鼠を捕食するので、好感が持てないでもないが、小鳥を捕食するから嫌なのだ。小鳥に害を加えないように訓練された猫がないでもないが、一応猫を警戒する。

警戒はしていても、今朝もオオマシコの雌を殺害されてしまった。

昭和二十五年二月から飼育している、馴れ切ったオオマシコである。

元、カナリヤ籠で一番飼育していた時にも、雄がその猫の爪にかかったのが因で落命した。

残っていた雌が、禽舎の金網に止まったところを襲撃されたのだ。むざんにも頭部を食取られている。イカルの雄も胸部を傷つけられた。今春捕獲した、腹部まで深紅色の美しいウソの雄も片足を傷つけられて、生命危篤だ。

これでは、いくらお人好しの私でも腹が立つ。被害者は、私ばかりではない。この辺の社宅中の迷惑である。ローラカナリヤを食害されたのもあり、ニワトリの被害にいたっては、ここもかしこも、である。

猫の好きな人もあろう。

鼠がうるさいからとて猫を飼育している家もあろう。

けれども野猫には困っているだろう。実にすばやく出没するのだから手に負えない。

だからも憎まれているのだから、益々野性に還っていくだろう。

元はどこかの飼猫だったろうけれどー

佐藤垢石さんは、猫の肉を食べたと随筆に書いている。私も、猫の肉を食べたことがある。知人の家で、知らずに御馳走になったものである。軟くて美味だったと記憶している。日光を見なければ、結構と言えない。猫の肉を食べなければ、美味しいと言えない。などという人もあるが、なるほど来てみれば日

光も、食べてみれば猫の味も - というところであろう。

私は、まだ狸汁を食べたことがない。やはり食べたことがないという Nさんと、何かのおりに狸汁の話が出た。その時、道楽で猟をやっている Tさんが、「それでは、狸汁を御馳走しよう」と、いう。

「それなら、酒は私達が持とう」と、話は一決した。

Tさんの鉄砲は、あまり当にならないのだそうだが、雑種ではあるが、日本種の愛犬が主人よりも余程達者らしく、しばしば狸を捕えるのだという。

その後も、Tさんの射たものやら、その犬が捕えたものやら、どちらのものかわからないけれど、とにかく狸を手に入れたという。

Tさんは、私達との約束は忘れてしまったものらしい。

お蔭で私達は、今だに狸汁の味がわからない。

Tさんは鉄砲ばかりではなく、その口先もあまり当にはならないものらしい。

狸汁の代用に、猫汁をなどといったら、野猫は、きっと泣くだろう。

一九五三・九「動物文学」

一四、鳥の足 - 正月漫筆 -

年末年頭となると、人間の千鳥足が、そこ、ここに見受けられる。どうも、どれを見ても、ほめたかっこうではない。本物の千鳥の方が、よっぽど風流である。

千鳥科は、生来、右足と左足の方向が違うのだから、上手否上足であるのに不思議はないが、スズメ科の鳥は、いくら飲んでも - それは水だろうなどと、水をさす人は誰だ - 千鳥足にはならない。それは、生来、両足を揃えて、はね歩くのだから、しっかりしたものである。

雁鴨科の鳥の足には、水かきがある。

人間は、生来、いろいろなまねをしたがる。千鳥足のまねは、意識的なまねではないが、水上に浮ぶ舟は、水鳥のまねであり、空飛ぶ飛行機は、ツバメやハヤブサのまねである。

もっとも、ツバメやハヤブサなどが、足で空中をかけ歩くわけではないから、よけいなことを言うな、と言われれば、それまでだが、よけいなことの、ことのついでに、言わしてもらえば、地上を走る、汽車の特急に、ハトやツバメは一寸おかしい。どうしても、がってんがゆかない。ツバメの足は、地上では、よたよたで、あぶなっかしいものである。昔、ハヤブサ隊という、飛行隊があったが、あれには、私も、文句のつけようがない。つけると言えば、夜道で本物のヨタカに、つけられることがある。

ヨタカの足は、変っている。普通鳥の指は、前三後一なのに、前二後二で、樹枝に、平行して静止する。

オシドリは、水鳥であるが、「泳ぐばかりが能ではない」と、人に知れない、大芸を演じている。お正月に、新婚夫婦お揃いで、御年始廻りの、オシドリ風景などとは、ありふれたことだが新婚どころか、生れたばかりの雛鳥の芸なのである。

オシドリは、カイツブリなどと同様に、水鳥でありながら、その営巣環境を、大いに異にする。カイツブリは、水上に浮巣をつくるが、オシドリは、山林の巨木の樹洞深く営巣する。人間の手も足もとどかない、深い奥底で、孵化した雛鳥は、少しも飛べないくせに、その樹洞を出て来るのだ。オシドリの雛は、キツツキ科の鳥のように、木昇りが上手否上足に出来るのである。人間のあかちゃんなどには、とうてい

まねの出来る芸ではない。成人だって、むずかしいだろう。なに!そんなことがあるものかって?

どこかの運動会の、マスト昇り - 木昇りが本職の電気屋さんさえ、昇れなかったのではなかったか。

木昇りの本当の、本職は、キツツキ科の鳥であるが、五十雀科のゴジュウカラは、木降りをする。昇るのに、都合のよい足があれば、降りるのに、都合のよい足もある。

小鳥には、四十から、五十から、と益々これからののに、人間は、五十五歳で停年なぞとは?などというところから、脱線するなど、しかられそうだから、あげ足を、とられないうちに、このへんで、鳥の足は、止めて置こう。

一九五六・一・一「茨城礦業所タイムス」

一五、鳥の夫婦

蚤の夫婦というのは簡単である。周知の通り、夫小婦大の喩に過ぎない。

鳥の夫婦となると、複雑である。

オシドリ夫婦などと、うらやましいのがあれば、一夫多婦のウグイス夫婦などがある。

蚤の夫婦に似て、鳥の夫婦にも、ワシ・タカなどのように、夫小婦大のものもあるが、キジ・ヤマドリ・ウグイス等は、夫大婦小である。

その、キジ・ヤマドリ等は、雌雄異色であるが、ウグイスは、同色である。

留鳥のスズメ夫婦は、雌雄同大、同色であるが、冬鳥のニュウナイスズメは、雌雄異色である。湿地や水田で営巣繁殖する、タマシギは多夫一婦で、雌は、一号の雄の巣で四-五卵産むと、二号の雄の巣へ行き、四-五卵産み、次は三号の雄の巣へ行く。各々の雄は、その卵を抱卵孵化する。

抱卵するのは、雌ばかりと、雄ばかりと、雌雄交代とがあるが、ツカツクリは、抱卵しない。ツカをつくって、産み放しは、少々横着だろうけれど、ホトトギス・カッコウ・ジュウイチ・ツツドリ等のように、ウグイス・ホオジロ・オオルリ・メジロ等の巣に、托卵し放しという、凶々しい、横着な鳥もある。

一九五六・二・二「茨城礦業所タイムス」

一六、鳥の羽毛

「舌切りスズメ」という童話がある。意地悪や慾張りを、いましめたものであろう。「舌切りスズメ」では、スズメが、美しく着飾って、歌って、踊って、お人好のお爺さんを、いたわっている。

「孝行スズメ」という童話もある。

「孝行スズメ」のスズメは、着た切りである。

スズメは、ほんとうは、年中着た切りなのだから「舌切りスズメ」ではなく「着た切りスズメ」というのが、ほんとうだろう。

クリスマスだ、正月だ、祭りだ、何だかんだと、人間は着飾ることが少ないが、スズメは年中着た切りである。

夏から、秋にかけて、鳥が換羽するのは、周知のことであろうが、スズメは換羽後も、蓑笠をつけたままである。

おしゃれな人間のように、夏羽と冬羽とが、異色なのもある。

スズメの近親では、ユキホオジロ等が、それである。ところがアトリ・カシラダカのように、春季発情の際には、雄が美しく着飾るのもある。サギの一族中には、羽毛が変形して、別人ならぬ、別鳥のようになるのもある。馬子にも衣裳という譬えは、サギにも衣裳ということにもなるだろう。

美しく着飾ったものの美しさはわかるが、美しく着飾らないものの美しさがわかれば、それこそほんとうの美しさがわかる人だと言えるであろう。

正月だ、祭りだと、いくら美しく着飾ったところで、襟垢などつけていたのでは、ほめられまい。

年中着た切りではあるが、どんな厳寒でも、毎日、必ず、水浴や砂浴で、身を清めているスズメは、いつもほんとうに美しい。

親が急病だというのに、燕尾服で、頬紅つけて来たツバメよりは、蓑笠姿のスズメが可愛くなり、ツバメには虫けらを与え、スズメにはお米を与えたという神様。

幼い頃、炉辺で、老父から聞かされたスズメの童話を、想起するのも、お正月だからというものであろう。

一九五七・一・一一「茨城礦業所タイムス」

一七、春の喜び

ウグイスが鳴いている。

いい声だ

谷越に鳴きあっているのらしい

籠のヒワも和して囀る

ヒバリが空高く舞いあがった

うれしくて うれしくて などと囀っているようだ

桜花が風もないのにひらひら散る

一八、花と小鳥

何かの神秘を知ってかしないのか

咲かすにはいられないのであろう花

歌わずにはいられないのであろう鳥

私もじっとしてはいられない

梅よこんな藪かげにおまえが咲いて

私もしばらく鶯を待とう

花が咲いて

小鳥が鳴いて

もうおまえたちはみんなうれしそうだ

私もうれしくなった

一九、この喜びは

斉しく大地に根を張って
斉しく太陽に恵まれ乍ら
イチゴはイチゴ トマトはトマト。

一畝ばかりの庭畑に
同じような肥料をして
これとて同じようなものはない
差別のままの面白さ。

おもえばそれらの無差別な深いつながりよ。

この世に驚異の種子を播きつけた
御身はそもだれだろう？
御身の種子を播きつけて
私のこの喜びを収穫する

一九三四・一「北方詩人」

二〇、偶 感

ハトの生活は美しい。
人の生活もそのようにありたい。

ハトは一夫一婦の生活をする。
そこには人類のような病根は生じない。
人類の生活も、ハトのように正しくあれば
目にあまる社会悪も大いに緩和されるであろう。
一九三九・八「新日本詩鑑」

二一、この世では

スズメたちがフクロウのまわりをとりまいて
しきりにさわぎたぎって居る
フクロウはじっとおしだまったまま夜をおもって居る。

この世ではたたかわねば生かされない
自然の相を賢しくも知ってか みんな。

そのままでよい、
ひとりで生きるものはひとりで生きる
むらがり生きるものはむらがり生きる。

昼に生きるものは昼に生きる
夜に生きるものは夜に生きる。

御身たち以上のものが
いつも御身たちに働きかけて居るのだ
この世では。

この世では山は高い
この世では海は深い
この世の他では無限の宇宙が我ともなろう
それはこの世のものではない
地上にしっかり根を張り足をふんばり
天空に頭をもたげるこの世のものには
この世の山は高い
この世の海は深い

一九三四・一〇「北方詩人」

二二、初秋の夜は合唱する

ころ・ころ・ころ
ころ・ころ・ころ
おおなんと淋しい賑わしさだ
この秋のなが夜を鳴き明すつもりでもあるのか
惜しみなく初秋を歌うがよい
すいっちょん・すいっちょん
などと -
などと
競って鳴き明かすことだな。

御身たちの世界は初秋の夜だ
初秋の夜は御身たちのものなんだから。

そんなことはわかってるって？
なに知らないって？
どっちだっていいだろうって？
なるほどな
だまって初秋の夜が合唱をつづける。

一九三三・一〇「北方詩人」

二三、詩 魂

醜しと、みれば限りなく醜し
美しと、みれば限りなく美し
醜しと、みるも、美しとみるも
限りなく人の心の自由なる
ただみて過ぎるも人の心ぞ
面白からずや
善しと悪しといえる人の言の葉。

小鳥がなかった いい声だ
草花が咲いた 美しい
だれにも小鳥や草花は美しかろう。

詩魂よ
御身は形もなにもない小鳥だ 花だ 美しい。

一九三四・三「北方詩人」

二四、花鳥と私

スズラン・シャクヤク・キキョウ・オミナエシ・ハギ・ノバラ・ノギク
数知れない美しい諸々の草花と、
こうやいたるところ満洲の広野は花畠だった。
野草はみんな霜枯れて見渡す限り灰色の荒野原だが
私の臉には今でも美しい花々が咲く。
ヒタキ・ヨシキリ・ロウライウグイス・ウズラ・カシ
ラダカ・ノジコ・ツバメ・ルリ
数知れない珍しい諸々の小鳥と、
いたるところ満洲の広野は小鳥の家だった。
渡鳥はみんな飛去り留鳥ばかりが痛々しい地鳴ばかりの寒さだが

私の耳梁には今でも妙なる囀鳴がある。
じっと心耳を敬(そばだ)てると、
草花や小鳥のささやきが聞えてくる
私は何かに呼びかけずには居られなくなる。

一九三九・一「日本詩壇」

二五、神の花園

美しい花園
それは永遠の花園
四季をわかたず次ぎ次ぎに花々が咲く。

花々にはそれぞれみんな特長がある
よくみればこれとて同じようなのはない
通性のある同茎の花とて仔細にみれば個性がある。

その美しい花園で
人々はおもいおもいの花を一枝手折っている
人々に許された神の花園の花なのである。
たくさん花なので迷っている人々がある
心ひかれて一つの花をじっとみつめている人々がある
いくつかの花に心ひかれて深く考え込んでいる人々がある
無造作に手折っている人々がある。

ただみて過ぎる人々がある
手折られずに残る花々がある
されど -

人々が少しでも心にとめた花々は
人々の心のなかでは一生涯の花なのである。(一九四二・一一・八)

一九四三・一「詩と歌謡と」

二六、象 徴

街路樹が、すっかり裸になった。
私はそこに、はっきり自分自身の姿をみた。

二七、撰 理

雁の群が、渡りをはじめ。
私達も、いま祖国へ帰る。

二八、自 然

痛々しい、冬が来る。
私達は、裸になって春を待とう。

二九、順

どんな事があっても、自然は自然。
すなおに死ねる心が無くて、
どうして、ほんとうに生きぬく事が出来よう。

三〇、太 陽

太陽は、すべてのものを、斉しく照らす。(一九四五・一〇・一九・天津にて)
一九四五・一〇・二三「東亜新報」

三一、平 和

帰巢のコースをつかめない伝書鳩が迷飛していた。
ハヤブサがすどくそれを驚掴みにした。
平和の象徴？ である筈の伝書鳩には、それを避ける能力が無い。
カラスが二羽それに追い迫った。
カラスは上下からハヤブサを猛襲した。
ハヤブサは伝書鳩を放棄して遠方へ逃避した。

方円の器に従う水には水圧がある。
落差があればとうとうと滝ともなる。
空気には気圧がある。
落差があれば暴風ともなる。
鳥類の落差は鳥類同志が解決する。

真の平和は力によって守られる。

一九五六・九「動物文学」
一九五七・一「日本詩人」

三二、童話雀の田の草取り

ある村に、とても意地の悪いお百姓さんと、とてもお人好しのお百姓さんが、隣りあって住んで居りました。

意地の悪いお百姓さんは、スズメは害鳥だといって、卵を取ったり、雛を取ったり、親鳥を空気銃で射取ったりしました。

そうして、秋になればスズメに稲穂を荒されることも少なくなるといって、一人で喜んで居りました。

お人好しのお百姓さんは、そうとばかりは思いませんでした。お隣のお百姓さんは罪なことをするものだと思って居りました。

ある日、お人好しのお百姓さんは、片翼を空気銃で射たれた、飛べないスズメを、そっと拾いあげました。そして、「可哀そうになあ」

と、つぶやきました。

あたりで意地の悪いお百姓さんが、そのスズメをさがして居りました。

お人好しのお百姓さんは、

「これをさがしてお出でだったのですか？」

と、そのスズメを見せました。

「たしかに命中したと思った。それだ、それだ」

と、誇らしげに目をかがやかせました。

お人好しのお百姓さんは、目をうるませて、

「このスズメを私に下され」

と、たのみました。意地の悪いお百姓さんは、

「この馬鹿」と、思ったので、意地の悪い目をしましたが、しぶしぶと承諾しました。

お人好しのお百姓さんは、大層喜んで、スズメをお家へ持ち帰りました。

飛べないスズメは、すぐにそのお百姓さんによく馴れました。

そのお百姓さんは、スズメのよろこぶ声をきく度に、どんな苦労も忘れて一緒によろこびました。

夏が過ぎ、秋も過ぎ、冬が近づきました。

ツグミ、カシラダカ等の渡り鳥が、遠い大陸から渡って来ました。

「また害鳥どもが来た」

と、意地の悪いお百姓さんは、田圃で鳥追いはじめました。

「落穂一本でも食べられては……」

と、大声で追ったり、空気銃で射ったり、カスミ網を張ったりしました。

間もなく小鳥達は、意地の悪いお百姓さんの田圃には一羽も寄りつかないようになり、意地の悪いお百姓さんの姿をみただけで、どこの小鳥でも皆飛去るようになり、

お人好しのお百姓さんは、「落穂ぐらいいは……」

と、だまって小鳥達を、ただみてすぎるだけなのです。

はじめは、お人好しのお百姓さんの姿をみても飛立った小鳥達が、だんだんには飛立たないようになり、その田圃やお庭で昆虫やこぼれ種を拾うようになり、

飛去ろうとする小鳥があれば、籠のスズメが、

「こわくはないよ」

と、教えるのです。

うれしいとか、かなしいとか、安心だとか、危険だとか、という小鳥の言葉は、どんな異種の鳥にも皆すぐに通じるのです。

お人好しのお百姓さんには、それがよくわかるようになりました。

スズメ・ツグミ・カシラダカ等、皆安心して、お人好しのお百姓さんの田圃で、落穂やこぼれ種や昆虫を食べました。

秋が来て、黄金色の稲穂が出揃いました。

意地の悪い、お百姓さんの田圃には、一面にヒエが交じり、虫害もうけました。

お人好しのお百姓さんの田圃には、ヒエがなく、虫害もうけませんでした。

それは意地の悪いお百姓さんに、害鳥だといわれている小鳥達が、冬中に、お人好しのお百姓さんの田のヒエや昆虫をみんな食べつくしてくれたからなのです。

籠のスズメが、お友達を呼び寄せて、種のうちから田の草取りと害虫駆除を手伝わせたことになりました。(一九五三・七・二六)

一九五三・九「野鳥」

三三、童話 森の鳥

ある山村にとっても悠深なお百姓さんが居りました。

ある日、松山や杉山に混生している桜や雑木を伐採してしまいました。

松や杉は万千円以上になるのに、雑木は - というつもりだったのです。

中風で隠居している老父が、しきりにそれを思い止まらせようとしたのですがい思うようには口がきけませんでした。

父親が病気になったので、若くて家を襲いだ、その若い慾張りさんは、病父の止めようとするものの何だかはよくわかっていたのですが、わからないふりをして伐採してしまったのです。

そして、

「親父は寝床からサクラやヤマボウシの花を眺めて楽しみたいから止めたのだらう - 一文にもならないことだ」

と、笑いました。

父親の眼には涙がうるみました。

「森の鳥が……」

と、いったきりで、あとは沈黙してしまいました。

そのサクラやヤマボウシなどは植林したものではなくて、自然生の樹木で、それはヒヨドリやムクドリなどの落した糞の中の種子が芽生えて生長したものなのでした。

雑木を伐採した後は、その松林や杉森にはヒヨドリやムクドリなどは、もう近寄ろうとはしませんでした。

毎冬北国から渡来して、越冬していたウソなども近寄らなくなりました。

その翌年のことでした。

そのお百姓さんの松林や杉森は大変な虫害を被りました。

そんなので、そのほとんどが枯損しました。

それは、ヒヨドリやムクドリやウソなどが寄りつかなくなってしまったからなのでした。

ヒヨドリやムクドリやいろいろの小鳥達が、サクラやヤマボウシの実を食べるばかりではなく、その実を食べては附近の松杉の昆虫を食べ、ウソなどは、その蕾を食べては附近の松林の昆虫やその卵やさなぎなどを食べていたので、小鳥達の住んでいる間は松杉の有害昆虫の蔓延が拒まれて、自然の平衡が保たれていたものなのでした。

愆深なお百姓さんにも、それがやっとわかりました。

「お父さん、すみませんでした」

病父の眼にもまた涙がうるみました。

病父は一語も発しませんでした、それはうれし涙だったのであります。

一九五五・九「野鳥」

三四、鳥の雌雄

鳥の雌雄 - それは解剖すればすぐわかることです。然し解剖しなければ、わからないでは満足出来ないこともある筈です。

一見しただけで、ニワトリの成鳥の雌雄は、容易に判別されるけれど、スズメの雌雄は、むずかしいでしょう。ニュウナイスズメのように、雌雄異色のスズメは別ですけれど。

雌雄同色であっても、ウグイスのように、雌の翼長は五五耗位、雄は六五耗位という著しく大小のある小鳥はすぐにわかります。然しニワトリやウグイスは、雄が著しく大型であっても一切の鳥が、そうなのではありません。鷲鷹科の鳥は逆に雌が雄より大きいのです。いずれにしても、雌雄異色の鳥の判別は容易ですが、雌雄同色で同大の鳥もあるのです。

それはただ見ただけでの判別は容易ではありません。

カラスの雌雄は、古い昔から、今日でも問題にされています。日本野鳥の会でも問題になりましたが、判明されてはいないのです。(中西悟堂先生のように近くで一見しただけで判別しうる観のある方は別として)雌雄同色で、同大の鳥までも、目撃で判別しようとする事が、すでに問題なのだと思います。

鳥には囀鳴があります。(高音といわれているのがそれです)東天紅?と囀鳴するミワトリは雄だということは、何人も知るところでしょう。たとえ雌鳥が時?を告げる、という例外はあったにしても。

囀鳴するのは先ず雄だと思ってよいのです。(少数の例外は別として)ニワトリは四季を通じて囀鳴するからよいけれども、一般の鳥は、そうではないのです。だから、いつでも、囀鳴で雌雄を判別するという事は、むずかしいのです。

幸い、鳥には囀鳴のほか、地鳴があります。地鳴は大抵四季を通じていますから、いつでも聞ける筈なのです。その地鳴は、ほとんどが、雌雄異声です。

雌雄異色の鳥でも、雛や幼鳥は同色のものもあります。囀鳴をしない、雛や幼鳥は、やはり地鳴で雌雄を判別するよりないでしょう。自然界はよくしたもので、判らなそうでも、それがどうしても判らないということのないように出来ているものようです。

空を飛ぶ鳥、樹間の鳥、地上の鳥、水上の鳥、たとえそれらの鳥達が、同色同大であっても囀鳴をしないときでも、お互に雌雄を識別しあっているでしょう。巢中の雛達同志でも -。

それは地鳴の一声で通じるものと思います。メジロが、チイッ!と一声すれば、それは雄。チョウ!と一声すれば、それは雌。

私が鳥の声を分析した結果では、一部の例外はあったけれども、いずれも雄の地鳴には、Iの母音が入り、雌の地鳴には、U又はOの母音が入っています。

鳥の雌雄は、目撃だけで判別出来るものと、出来ないものがありますから、目で判別出来ない場合は、耳で判別致しましょう。

これはただ面白いというだけではなく、何等かの意味で、人生を益しうるものと思っています。

一九五〇・一一・二二「福島民報」

一九五二・九「動物文学」

三五、ヒバリ

蕃殖期になると、ヒバリの雄は空高く舞昇って、ピイチクピイチクとしきりに囀鳴する。

ヒバリは巢からすぐに飛上るが、降下するときは巢より遠方の地点に飛下りる。

それは巢場所近くに飛下りると、巢を発見される怖れがあるからである - などと、いわれているが、果してそれは本当であろうか?

ヒバリは地上の鳥である。

ツバメのような、空中の昆虫などを捕食するが如き、空の鳥ではないのである。

地上の昆虫や草の実等を常食とするヒバリの採餌場は地上なのである。

平野や丘の地上にあるその巢 - 卵や雛の警戒看守には空中が一番よいだろうけれど -

然しヒバリの雄が四六時中巢の看守ばかりしては居られまい。

地上で採餌もし、雛に給餌もしなければならぬ。直接巢から飛上り、直接巢へ飛下りるとしたなら、採餌する間が無くなるだろう。

ヒバリの雄が直接巢場所へ飛下りないのは、その巢を発見される怖れがあるからではなくて採餌しなければならぬからなのではなかろうか?

「ヒバリは、その巢から飛上っても飛下りるときは巢場所ではないから、その巢がわからない、ヒバリは賢い小鳥です」 -

などとわかったようなことを人々はいうが、ヒバリにとっては、さぞかし面はゆいことであろう。

賢いといえば、ヒバリに限ったことではないが、野鳥達には仲々賢い点がある。

巢場所に近づいた外敵を、擬傷で遠方に誘導して、うまいことまいてしまうことがある。

その擬傷の妙技を演じたばかりに、逆に何気なしに通過しただけの私に、その巢を発見させたという逆効果を来たしたこともあるにはあるが -

いずれにしても、野鳥達のその賢さを否定する私ではないが、ヒバリが、その巢を外敵に発見させないために巢場所の遠方へ飛下りるといふ説には、私は無条件には賛成出来難い。(一九五四・六・一三)

一九五五・三「野鳥」

三六、鳥の飛翔について

鳥の飛び方は千差万別である。ホトトギス(ホトトギス科)が水平に飛び、ヒバリ(ヒバリ科)が垂直に飛ぶのは周知の通りであるが、ヒバリやセッカ(ウグイス科)が垂直に飛ぶのは蕃殖期の雄だけである。平野の地上にあるその巢の妻子を外敵から護るのには、どうしても空から警戒するよりないだろう。

カワセミ(カワセミ科)は比較的遠方で採餌するから、途中は最短距離を直線に飛ぶ。そのカワセミが採餌場では木の葉のようにゆるやかに水面に落下して小魚を集めて採餌を容易にする。

ツバメ達(ツバメ科・アマツバメ科)は昆虫を追い廻すから、きりもみになったりツバメ返しにもなる。従って千変万化の飛翔をする。

地上で尾羽を上下に振るキセキレイ・ビズイ(セキレイ科)等は空中でも波状になる。

チョウゲンボウ(ワシタカ科)は空中の一点に静止して地上の獲物を探す。トビ(ワシタカ科)は円外の獲物を探してだんだん円を拡げてゆく。そのように鳥の飛翔が千差万別なのも千変万化するのも、皆それぞれの目的と理由があるからであろう。

ガン達(ガンカモ科)が隊列を変えるのは風の変化に因るものだろう。追い風には横隊となれば全体が楽に飛べる。向い風には縦隊となれば後方が楽になる。先頭が疲労するから後方が、入れ替る。

鳥がいろいろの飛び方をするのは、遊戯や道楽や道化ではなく、皆それぞれに真剣な目的を持つからであろう。(一九五七・一・一一)

一九五七・三「野鳥」

一九五七・三・二「茨城礪業所タイムス」

三七、黄鳥異変?二題

最近こちらでコウライウグイスの棲息を確認しましたが、清棲(きよす)さんは信じられないと言っていました。

私は朝鮮方面の亜種だと思っていますが、これは非常に重要な問題で、発表には尚日をかけるつもりです。三年も継続して目撃、それも晩夏の頃、桜ン坊を食いに来るんですから間違いはないと思われますが……(七月八日) 北海道 永田洋平

先日平市で、石城郡の山村でコウライウグイスらしい鳥が住んでいるという人があったという話を聞きましたから、来春は観察したいと思っています。見なければ信じられないことですが、事実とすれば迷鳥だろうと思います。(八月二十四日) 茨城 山縣深雪

一九五五・一「野鳥」

三八、コウライウグイスについて

「野鳥」第一六九号の「黄鳥異変?二題」によれば、終戦後コウライウグイス(黄鳥(こうちょう)科)は日本の福島県と北海道間に移住し、繁殖しているもののように思考されるので、私は戦時中満洲で観察し

た、その成果を拙著『満洲の野生鳥』より抜粋する。今後同地方に於ける野鳥の会会員諸氏の御研究の資料としていただければうれしい。

- 1 満洲に於けるコウライウグイスは夏鳥である。
- 2 大いさは、カケス位である。
- 3 色彩は過眼線と翼と尾の一部は黒色であるが、他は皆黄色である。雄は濃黄色で、雌は緑黄色。雌は淡紅色。足は淡黒色。
- 4 環境は、低山帯山腹の潤葉樹林野。
- 5 鳴声は、警戒鳴が、ギアーオギアー。囀鳴は、キョトホ、キッキョトホ キョトホ キョトホホ キッキョトホ キョトホホを繰返し、キッキッキョトホホッホッホホ キョトホ キッチョホ キッキッキョトホ キッキッホ ホホヒッヒッ ヒッヒョッ ニギイ ニギア キッキッキョトホ キッキットホ等と長く朗かで他鳥の囀鳴と紛れるおそれがない。
- 6 食性は、動物質(昆虫の幼成虫等)を主とする。
- 7 巢材は、綿・紙・禾本科植物(根・茎・葉・穂)やハギ等で、鳥獣の羽毛を用いない。
- 8 巢は、落葉樹の下枝の二叉に吊巢を造る。内径九〇～一〇〇耗。外径一一八～一二〇耗。深さ六〇～六八耗。地上高三米内外である。
- 9 卵数は、一腹二～四卵。
- 10 卵は、大いさ長径二九・五～三三耗。短径一九・五～二〇・五耗。重量六・七～七・ 瓦。
- 11 卵の色彩は、美しい淡紅色で栗褐色斑点がある。殻が極めて薄く破損し易い。
- 12 その他、特徴として、日光の直射をさけるためか、卵や雛を外敵から護るためか、巢口は小枝の葉かけにする。蕃殖期には半径五〇〇米以内に同種の営巢を許さない。

一九五五・五「野鳥」

三九、渡り鳥

初秋の頃、夏鳥のツバメ・ショウドウツバメ・イワツバメ・アマツバメ等が順々に南方に渡去した後で、コシアカツバメだけが渡り遅れている十月中旬頃になると、冬鳥のジョウビタキが、先ず北方から渡来し、十一・十二月となれば、ベニマシコ等が渡来します。

尚、野鳥中には留鳥でも、その一部は渡去するのもあるのです。

春秋二季に、鳥達が渡来・渡去するのは、それにはいろいろの学説があるようだけれども、私の観察によれば、主として食糧の欠乏に因るものと思われま。

私は、戦時中八カ年ばかり、大陸の各地炭礪や鉱山に勤務の傍ら、野生鳥を観察して居りましたが、北満に勤務中の冬、北満では夏鳥のベニマシコを、禽舎の周囲に給餌して、無事越冬させたことがありました。

さて、ツバメが翌春、元の家や近所の家へ帰来するという事実は、標識によって、確認されている例が沢山ありますが、それはツバメだけが、元の場所へ帰来するのではないようです。オオルリ等も、元の杉森に帰来し、元の場所附近で営巢します。

よく、峠定めぬ渡り鳥といわれますが、実は渡り鳥の峠は定まっているのです。

私は、毎年ジョウビタキその他の峠を観察して居りますが、冬鳥でも同一の場所に渡来し、同一の峠

を埒とした、ジョウビタキその他があった事実を確認して居ります。埒定めぬ渡り鳥 - などとは、渡り鳥にとっては、甚だ迷惑千万な失礼な言葉だと思われませう。

野鳥達は、繁殖期には、古巣を利用する場合がありますが、繁殖期以外は、その巣を埒とにしないのです。巣場所以外に定めた埒が本当の埒になるのです。

春、夏鳥達が同時に渡来せず、秋、同時に渡去しないのや、秋、冬鳥達が同時に渡来せず、春、同時に渡去しないのは、それは、例えば、ツバメ科の鳥にしたところで、種が異れば、その食物も異なるものがありますから、草木の花が順々に開花結実するように昆虫等も順々に発生成育するように、従って、その順序が、自ずと生じているわけなのです。

年々気象のずれが生じるので、草木-昆虫-渡鳥とみんなにずれが生じます。気象の変化によっては、その種の分布限界附近では、渡来しない場合も生じます。渡り鳥の分布限界は、種によって皆異なりますから、春、ツバメやオオルリ等が、渡来し、ガンやジョウビタキ等が渡去ということにもなるのです。

北半球では、留鳥以外の野鳥達は、春になれば北方へ移動し、秋になれば南方へ移動するのです。春になれば、低山から高山へ移動し、秋になれば高山から低山へ移動する - 例えばアトリ科のウソ・アオジ等もその目的は同一なのです。春は北方又は高山へ、秋は南方又は低山へ、一切の渡り鳥は移動します。

春、南方又は低山へ、秋、北方又は高山へ、等と移動する渡り鳥はありません。渡り鳥が交代する - つまりクローズするという事はあり得ないのです。

一九五四・九「動物文学」

四〇、伝書鳩について

伝書鳩の飼育が盛になったのはうれしい。ところが、伝書鳩の、帰巢性が高いからといって訓練を誤り、いきなり一〇〇軒以上も遠方から、放す人があるようだから、そのような無理を、繰返さないようにしたいものである。一軒位からはじめて、二軒・三軒と、だんだん気永に、正しい訓練を積むことである。

いきなり、遠方から放せば、帰巢のコースの目標が掴めないで、迷っているうちに、トビ・ハヤブサ・ノスリ・クマタカ等の、猛禽の餌食となる場合が少くない。

鳩は夫婦仲のよい、一夫一婦の鳥で、一番を放して、一羽だけ帰巢などということは無い。一羽しか帰らなかったということは、途中で円翔迷飛中に、外敵の襲撃を受けたものと思ってよいだろう。目標を掴んだ直翔中に、犠牲となることは稀な筈。主人より一昼夜以上も遅れて、帰巢などとは、未知のコースであったからであろう。

ツバメが、毎春遠い南方から、間違いなく帰巢するのは、老鳥の指導者が、既知のコースを誘導するからなのである。

野鳥にとって、大なり、小なり、帰巢の通性は本能化していても、先天的な個体差などもあるが、経験が、最も大切な知識なのである。コースの定めようのない、遠方から、いきなり飛ばすようなことの無いように、心して訓練すべきだと思う。(一九五六・三・五)

一九五六・三・一六「茨城読売・私の席」

一九五六・四・一一「茨城礪業所タイムス」

ハト飼育を禁止 土浦三中「夢中になり学業怠る」

『土浦市第三中学校(校長市村好雄氏)はこのほど発行の「家族通信」で生徒のハト飼育を禁止し、その代わりに家庭でニワトリ・ウサギを飼うよう保護者の協力を望んでいる。

ハトを飼うのをやめさせるのはまじめに飼っている生徒には気の毒だが、ハトを飼っていると訓練中ハトを追うための投石から屋根瓦・ガラスを割ったり、生徒同士のハト交換・売買・レースでカケをやって他人のハトをとるとか、エサを盗んだり、ハトに夢中になって学業をサボる生徒が出る傾向があるなどを理由としている。』云々。

二月二十七日付「茨城読売」のこの記事を読んで、私は次のように「ハト飼育禁止に反対」を発表した。

四一、ハト飼育禁止に反対

土浦三中では生徒のハト飼育を禁止、その代わりにニワトリ・ウサギを飼うよう保護者に希望していると、さきごろの「茨城読売」に掲載されたが、これは近視眼的功利主義のきらいがある。

ハトの飼育を禁ずると、またメジロ・ヤマガラなどの禁鳥・保護鳥乱獲飼育のおそれが生ずるだろう。ハトを飼育することによって一部に訓練中のハトを追うための投石、生徒間の交換、レースのカケ、学業の低下等の害がでたもようであるが、これは教育者と保護者の理解深い善導さえあれば防止しうるものであろう。ハト飼育生徒のハト訓練をよく指導し補導もして情操と科学へのよき道しるべとしてもらいたいと教育者に望む。

「花鳥を愛すは聖なり」ニワトリやウサギを飼育して利益をあげるといような目先のことばかりにとらわれるべきではない。

「夢中になり学業を怠る」というのはハト飼育に無関心な第三者の表面だけの皮相な観察に過ぎないだろう。一部の小さなマイナスは大目にみて、大きなプラスを理解してハト飼育を禁止しないで欲しい。

一九五七・三・二六「茨城読売・私の席」

四二、例 外

ある人が、私にドバトを二羽見せて、雌雄を判別して貰いたいという。私はスケールを借りて、その二羽の翼長を測定したが、二羽共に、二三〇耗ほどであった。

それで、私は、これは双方共に雌か雄かであろうが、先ず翼長が、二三〇耗もあるのだから雄ではなからうかと答えて置いた。

(雌の翼長は二二〇耗位である)

ところが、後日その人が来て曰く、その一羽が、このほど産卵したという。

私はわからなくなってしまった。

ドバトの雌雄は、同大ではない筈であるからである。

一羽は例外の大型雌ででもあったのだろうか？

それとも、スケールの読間違いであったらうか？

気になったので、その後、その家を訪ねたおり、庭で無心に遊んでいる、その二羽を観察したが、気

のせいが一羽が一寸小型に見えた。その人が不在だったので、再測定は断念して帰ったが、測定に誤りが無かったとしたら、例外の雌ということになる。例外であったなら、面白い例外であると思う。

一九五五・一・一「茨城礦業所タイムス」

四三、夏の夜の鳥

1 (フクロウ科)

五月上旬から、六坑住宅附近の針葉樹林中で、ウオウ、ウオウ、ウオウ……と、うなり声に似た声が、毎夜十数回繰返して夜あけまで続いている。

何という鳥の鳴声かと、同じような質問を数回受けたので、タイムス紙上で回答する。

あれは、フクロウ科のオオコノハズクで、フクロウ科は三十二種もあるが、この附近では、フクロウ・アオバズク・オオコノハズク位しか繁殖しない。

ゴロツ……ゴロツ……ゴロツポウと、鳴くのがフクロウで、ホウ、ホウ……ホウ、ホウ……と二声ずつ鳴くのがアオバズクで、ウォウ、ウォウ、ウォウ……と、連続鳴きつづけるのがオオコノハズクである。

ブッ、ポウ……ブッ、ポウ、ソウ……と、鳴くのがコノハズクで、ブッ、ポウ、ソウ……という鳴声を聞いたという人があったが、私はまだこの附近では耳にしていない。

フクロウの翼長は、二九〇～三三〇耗。

アオバズクの翼長は、二〇七～二二八耗。

オオコノハズクの翼長は、一五五～一八五耗。

コノハズクの翼長は、一三五～一四五耗。

尚、フクロウ科とワシタカ科の鳥は雌が雄より大型である。(一九五四・六・二六)

一九五四・七・一「茨城礦業所タイムス」

2 (ホトトギス科)

ホトトギス科は九種ある。

フキョ! キキョ! と、二声ずつ鳴くのが、ホトトギスで、

カッコウ! カッコウ! と、鳴くのは、カッコウで、

ボン・ボン・ボン ポンと、鳴くのは、ツツドリで、

ジュイッチ! ジュイッチ! と、鳴くのは、ジュウイチである。

ホトトギス科の鳥は、自身で営巣せずに、他種の鳥の巣に托卵し、育雛もしないという横着な鳥である。

ホトトギスの翼長は、一六二～一六四耗。ウグイス(鶯科)の巣等に托卵する。

カッコウの翼長は、二〇五～二二〇耗。オオヨシキリ(鶯科)・モズ(鴟科)・ホオジロ(花鶏科)等の巣に托卵する。

ツツドリの翼長は、一八八～二〇八耗。サンコウチョウ(鶺鴒科)・センダイムシクイ・ヤブサメ(鶯科)等の巣に托卵する。

ジュウイチの翼長は、一九三～二一五耗。オオルリ(鶺鴒科)等の巣に托卵する。

3 (ウグイス科)

ウグイス科は三十三種ほどあり、ヨシキリが、昼夜鳴き続ける。戦時中、大北川筋で営巣蕃殖したのは、オオヨシキリで、戦後は稀になった。

ギョギョシ……ギョギョシ……又は、
ゲッゲッ・…:キリキリキリ! ゲッ ゲゲッ! 等と鳴く。
オオヨシキリの翼長は、八〇~九〇耗。

4 (チドリ科)

チドリ科は十七種ほどで、大北川の河原で、蕃殖するのは、イカルチドリだけのようである。

ピョ ピイ と、昼夜鳴く。
イカルチドリの翼長は、一三〇~一四〇耗。横川方面でも蕃殖する上流の千鳥である。

5 (ヨタカ科)

ヨタカは三種だけであるが、樹枝に平行して止まる、変った鳥で、ギョッ……ギョッ……と、鳴く。

ヨタカの翼長は、二〇五~二二二耗。
地上に一~二個産卵する。

6 (サギ科)

サギ科は二十種程ある。

通称の夜鴉は、ゴイサギである。

ガア……ガア……と、鳴く。ゴイサギの翼長は、二六〇~二九〇耗。

通称の星五位は、その幼鳥である。

一九五四・九・一「茨城礦業所タイムス」

四四、秋の鳥

鶇科の鳥は、主なるものに、モズ・チゴモズ・オオモズ・オオカラモズ・カラアカモズ・シマアカモズ・タカサゴモズ・モリモズ等があるが、当地に棲息する鶇は、モズの種類だけである。

モズが鳴き初めると、秋が来たという感じが深まる。

秋の鳥といえば、先ずモズからということになるだろう。

キチ! キチ! キチ! キチ! と、その鳴声は、吉! 吉! 吉! 吉! と聞けて人の心を悦ばせる。モズは面白い小鳥で、スズメ・ウグイス・コカワラヒワ・ヒヨドリなどの擬声が上手である。

秋には、蕃殖を了えて、南方へ渡去した筈の、オオルリの、パイ……チイ……ポイ…ジイ……と、時ならぬ囀鳴を耳にした私は、その杉森に近づいて、観察したところ、やはりモズの擬声だったので、微笑を禁じ得なかったこともある。

これから落葉樹が裸になると、山野でよくモズの早聲が見られる。イナゴ・バッタ・蛙・鼠・雀等。当地ではモズは留鳥で、冬の食糧不足を補う意味でもあろう。

モズの翼長は、八〇～九〇耗。猛禽であるから、自分より大型のツグミ・ヒヨドリ等を襲撃して、捕食することもある。

満洲にはオオカラムズという、翼長一一五耗位の大型の鴉が棲息しているが、日本の鴉と異って、動作がとても緩慢である。

鋭敏な肉食鳥の日本のモズでも、ホトトギス科のカッコウに托卵されると、それを孵化して哺育する。

翼に白斑のあるのが雄で、雌にはないから、一見して、その雌雄が判明する。

「可愛い子には旅させろ」と、いう諺があるが、留鳥のモズでも、その幼鳥は、秋になると南方又は低地へ旅立ちをする。

北半球では、秋に南方から北方、又は低地から高地へ渡去する野鳥はない。

モズが、稍で、けたたましく秋を告げる頃には、夏鳥のツパメやオオルリは、蕃殖を了えて幼鳥も成鳥も、悉く南方へ渡去する。そして、北方から、ジョウビタキ・ツグミ・ガン等が渡来して、越冬する。ジョウビタキ等も、秋には南方へ渡去という訳である。秋の鳥といえば、留鳥以外は皆、北方又は高地から渡来した鳥である。(一九五四・一〇・一〇)

一九五四・一〇・一一「茨城礪業所タイムス」

四五、アカショウビン

六月二十六日朝、東京電力大北川石岡第一発電所所長根本末吉氏から電話があり、「嘴と足が深紅色で身体も赤い小鳥が発電所へ飛込んだので捕獲したが、何という鳥でしょうか?」との照会であった。

「珍しい鳥で、翡翠科のアカショウビンでしょう」と答えて置いたところ、後から又電話で「差し上げましょう、第二発電所へとどけますから、受取って下さい」とのことで頂戴したが、翌朝落命したので、早速解剖したところ、頭とももに内出血があった。おそらく、発電所内を飛回っているうちに、負傷したものであつたらう。胃中のもは、消化後で、検出不能であった。雌で、ヒエ粒大前後の卵が二十個あった。アカショウビンは、雌雄同大同色の鳥で、背面は赤褐色で、紫色光があり(肉も赤褐色で紫色光がある)その嘴と足は深紅色で、腰には銀蒼色の光を帯びている。腹は淡色であるが、同科のカワセミと共に、驚くばかり美しい鳥なのである。

翡翠科の鳥は、土中に横穴を穿って産卵する。樹洞に産卵するフクロウ科の鳥と同様に、その卵は卵形ではなく、球形である。

鳴声は、キョロロロロロロ……キョロロロロロロ……を繰返し、五～八月の夏鳥で、雨天によく囀鳴するから雨降鳥の別称がある。

大北溪谷の翡翠科は、留鳥のカワセミが普通に蕃殖するが、アカショウビンはヤマセミと共に稀種である。ヤマセミは越冬する個体もあるが、アカショウビンは越冬しない。

翼長は一二二耗。尾長七〇耗、嘴峰五〇耗。全嘴長六五耗、? 蹠長一四耗、重量一〇〇瓦であった。尚当地方では、ナンバン鳥の別称もある。嘴の形態や色彩が、ナンバン(唐がらし)に似ているからであろう。

一九五六・一〇・一「茨城礪業所タイムス」

四六、情操について

四月十五日 - 山神祭の日であった。ある青年が、私の庭に集まっているスズメを空気銃で射撃した。日本は法治国である。その青年が、もう狩猟期を過ぎているということ、知らない筈は無い。住宅地内での空気銃使用が、禁じられているということも知らない筈はない。すべてを承知の上でのことであるだろう。

こんな人達が、日本にはまだまだいるのだということが、なげかわしい。自分自身の欲望以外は考えられない、我儘な人なのである。

日本人はまだまだ十二歳 - ひいき目にみても青二才 - と他国から、軽蔑されるのもやむを得ないことだろう。

全く戦後の日本は、百鬼夜行から、白昼横行の醜態だらけである。もうこのへんで、日本人の情操を、ぐっと高めないことには、日本全体の、将来がおもわれてなくなる。

私は、この写真を見よと叫びたい。この世には、この写真のように、野鳥が人の肩や手に飛来して、親しんでいるところもあるのである。

猟期はいうまでもなく、繁殖期中でも、空気銃で、野鳥を射まくるものがあるのだから、日本の野鳥にとっては、とうてい人間に親しめるわけがないだろう。日本人の情操の低さ - それは一部のものではあっても - 全体のために、そのような人の一人もなくなるようにと、祈らずにはいられない。

日本では、まだまだ巢引鳥の、手乗ブンチョウ位という程度である。

写真は、オーストラリアの、人と野鳥ゴシキセイガイインコの生態である。日本野鳥の会黒田長久理博御紹介の「野鳥」第一八一号の、写真の複製であるが、日本の、人と野鳥の生態とよく比較検討して貰いたい。(註・写真は割愛)

一九五七・五・一「茨城礪業所タイムス」-

ヒヨドリは害鳥

昭和二十八年十一月二十一日読売新聞「気流欄」に次のような記事があった。

『猟銃を一度も手にしたこともなく、鳥獣捕獲についての規則も知らずにいた私は「ヒヨドリ」が益鳥として保護され、捕獲出来ないことを知って驚いた。ミカン栽培を業とする当地では「ヒヨドリ」ほどの害鳥はほかに例がないくらいである。ミカンが色づき始めるころから、採取直前にかけて「ヒヨドリ」がミカンを食うのであって、近所のミカン園が採取を終りポツンと未採取の園が残ってでもいようものなら、数十羽、数百羽が集まって来て、あっと、いう間に食い荒し、その害はきわめて大きい。

一町歩にみたぬ私のミカン園でさえ、すくない年で十数貫、多い年には数十貫の被害をうけており、当地の全ミカン園の被害を総合したら多大な数量にのぼることだろう。数年前、ある学者が学生に捕獲させた数十羽のスズメを解剖した結果、腹中に米粒を見なかったとて、スズメを害鳥でないとの説をとなえたことを覚えているが、米粒をまるのみにするのではなく、未熟な米の粒のシルを吸っているスズメどもを目の前に見ている私たち百姓は、そんな学者の空論に怒りさえ感じたものである。たぶん「ヒヨドリ」も害虫を食うので、保護益鳥となっているのであろうが、ミカン作りの私たちにとっては、益鳥どころではなく、にくむべき害鳥である。今年は例年になく「ヒヨドリ」の数も多く見られるし、被害も大きいようだから、当局に再検討していただき、ミカン栽培地における「ヒヨドリ」の捕獲を許可してもらいたい。』

(静岡県・望月幸男・農)

そこで私は、同月二十五日付で同欄に次のような反対意見を発表した。

四七、野鳥には益鳥が多い

二十一日の本欄「ヒヨドリは害鳥」を読んで驚いた。ミカンにとっては有害であるからといって、これに害鳥の烙印をおすのはかわいそうだ。ミカンばかりが人類の必需品ではないからである。

ヒヨドリが森林中の害虫を駆除する功績は大きい。またスズメも同様である。スズメはいつもたんぼにでてその幼虫を駆除しているのを知る人は少なからう。ツバメが空中で成虫を捕食する事は何人にも目につきやすいが、スズメが作物の根元で幼虫を捕食することはなかなか人の目につきにくい。いまでは新農薬が出来て田の草取りの苦勞が緩和されたとはいえ、新農薬で禾本科植物のヒエは枯死させられまい。始末におえないそのヒエの種子を食べてくれるのがスズメたちなのである。

害・益をよく比較検討すれば、害鳥などという野鳥はなくなるだろう。かるがるしく「ヒヨドリは害鳥」などとヤキ印をおすことは議論の余地があろう。あらゆる野鳥はみな害と益とがある。害をうけたならばその害の防止だけにつとむるべきものだと思う。稲田にはカカシがある。ミカン畑にもなにかの工夫をこらすことである。(茨城県・山縣深雪・日本野鳥の会会員)

四八、スズメ論議

昭和三十年十月一日付の読売新聞気流欄に、「スズメ退治にカスミ網を」と題して次のような投稿が掲載された。『大豊作をたたえる農村にとって目下頭痛のタネは、せつかく実った稲穂を容赦なく、ついばむスズメ群の襲来である。近ごろはスズメもずくなつてカカシや鳴子ぐらいではおどしがきかない、と農村の人は嘆いているが、スズメの被害は決してバカに出来ない。一秋一羽のスズメがついばむ量は約一升と称されることによつても推測されよう。したがつて被害高も全国では数百万石にのぼるのではあるまいか。』

スズメは習性としてつねに大群をなし、つぎからつぎへ移動的に荒し回り、数町歩丸坊主にされたところもあるという。この農村の大敵を一網打尽にするには、法律上禁じられているカスミ網を用いる以外に方法がないといわれている。営利的にはほかの益鳥を捕獲するためカスミ網を用いることは悪いが、国民の主食を食い荒す害鳥を退治するのだから、是非カスミ網を許可して欲しいことは一般農民の声である。当局の善処を望む。』(栃木県・加藤晩秋)

そこで私は「カスミ網に反対」と反駁し、同月五日付同欄に次のように掲載された。

一日の本欄「スズメ退治にカスミ網を」を読んだが、一秋一羽のスズメが一升の稲穂をたべるというのは少し話が大きすぎないか。スズメは秋季稲穂だけを食害するものではない。スズメは好んでヒエをついばむことを忘れてはならない。スズメは除草の不完全なヒエのある稲田に集合したがるものであるから、稲田にあるヒエ除きが大切であると思う。年間を通じてスズメの害・益を比較検討すれば、決して害鳥でないことがわかるだろう。スズメが稲の成熟期に食べる害虫の数も少くないことを知るべきである。

短い秋季だけの被害に逆上してスズメを目の敵にし、カスミ網で一網打尽などとは一文惜しみの百知らずというものであろう。カスミ網の使用を許可すればスズメに限らず鳥類が激減し、自然界の平衡が破

られて、農林業者にとってかえって損なことがおこるだろう。カスミ網の使用を許可しないよう、当局に慎重を望む。(茨城県・日本野鳥の会会員・山縣深雪、なお同様の意見が多数ありました一係)

ところが同月九日付で同欄に「スズメ退治に名案を」という次のような一文が掲載された。

『今年農林省がスズメ追いに奨励した「銀紙のカカシ」は案外効果がなく、在来の「一本足のカカシ」にも劣る。私は一枚十五円の銀紙を反当り二十五枚、二反歩で五十枚試用したが、この代金七百五十円は結局丸損だった。この上はどうしてもスズメ退治に絶対的なカスミ網の使用許可を望んでいたが五日付本欄で「カスミ網に反対」という非難を読んで、無理に押切る勇気もなくなった。

科学知識に乏しいわれわれ百姓は、毎年稲作に膨大なスズメの食害をこうむりつつ、万策尽きた形である。そこで農林省にお願いするが、従来のやり方と根本的に違う、たとえば電気応用とか、スズメの習性を逆用した科学的な名案を編み出してもらいたい。

なお本欄の「カスミ網に反対」の文中に「一秋一羽のスズメが一升の稲穂を食べるとするのは少し話が大き過ぎる」とあったが、早稲の乳熟期におけるスズメ一羽の食害は、やがて二升あるいはそれ以上の米量に匹敵するだろう。』(栃木県・農業・石田清夫)

同月二十六日の読売新聞に次のような記事が特集された。

スズメは退治してよいか、

豊作奪うギャング

害は少く愛らしい

真向から両意見対立豊作の秋をついばむスズメ群が農家の頭痛のタネになっているが、最近本紙「気流」欄に一連の論議が展開された。一日付で「ギャング"スズメ"の退治にカスミ網を」と栃木県の加藤晩秋氏が提唱。これに対し五日付で「カスミ網に反対」と茨城県の山縣深雪氏がスズメ益鳥説をのべ、九日付地方版で栃木県の石田清夫氏が益鳥説を反駁しながら「スズメ退治に名案を」と訴えた。これらをめぐって、さらに多数の投書がよせられ、論争の焦点はカスミ網の是非からスズメは益鳥か害鳥かに移り、はては農村に対する不満をぶちつける都会の主婦さえあらわれて、論議の背景が意外に広いことを示した。以下その代表的なもの専門家意見を特集してみた。

退治しよう

害は秋ばかりでない

スズメの害は秋だけではない。

オオムギ・コムギを非常に害する。私の近所の畑では、反当六俵くらい収穫出来るのだが、スズメのため三俵しかとれなかった。またアズキを食べる。苗代を害する。野菜類をまいた畑で砂水を浴び種を掘ってしまう。乳熟期のものは穂全体をクチバシでつぶして乳液を吸う。スズメは虫も食べるが、ウンカの類はほとんど食べない。トンボ類は非常に好むのだ。(埼玉県羽生市・農業・入山豊春)

カスミ網使ってもとれ

カスミ網によるスズメ退治は許すべきでないとする主張に私は百姓としての立場から反対である。それは一般的にスズメは害鳥だとする定説と、それを裏付けるに十分なスズメの野なかにおけるふるまいをみれば、ただ単に鳥類を保護しなければならないという十羽一からげの観念論は、あまりにもタンボの実情にうといといわねばならない。

汗と愛情で一心に育成した作物が、スズメのしつような攻撃にいためつけられるのを見て、なんとかならぬかと憤りを感じる。この気持は農家の人でなければわからないものだ。(千葉県・農業・保利生)

論より証拠・胃袋に米

昔から農民はバカだから自分の作物を荒されても、スズメは益鳥だからといわれると、そうかなあと引っ込んでしまう。まことに残念な職業だ。なるほど一羽のスズメは一秋に一升の米は食わぬという茨城県山県氏の説は本当としても、もしヒエを常食とするなら胃にヒエがたくさんある筈だ。そう思って私は早速スズメを十羽いけどりにしてみた。悪いかもしれないが実験に胃袋を切ってみたら、驚いたことに平均一羽の胃袋から米粒六、ヒエ二、そのほか草の芽らしいものがたくさんでてきた。これは隠せぬ数字である。確かにこのとおりスズメは"米のギャング"だ。(群馬県伊勢崎市・農業・小杉安男)

退治してはダメ

農家のエゴイズムだ

カスミ網論者は、日本人の主食がスズメに食われるのは大問題というが、はばかりながら私たち都会に住む者は、日本米は月に八日分しかいただいていない。あとの二十二日は外米・パン・うどんで暮している。今年は七千六百万石とれたというが、それでも私たちの口へ入る分はふえそうもない。そんな米がスズメに食われたとあって、痛くもかゆくもない。

それよりも自分の商品を守るために小鳥の命を大量に奪おうとする農家のエゴイズムに腹が立つ。いま日本米が私たちの主食のわずかな部分にしかなくなっていないのもいろいろの理由はあるが、根本は農家のエゴイズムにあり、スズメは愛らしい動物なのだ。(東京都北区・主婦・岩崎芳江)

追払えばすむこと

私がスズメを穀類だけで飼育してみた結果によれば、年間一羽の食量は五二〇〇グラム(約三升六合)であった。「短いイネの成熟期に食害する量が一升」というのを肯定しえない理由がそこにあった。スズメは秋季でも昆虫を捕食するしヒエ等も好んでついばむ。それらを差引くとスズメ一羽が一秋に食害する米量をはるかに下回る。

益と害を比較検討してもわかるように、必ずしも害鳥ではないから、害の方の防止だけにつとめればいいと思う。

スズメの食糧は稲穂だけではないのだから秋季には田圃からスズメを追い払えばよい。スズメの食害はいわれるほどのものではないはずだ。(茨城県・日本野鳥の会会員・山縣深雪)

専門家の意見

害鳥は入内スズメ

鳥類学者・農学博士内田清之助氏の話

スズメは春から夏にかけては有益、秋から冬にかけては有害のものだということと、種類が二つあることをまず頭に置く必要がある。冬だけしかいない渡り鳥の入内スズメは確かに害鳥だ。しかしこれは特殊なものであって、普通のスズメについて相対的にみれば、決して害鳥とはいえない。その証拠に沢山のヒナの胃袋をさいてみると、虫類・雑草・穀物が五・二・三の比率であることがわかる。それゆえ益対害の割合は七対三となり、差引四だけ人間の生活に益を与えていることになる。穀類の病・虫害に比べ、スズメのおよぼす害は極少なのだが、益は目につきにくい上に、スズメの害のしかたが派手で目につきやす

いので、とかく害鳥呼ばわりされるのはスズメにとって気の毒なことだ。

農林省林野庁猟政調査課農林技官・池田真次郎氏の話

スズメは益鳥か害鳥かを一言のもとにきめることは不可能だ。例えばイネの乳熟期にあたる八月中旬から刈入れ時にかけて、農村ではスズメはたしかに害をなす。しかし日比谷公園の芝生は、虫を食べてくれるスズメがいなかったらたちどころに枯れるだろう。このように全体的な観点から考えると、スズメの及ぼす害益はちょうど五分五分ということになる。しかも現在世界的に鳥類は減少してゆく傾向がある。可愛い小動物を保護していくのが文化国家の義務ではなからうか。功利的にばかり考えずあたたかい気持ちでスズメに接してやってほしい。しかしスズメが農民の頭痛の種であることは事実であり、被害を防ぐことも必要である。スズメには普通のスズメと渡り鳥である入内スズメの二種類があり、入内スズメは毎年八月中旬になるとシベリアから新潟県の福島潟附近に到着し、穀倉地帯を荒してまた引揚げていくという農民の敵である。そこで当局としてもこの種のスズメ駆除対策には本腰を入れ、届出のあった場所に係員が出向いて調査の上、無双網・地獄網または鉄砲などの使用を許している。それゆえ被害のひどい場合は各県庁の林務課または林政課に申出ていただきたい。

四九、スズメは益鳥

カカシの効率を高めよ「野鳥」第一七三号の編集後記に「いくら一年を通じてみれば、雀の害益はほぼ相半すると理屈をいってみても、自分の田圃にむら雀がドツと押寄せるとをまのあたり見ての農家の憤激は無理もない」とあるが、スズメは年間を通じてみるまでもなく、秋季だけでも害益は相半するだろう。スズメは秋季でも虫を捕食するし、ヒユや雑草を好んで啄む。稲穂だけが食物ではない。スズメ一羽の年間の食グラム量は、約五二〇〇瓦。短い稲の成熟期にスズメ一羽が食害おする米量は推して知るべく、思ったより僅少なものである。私がスズメを稲穂だけと、ヒエだけと、種々混餌とに分けて飼育してみた結果によれば稲だけは例外なく最短命であった。

スズメの主食物は稲ではないということは解剖によるデータ等も沢山ある。スズメの害益を比較検討すれば益鳥という結論を得るだろう。少しばかり稲穂を食害するからといって、害鳥だなどとスズメを目の敵にするのは狭量も甚だしい。「スズメの大量捕殺」などとは一文惜しみの百知らずだと思う。カスミ網などでスズメを大量に捕殺すれば、自然界の平衡が破られて農林業者にとっては、かえって、取りかえしのつかない大損害を蒙るだろう。スズメの食物は稲穂だけではないのだから、稲の成熟期には、スズメを追い払えばよい。稲穂は豊富で容易に啄むことが出来るし、好物のヒエも混生しているから、スズメ達は田圃に集まるのだろう。田圃にはカカシがある。カカシに委せ切りにせず、少しはカカシの効率を高めるように、工夫したらどんなものであろう。

それで私は、カカシの効率を高める一案を提供しよう。

早朝スズメに発見されないように、カカシの下にかくれていて、スズメが集まったら空砲をうつことである。スズメは驚いて飛び立つが、一部分はすぐ原因探究に引返して偵察に当るから、戻って来たのにもカカシの下にかくれたままで又発砲する。スズメを追い払った後、退去するときにも、スズメに正体を発見されないように要心することが肝要である。偵察のスズメには、カカシが発砲したものと誤認させることである。そのスズメにカカシは発砲するもの、怖いものと思込ませ得たら、もう成功なのである。少しは辛棒を要するが、毎日鉄砲を持って追廻すよりは効果が大きい筈である。

スズメは害益相半などという程度のもではなく、実は立派に益鳥なのだから、大量に捕殺などと軽拳することなく、田圃から追払えばよい。重ねていうが、スズメの食物は稲穂ばかりではないのである。(一九五五・一一・三)

一九五六・九「野鳥」

五〇、石川県のカスミ網

ツバメ密猟はやめてほしい

カスミ網は禁じられた筈なのに、石川県ではいまだに公然と行われている。さる十三日付の某地方紙には石川県を訪れた、東洋パルプ会長伊藤忠兵衛氏らが田谷知事の案内で、能美郡山上村の小鳥網を觀賞したと報じているが、私はこれを読んでぼう然とした。県知事自らカスミ網を奨励しているのだから、取締れないわけである。ツグミ・カシラダカ等の渡りの最大のコースが石川県であり、そこで大量捕殺をやるのだから、他府県でいかに大わらわとなって取締まっても、害虫の天敵である、鳥の保護の実績が足りない筈である。

カスミ網でツバメを密猟し、クロスズメと称して食用にした地方は、日本中で恐らく石川県以外にはなかったであろう。

どうか日本全体のため、石川県でもカスミ網禁止を徹底してもらいたい。(茨城県・日本野鳥の会全国委員・山縣深雪)

石川県は裏日本で最も突出した能登半島があるので、シベリアから飛んで来る渡り鳥の上陸地となっており、古来からカスミ網がさかんで、戦前はこれを職業とする者が相当いたが、駐留軍の指令で禁止された。しかし現在でもモグリでカスミ網を張っているものがあり、知名人で鳥山(鳥のコースになっているところ)を持っているものもある。金沢名物料理のジブにはツグミが使われているし、魚市場や魚屋ではシーズンになると、ツグミを公然と売っている。片山津温泉ではクロスズメと称してツバメの料理を出している。これは過去の慣習が根強く残っているもので、一般の人々もこれをあまり罪悪視していない。

読者から投稿のあった田谷知事の小鳥網については、知事は出張不在中で県秘書課では「小鳥網を関西財界人に見せたのは事実だが使った網はカスミ網でなく害鳥駆除に用いる張り網であり違法行為ではない。田谷知事は高松宮殿下が昨年来県されたさい、カスミ網の実況をご覧願うという話が出たのを『法律に違反するようなことを知事がご案内するわけにはゆかぬ』と取止めたほどで、決してカスミ網を認めているわけではない」と弁明している。(本社金沢支局)

一九五六・三二一七「読売新聞」

五一、カスミ網を許すな

二十一日付読売新聞によると、野生鳥獣審議会では時代おくれの狩猟法改正、キジ・ヤマドリをめスは保護、カスミ網解禁等を十一月末に答申を行うという。「キジ・ヤマドリをめスは保護」はまだよいとして、『ツグミ・アトリ・カシラダカなどの禁鳥は大体害鳥だから当然禁止は解除すべきだとの意見が強い』とあるのには驚いた。まだこれらの鳥類を害鳥だなどというものがあるとは軽率にもほどがある。鳥類の食性や生態を広く深く研究すれば軽々しく害鳥だなどとはいえなくなる。

私にいわせれば現在の日本では鳥類の乱獲で自然の平衡が破壊されつつある。これを自然の平衡に戻すまでは、狩猟法を改正し、一切の鳥類の狩猟を厳禁すべきだと思う。カスミ網の禁止によって生活権をおびやかされるというのがあるというが、全体のためにマイナスとなることがわかり切っている生業は廃業させるべきであろう。私は日本全体のためにカスミ網解禁には反対する。(茨城県・日本野鳥の会地方委員・山縣深雪)

一九五七・一〇・二四「読売新聞・気流」

二十四日付読売の拙稿「カスミ網を許すな」を読まれた青森県の三上士郎医博(日本野鳥の会地方委員)から同日付で次のようなおハガキを頂戴した。

『読売紙へのいつもながらの有難い玉筆拝見いたしました。御力によって、世論が正しい方向にすすんでくれるであります。呉々も有難う存じました。』

当方の渡り鳥も最盛期を迎えている様で各地の灯台からの斃死鳥も段々増えて来ています。今年は例年になく早いし、又、その数の多い事が注目されます。当地方にはもう白鳥がやって来ました。およろこびまでに。』

三十一日付で中西悟堂先生は読売新聞に「霞網猟は小鳥の敵」と題し次のように発表された。二十一日読売の「カスミ網解禁へ」を読んで驚いた全国の愛鳥家も中西先生の「霞網猟は小鳥の敵」を読んで、驚いたり安心したりしたことであろう。

霞網猟は小鳥の敵 - 狩猟解禁の日を前におもう

中西悟堂

渡り鳥の季節となり、狩猟解禁の日も迫って、猟者は、てぐすねひいて待機していることだろうが、渡り鳥のうち、シベリア方面から能登半島めがけて渡来するツグミのほか、アトリ・カシラダカ等の渡りの小鳥を捕獲する霞網猟は戦後国法を以って、禁止された。然るにこの国法を無視して、北陸地方、濃美地方などでは年々半ば公然と、それも解禁前の十月から行っており、又岐阜、愛知両県の如きは猛烈な霞網猟復活運動を繰返し続けている。

猟者側の代表者である岐阜県県会議員加藤隼一氏ほか、富山、石川、福井、長野各県では、先に昭和二十七年に時の広川農相や林野庁長官にその復活を陳情し、又「狩猟法一部改正の議案」が議員提案として国会にも提出されたが、学術団体、保護団体、宗教団体、ボーイスカウト連盟、衆参両院議員六十余人、各新聞社その他の世論の反撃にあって、議員提案も有耶無耶のうちに流れ去った事情は、かく申す私が熟知している。

要するに狩猟法の改正どころか改悪として斥けられたのだが、性懲りもなくその後も復活運動を続けているのは、一つにはこうして地元の有力者が先に立って騒いで居ればそれが世論の防波堤ともなって、国禁違犯の密猟もやりよいからかも知れぬ。

普通の常識で了解に苦しむことだから、こうも考える事で、かつては渡りの鳥の口中に、実際には食べもせぬ米粒をねじ込んで、この通りの害鳥だと世間を瞞着するような陋劣な手段をろうして識者の物笑いを買ったこともある位なのだ。その禁止の事情にしても事実を確かめずに勝手な放言をして居り、偶々戦後、網場に案内されたアメリカ天然資源局のオースチン博士が、網に掛った小鳥をひねり殺す残忍なやり方を見て、日本はこれだから好戦国民にもなるのだと直感してやめさせたのだと、いかにも知った風な

ことを彼等というが、事実は然らず。欧米諸国では古くからこれらの渡りの小鳥が害虫を多食する天敵であることを知って、種々の法令を設けてその捕獲を禁じているので、オースチン氏はこのような世界共通の理念から日本の農山林資源保護のために親切な忠言をしたまでである。

しかもそれよりはるかに古く、実は今から三十余年も前に、我国の農林当局でも同じ見地から罽網禁止の方針を協議していた程であり、爾来これらの鳥の食性を多年にわたり県別、月別に詳細調査していよいよ益鳥たることが明らかとなっていたので、この忠言を機会に、頑迷な陋習を日本国全体の利益のために禁じたのだが、偶々本年七月から農林省に野生鳥獣審議会が設けられて狩猟法の改正を慎重審議しつつあり、林野当局でも幾たびとなく罽網禁止を堅持することを言明し来っているので、情勢不利と見てか、岐阜、愛知両県では去る九月の県議会でその復活を決議し、その意見書を関係各方面へ配布した。

そもそも国法を犯しながらその罰則をも無視して従来復活運動を続けて来たことさえ非良識もはなはだしいのに、県会がこの違犯行為を敢えて肯定する決議をしたことは、いかに地元の歡心に添うとはいえ、その鉄面皮と不見識にはあきれざるを得ぬが、あるいはより有力な背後の手が働いての行動かも知れぬ。また審議会では従来の禁止を解除する意見が強いなどと言いつらしているようだが、審議会は非公開の建前のもので、私自身も委員の一人として申すら、みだりに是非の見解を途中で公開するはずがないのである。

一方、石川県などもその本場だが、現に去る十月二十一日、同県玉川署が近江町市場を急襲して四百羽のツグミを押収し、猟場の経営者や販売業者を狩猟法違反のかどで調査して居り、又昨年は岐阜県釜戸地方にも当局の手入れがあって、取締を甘く見ていた業者に非常なショックを与えた由だが悪いと知りつつやめられぬ陋習の深さも世界の知識にうとく、又国利民福も眼中にない偏狭な因襲性からであろう。

もちろん彼等の理由とするとところは一々反駁できる底の浅いものだが、その害鳥論に至っては資料不足の認識に感情の衣を着せたものに過ぎず、万一にも農林当局が彼等の妄動や影の有力者の強迫に屈してこれを解除するようなことがあったら、今まで全国のいたいけな学童に益鳥だと教えてきた責任はどうか、又これまで禁止を守って来た国法の尊厳はどうか、更に諸文明国への面子はどうか、敢えて申すまでもないことであろう。(日本野鳥の会会長)

五二、常磐線のイワツバメ

「野鳥」第一六一号に新潟県加茂農林高校の成沢多美也氏は、次のように発表されている。

「イワツバメが、私の町に移住してきたのは何時頃のことか判然しない。しかし彼等の分布状態を見ると、磐越西線と信越線だけで信越線といっても、新津、加茂、三条それ以南には亘っていない。羽越線など、阿賀野川を越えると殆ど見当らない。一昨年、コシアカツバメの分布を調べに行ったとき、山形県よりの桑川部落で僅に三羽見ただけである。鳥友千羽元一氏によると、県内に入るルートは磐越西線だろうと云っているが、確に首肯される点があり、またこのように、分布が普遍的でない点から見ても、きわめて近年に入ったものと考えられる。

ところで私の町は居心地がよいのか、春三月十日前後、まだ雪もまばらに残っている頃渡ってきて、大通を占領し、彼等より一カ月も遅れて渡来するツバメを次第に裏通りにおいやっている。その数も県下では最も多い方で、先年中学で大通りを調べたところ、ツバメ類の巣一三〇〇のうち七割までが、イワツバメであったというので彼等の優勢さがわかる。いきおい、彼等にとっては、住宅難が起きているよう

で、あぶれた連中は新しい場所、好みの場所へと新居を移している。その一つの加茂駅のごときは、彼等にとって思いがけない安住の地だったのである。何故なら、乗客の雑踏とセメント張りのホームは蛇も猫もよりつけないからである。彼等は幾年かの間、此处の屋根裏に愛の巣を営み、春毎に雛を育てる習しになつたらしい。」云々。

さてそのイワツバメが、本年は常磐線にも、湯本駅を中心にして南方は植田駅、北方は綴、平駅等に渡来して、各ホーム上屋で営巣繁殖した。

私は七月二十四日の午後、湯本駅に下車して、イワツバメとその巣を観察した。同駅には十五箇の巣があり、その大半が、巣立直前の雛で、巣から半身を出没させて給餌を待っていた。その夜は浅貝本館に宿泊したが、同館の池面にも、イワツバメが三羽飛翔していた。然し同館には、その巣は見当らなかった。翌二十五日には湯本町の通りを調査したが、ツバメとその巣は目撃出来たが、イワツバメの巣は見当らなかった。綴駅でもイワツバメの巣二箇と数羽の飛翔を目撃した。平駅では四羽目撃したが、その巣は見当らなかった。(ホーム全部を調べたわけではない)市街にはどうかと詳しく探訪したが、その巣も、イワツバメの飛翔も目撃することは出来なかった。本年はツバメが実に少い。これはコシアカツバメやイワツバメの居る、居ないにかかわらずどこでも少い。帰路汽車の窓から植田駅ホームのイワツバメを観察した。数羽がしきりに巢中の雛に餌を運んでいた。ツバメより小型で、尾が燕尾ではなく、腰白燕と名づけたいような、腰の白さの目立つ、可憐なイワツバメ。

その巣はコシアカツバメのトックリを横にしたようなものとは異って、ツバメのような椀形であるが、ツバメの巣と異るところは、巣が天井につけてあり、小さなイワツバメ自身が辛じて出入出来るだけしか間隙をつくらぬことである。だから空巣でもはっきり、それと判別出来るわけである。

常磐線の茨城県内では、コシアカツバメが日立駅、高萩駅等に営巣繁殖しているが、(昨年は磯原に始めて渡来し、営巣したが、スズメに破壊されて繁殖せず、一巣だけ繁殖した。本年は帰来しない)本年はイワツバメが湯本駅を中心にして植田～平等に営巣繁殖したことは、両種の分布の限界線に居住する私にとっては、今後の観察が楽しみである。

それは、ツバメがどこでも繁殖するのに、コシアカツバメやイワツバメが、そうでないのには、何か理由がなければならぬだろう。

同科の鳥であっても、食性は似て非なるものがある。特種な野鳥が移住して、繁殖するということは、特種の他の生物の移住や、繁殖を意味するものではなからうか?私は大陸で、家畜とカササギの生態等も観察したことがあるが、日本の牧場へ、カササギを人工移住させることは、不可能ではないもののように思われるが、どんなものであろうか?

コシアカツバメやイワツバメ等の出現によって、招かざれば現れないものでも、移住は不可能でもあるまいと考えられる。

天敵の出現を自然に待つのもよからうけれど、カササギ等は招かざれば現れないものの一つであろう。(一九五四・七・三〇)

一九五五・一「野鳥」

五三、野鳥の保護

戦後日本では野鳥が非常に激減して絶滅にひんしている種もある。何故このように減少したかという

と次のような状態が重なる原因として挙げられる。

- 1 乱獲
- 2 森林の乱伐
- 3 樹種改変
- 4 農薬
- 5 原水爆
- 6 自然現象

これらの対策として、

- 1 大量捕獲の用具であるカスミ網・ムソウ網・空気銃等の厳禁。特別な研究以外は野鳥の飼育禁止。なるべく巣引鳥の飼育と野外探鳥で研究と情操を高揚する。
石川・青森両県の如き渡鳥の大コースの一斉取締り強化。(石川・福井両県周辺ではツバメをクロスズメと称して食用に供している)
- 2 大木の伐採に因って、その樹枝や樹洞に営巣する鳥種は蕃殖不可能となり他に移動する。その足留めに巣箱を架設する。
- 3 自然の混淆林が伐採され植林に因る樹種単一化で鳥種も単一化す。樹種混淆の計画植林をする。
- 4 パラチオン・フラトール等によって直接、間接ツバメ其の他が大量に死滅して自然の平衡が破壊される。特別な場合以外農薬の使用を禁止する。
- 5 原水爆は農薬同様人畜の生命にもかかわる。先ず弱い鳥類が早く死滅する。原水爆実験禁止の促進。
- 6 自然現象気象異変などで死滅直前の野鳥は拾って保護する。

以上であるが、これ等の実行には鳥類の生態の観察と調査研究と愛鳥精神 - 情操の高揚 - が必要である。

愛鳥クラブでは先ず飼育・探鳥・巣箱の架設等を手始めに着手した。来春は巣箱蕃殖の実績を報告し得るだろう。

参考までに本年の実績の一つを挙げれば、元高萩営林署磯原担当区主任根本喜一氏(現水戸営林署太田担当区主任)が筆者の紹介で日本野鳥の会に入会、巣箱架設をすすめたところ間もなく架設を決意し二十三箇を架設した。本年五月十日の調査報告によれば二十箇に営巣し八七%の利用率である。内ヤマガラニ番は早期産卵目下各四雛在中とある。

ヤマガラ・シジウカラ・ヒガラ等の四十雀科、ムクドリ科、フクロウ科、キツツキ科、スズメ科の一部等は樹洞に営巣するから巣箱を架設すれば移動せずに巣箱で営巣蕃殖する。周辺の林野・庭園・農地等の虫害防止に役立って計り知れないプラスとなる。

愛鳥クラブで架設した巣箱にいたずらしたり採集したりしないようにくれぐれもお願いする。戦後野鳥が激減して、もう自然の平衡が失われた現状では、焼鳥などという鳥勢ではなくなったのだからどうか心して貰いたい。

日本ばかりではなく世界中には野鳥の乱獲で自然の平衡が破壊され、驚いて野鳥の狩猟を厳禁して之を保護し辛うじて平衡を取戻した国もあり、又農薬の使用を禁止した国もある。オーストラリアのような天国に近い国もある。うるさいようだが野鳥に害を加えないで貰いたい。(一九五七・五二一三)

一九五七・六・二一「茨城礪業所タイムス」

五四、燕を守れ

近年、常磐線茨城県内のコシアカツバメは日立市から高萩市～北茨城市と北上した。福島県内では内郷市に南下した。福島県内のイワツバメは勿来市まで南下したから、いずれ茨城県内にも南下営巣蓄植するものと思われる。内郷市ではツバメを加えて三種のツバメが蓄植している。北茨城市ではアマツバメも蓄植している。然し今ではいずれも個体数が少い。

石川・福井両県あたりではカスミ網でツバメを密猟し、クロスズメと称して食用に供しているとのことだが、常磐線沿線地方ではそんな不心得者は無いようだから、原水爆の実験で激減したものではなからうか？

イワツバメ・ツバメ・アマツバメなどが春季北方へ飛去してから後に南方で原水爆の実験をしたもののようではあるが、ツバメより一ヵ月以上も遅れて飛来・飛去するコシアカツバメは全滅に近かったものようである。当地方では、昨年までは蓄植していたコシアカツバメが日立市～北茨城市のいずれでも本年はただの一羽も帰来しない。その減少したツバメ達の一部が辛うじて帰来しても、農薬パラチオン等で又激減という実態である。白鳥が各地で保護されるようになったのは結構なことであるが、ツバメ達のためにも原水爆実験や農薬使用を禁止して貰いたいものである。

一九五七・六「動物文学」

五五、野鳥を愛しましょう

戦後野鳥が非常に激減しました。主なる原因に乱獲、森林の乱伐、農薬、原水爆、自然現象等が挙げられますが、すでに自然の平衡が破られて、今後の農地、果樹園、牧場、庭園、森林衛生などに未恐ろしいものを感じられます。カスミ網や空気銃で野鳥を乱獲したり、卵や雛を採集したりしないように心して貰いたいものです。

野鳥の足留めに架設した巣箱を破壊したり、持去ったりした少年がありましたが、これはその少年そのものが悪いばかりではなく、父兄や先生方にも責任があるものと考えられます。先天的な悪童などというものはそうあるものではなく、子が悪くなるということは父兄が悪いからでもあり、学童が悪くなるということは先生が悪いからである、といわれてもやむを得ないものがある筈です。戦後日本人はたしかに悪化しました。これは全体が一緒になって猛省しなければならないと思います。

先ず第一に情操の向上をはかるべきだと思います。

「花鳥を愛すは聖なり」です。

どうか皆で反省して、日本もオーストラリアのように、野鳥が人の手や肩に飛来して遊ぶような、楽園となるように力を合せて下さい。

一九五七・八・七「常磐炭礪茨城労報」

五六、鳥の研究

一 分布

1 冬鳥

茨域を中心にして福島・千葉地方には大小の森林があり、平野があり、河湖があり、太平洋にも面しているのので、種々の野鳥が比較的多く分布している。冬鳥中の留鳥を挙げれば、

雀科 - 1 スズメ

アトリ科 - 2 ホオジロ 3 コカワラヒワ 4 ホオアカ 5 イカル

雲雀科 - 6 ヒバリ

鶯科 - 7 ウグイス

鶇科 - 8 モズ

鶺鴒科 - 9 キセキレイ 10 セグロセキレイ 11 ハクセキレイ

ヒヨドリ科 - 12 ヒヨドリ

木走科 - 13 キバシリ

四十雀科 - 14 シジュウカラ 15 コガラ 16 ヒガラ 17 ヤマガラ 18 エナガ 19 キクイタダキ

椋鳥科 - 20 ムクドリ

ミソサザイ科 - 21 カワガラス

鴉科 - 22 ハシボソガラス 23 ハシブトガラス 24 カケス 25 オナガ

メジロ科 - 26 メジロ

翡翠科 - 27 カワセミ 28 ヤマセミ

啄木鳥科 - 29 アカゲラ 30 コゲラ 31 アオゲラ

フクロウ科 - 32 フクロウ 33 コノハズク

鷲鷹科 - 34 イヌワシ 35 クマタカ 36 トビ 37 ノスリ 38 コチョウゲンボウ

鷺科 - 39 チュウサギ 40 コサギ 41 ヨシゴイ

ハト科 - 42 ドバト 43 キジバト 44 アオバト

千鳥科 - 45 シロチドリ 46 イカルチドリ

シギ科 - 47 ヤマシギ 48 イソシギ

クイナ科 - 49 クイナ 50 ヒクイナ 51 バン 52 オオバン

キジ科 - 53 キジ 54 ヤマドリ 55 コジュケイ 56 ウズラ

カイツブリ科 - 57 カイツブリ

ヨタカ科 - 58 ヨタカ

ウミウ科 - 59 ウミウ 60 カワウ

冬鳥中の侯鳥では、

雀科 - 61 ニュウナイスズメ

アトリ科 - 62 マヒワ 63 ベニヒワ 64 オオカワラヒワ 65 ウソ 66 ベニマシコ 67 ハギマシコ 68 オオマ

シコ 69 イスカ 70 アトリ 71 ツメナガホオジロ 72 ミヤマホオジロ 73 コホオアカ 74 コジュリン

75 オオジュリン 76 クロジ 77 シメ 78 カシラダカ 79 アオジ(福島では蕃殖する個体もある)80 ノ

ジコ

雲雀科 - 81 オオヒバリ

鶺鴒科 - 82 タヒバリ 83 ビンズイ鶺鴒科 - 84 ジョウビタキ 85 ルリビタキ 86 ツグミ 87 シロハラ 88 ア

カハラ 89 マミチャジナイ 90 トラツグミ(福島では蕃殖する個体がある)91 クロツグミ(福島では蕃

殖する個体がある)92 マミジロ 93 オオトラツグミ(茨城で一個体筆者採集)

ミソサザイ科 - 94 ミソサザイ(福島・茨城の一部で蕃殖する個体がある)

連雀科 - 95 キレソジャク 96 ヒレンジャク

岩ヒバリ科 - 97 カヤクグリ

鷺鷹科 - 98 ハヤブサ

雁鴨科 - 99 オシドリ 100 マガモ 101 コガモ

阿比科 - 102 オオハム 103 アビ

鷗科 - 104 カモメ 105 ウミネコ 106 セグロカモメ

シギ科 - 107 タシギ

海雀科 - 108 ウミスズメ

等があるが、年々気象その他の関係で緯度分布、垂直分布に多少のずれを生じる。クロヅル(鶴科)は稀種で本邦では茨城だけで確認されたものであると黒田長澄博士は発表された。

2 夏鳥

留鳥は冬鳥でもあれば夏鳥でもあるから、冬鳥中の留鳥は夏鳥にも共通する。留鳥以外の夏鳥 - 春季渡来し営巣蕃殖するが越冬しない鳥 - を挙げれば、

雨燕科 - 109 ハリオアマツバメ 110 アマツバメ

燕科 - 111 ツバメ 112 コシアカツバメ 113 アカハラツバメ 114 イワツバメ 115 ショウドウツバメ

ヒタタキ科 - 116 サメビタキ 117 コサメビタキ 118 エゾビタキ 119 ムギマキ 120 ノビタキ 121 キビタキ 122 オオルリ 123 サンコウチョウ

山椒喰科 - 124 サンショウクイ

鶇科 - 125 コマドリ 126 イソヒヨドリ 127 コルリ

鷺科 - 128 セッカ 129 ヤブサメ 130 エゾムシクイ 131 メボソ 132 センダイムシクイ 133 オオヨシキリ 134 コヨシキリ

仏法僧科 - 135 ブッポウソウ

フクロウ科 - 136 オオコノハズク 137 アオバズク

翡翠科 - 138 アカショウビン

ホトトギス科 - 139 カッコウ 140 ホトトギス 141 ツツドリ 142 ジュウイチ

鷺鷹科 - 143 オオタカ 144 ハイタカ 145 ツミ 146 ハチクマ

鷺科 - 147 アオサギ 148 ゴイサギ 149 ミゾゴイ

雁鴨科 - 150 カルガモ

シギ科 - 151 オオジシギ 152 アオアシシギ

千鳥科 - 153 コチドリ 154 ケリ 155 オオチドリ

鷗科 - 156 コアジサシ

秩鷄科 - 157 シマクイナ 158 ヒメクイナ

以上の外に春秋二季にただ通過するだけの各種野鳥があり、稀に営巣蕃殖したり、越冬したりするものもないではないが、省略した。

一九五一二一「蒼穹」

二 移動

野鳥には留鳥と候鳥とがあつて、如何に候鳥が多いかは比較してみればすぐに判明する。メジロ等のような留鳥でも一部は南方へ飛去して越冬する。野鳥の移動は寒いから、暑いからというような理由からではなく、春秋の二季に各々それぞれの食糧を求めて移動するものと考えられる。食糧を豊富に与えれば候鳥でも渡去させずに越冬させることが可能になる。

春季ツバメ達が南方から渡来する頃、ガン達は北方へ渡去する。交代するのではなく、どの鳥も春季には南方から北方へ移動し、秋季には北方から南方へ移動する。春季南方へ飛去したり、秋季北方へ飛去する野鳥はない。

冬季北方ではあらゆる食糧が不足し、夏季北方ではあらゆる食糧が豊富になる。殊に顕著なのは北満で、秋季結氷後は全く食糧が求め得られなくなる。日本では留鳥である鳥でも満洲では候鳥である。ところが春季は実に食糧が豊富となるから、大群が続々と帰来する。分布の種類が多いこと、個体の多い事到底日本の比ではない。

さて野鳥の各々がそれぞれの食糧を求めて春秋二季の渡りとなるが、野鳥は一斉に渡来渡去するものではない。草花が一斉にぱっと開花するものではないように、順序正しく開花するように野鳥の渡来渡去にも順序がある。満洲ではガンが諸鳥に魁けて渡来し、諸鳥の殿りとなって渡去する。植物の開花、結実にはずれがあるように、昆虫の発生、斃死にずれがあるように、野鳥の渡来、渡去にもそれぞれのずれが生ずる。(詳しくは拙著『満洲の野生鳥』参照)

満洲では秋季ガンの飛去した翌日は最高圧低温となり、春季飛来した翌日は最低圧高温であったことは筆者が一九四一・五・「野鳥」に発表した通りである。渡鳥と気象と植物と動物等の関係を各地で更に詳しく調査することは農林関係ばかりではなく、他にも人生を益するものがある筈と信じる。野鳥が一斉に渡来、渡去せず多少のずれが生じているということは、その食物と大いに関連がある。

三 食物

1 植物

野鳥の主なる食物は植物と動物であるが、先ず植物の果肉や種子を食用とする種類は次のようなものである。

禾本科 - シバ・スズメノヒエ・ナルコビエ・ススキ・エノコログサ・オギ・カモジグサ・ヨシ・マコモ(雀科・雉科・鴉科・雁鴨科・ハト科・雲雀科・鶺鴒科の一部・鶇科の一部・イワヒバリ科等が食す)

ヒエ・アワ・キビ・モロコシ・イネ・ムギ等の作物も同様である。

藜科 - アカザ・コアカザ(雀科・雉科・鶺鴒科の一部等が食す)

車前草科 - オオバコ(雀科・雉科・雲雀科・鶺鴒科の一部・鶇科の一部等が食す)

胡麻科 - ゴマ(前同)

蓼科 - イヌタデ・サクラタデ・ネバリタデ・ソバ(前同)

十字花科 - ナ・ダイコン(禾本科の種子を食べるものの外に四十雀科等)

松杉科 - アカマツ・クロマツ・スギ・ヒノキ(前同)

茜科 - ヘクソカズラ(鴨科・鶇科・雀科の一部ウソ等いずれも好んで食す)・ヤエムグラ(鶇科・鶇科)

エゴノキ科 - エゴノキ(四十雀科の一部ヤマガラが食す)

- 柿樹科 - カキ・シナノガキ(鴉科・鶇科・鶇科・四十雀科・啄木鳥科・メジロ科等が食す)
菊科 - ヨモギ・クソニンジン・コスモス・タンポポ・ヒマワリ(雀科の一部・四十雀科の一部等が食す)
クマツヅラ科 - ムラサキシキブ(メジロ科・鶇科・鶇科が食す)
石南科 - ツツジ(雀科の一部ウソが食す)
唇形科 - シソ・ヤマジソ・ナギナタコウジェ(雀科が食す)
忍冬科 - ガマズミ(鶇科・鶇科等が食す)
ユキノシタ科 - ウツギ・ガクウツギ・サワアジサイ(雀科の一部ウソ・ベニマ・シコ・オオマシコ等が食す)
ミズキ科 - アオキ(鶇科が食す)・ヤマボシ(メジロ科・鴉科・鶇科・四十雀科等が食す)
木通科 - アケビ(前同)
五加科-ウド・タラ(鶇科・鶇科・メジロ科・四十雀科の一部等が好んで食す)
ミツバウツギ科 - コンズイ(鶇科・鶇科・雀科の一部が食す)
漆樹科 - ヌルデ・ヤマウルシ(鶇科・鶇科・雀科・四十雀科の一部が食す)
ブナ科 - ナラ・シイ・カシ(雉科の一部・ハト科の一部が食す。シイは雀科の一部イカルが食す)桑科 -
アサ(雀科・雑科・四十雀科の一部が食す)
クワ(鶇科・椋鳥科・メジロ科・鴉科等が食す)
グミ科 - グミ(同前)
樺木科 - ハンノキ(四十雀科の一部・雀科の一部が食す)
カエデ科 - カエデ(雀科の一部が食す)
山茶科 - サカキ(メジロ科・鶇科・鶇科が食す)・チャ(ハト科が食す)
榆科 - エノキ(鶇科・鶇科 雀科の一部イカル・シメが食す)
バラ科 - ノイバラ(鶇科・鶇科の一部が食す)・マルバシモツケ・ヤマブキ(雀科の一部ウソ・イカル・
ベニマシコ・オオマシコ等が食す)・サクラ(鶇科・椋鳥科・メジロ科等が食す)
ヒユ科 - イノコズチ(雀科・雉科等が好んで食す)
ヘンルウダ科 - イヌザンショウ(鶇科・鶇科・雀科の一部が食す)・ミカン(鶇科が食す)
豆科 - ダイズ(ハト科・雉科の一部等が食す)・レンゲソウ(雀科の一部・雲雀科等が食す)・ナンキンマ
メ(鴉科の一部・ハト科・雀科の一部・雉科等が食す)・ハギ(雀科の一部が食す)
メギ科 - ナンテン(鶇科・鶇科の一部が食す)
木蓮科 - シキミ(四十雀科の一部ヤマガラが食す)・ホオノキ(鴉科の一部が食す)
冬青科 - モチノキ・イヌツゲ・ウメモドキ(鶇科・鶇科の一部が食す)
一位科 - カヤ(四十雀科の一部ヤマガラが食す)
ビヤクダン科 - センダン(鶇科の一部が食す)

以上の如く植物の種子、果肉はほとんど野鳥の食物であるが、種子、果肉を食わない鳥でもハコベ(石竹科)やナ・ダイコン(十字花科)等の若葉、蕾や花、未熟な種子を啄むこともある。雁鶇科の一部はヨシ(禾本科)の地下茎等を啄む。雀科のウソはウメ・モモ・サクラ(バラ科)等の蕾の芽を好んで食すが、葉の芽は啄ばまない。ベニマシコにも蕾を啄む個体がある。

野鳥達はこれらの食物を求めて、それぞれに移動するが、これらの食物が四季を通じてあるものではないから、繁殖期には次のような動物を食物として大いに求めることになる。

2 動物

- 昆虫綱 -

蕃殖期の野鳥は植物の種子や果肉を求め得難いかわりに、豊富になった動物を大いに求めることになる。

野鳥の食物は動物では何といっても昆虫が主となる。ところが植物界と異り、動物界は六十万種(百万余種に分類している学者もある)という多数の種があり、野鳥は主人公なので種別に挙げたけれど、昆虫等を種別に挙げることは容易でない。それで野鳥の食糧となる昆虫を種単位でなく科単位で挙げることにする。(動物界を百万余種に分類した学者は昆虫だけでも七十五万種程に分類している)

蝶亜目 - アゲハチョウ・シロチョウ・マダラチョウ・タテハチョウ・ジャノメチョウ・シジミチョウ・セセリチョウ

蛾亜目 - スズメガ・ツヤチホコガ・トガリバガ・イラガ・ドクガ・カレハガ・マドガ・オビガ・カイコガ・トラガ・イカリモンガ・カキバガ・イボタガ・ヤママユガ・ツバメガ・ヤガ・カノコガ・マダラガ・ヒトリガ・スカシバガ・シクヤトリガ・スイガ・スガ・ハモグリガ・ハマキガ・ハマキモドキガ・ミノガ・セミガ・ボクトウガ・オガ・カキノミガ・ナガ・ツツガ・コクガ・バクガ・コウモリガ・ヒゲナガガ

膜翅目 - スズメバチ・ミツバチ・ミツバチモドキ・ツチバチ・アナバチ・セイボウ・アリバチ・ベッコウバチ・ヒメバチ・フシバチ・キバチ・ハバチ・ヤセバチ・コマユバチ・タマゴバチ・コバチ

以上の幼虫を地上の鳥、樹間の鳥が主として食し、成虫を空中の鳥も捕食する。尚膜翅目のアリの卵や幼虫を雉科の一部が好んで捕食する。成虫を雀科のスズメが好んで捕食する。

双翅目 - イエバエ・モグリバエ・シマバエ・サシバエ・ハチモドキバエ・ショウジョウバエ・ヤセバエ・ウシバエ・ダイコンバエ・ヘンバエ・チョウバエ・タマバエ・カバエ・オドリバエ・シラミバエ・ガガンボ・カ・ヌカカ・ハナアブ・ブユ・ミズアブ・シキアブ・アブ・アブモドキ・ツリアブ・ツルギアブ・シオヤアブ・アシナガバエ

以上の幼虫を雉科・雀科の一部や地上の鳥が好んで食し、成虫を空中の鳥のほとんどが捕食する。

鞘翅目 - カミキリ・カミキリモドキ

以上の幼虫を啄木鳥科が食し、成虫を樹間の鳥や空中の鳥の一部が捕食する。

鞘翅目 - テントウムシ・テントウムシダマシ・ハムシ・マメゾウ・ヒゲナガゾウムツ・ハンミョウ・ゴミムシ・ゴミムシダマシ

以上の幼虫を雀科の一部・雲雀科・雉科の一部等が食し、成虫を空中の鳥の一部が捕食する。

鞘翅目 - ヒタラムシ・エンマムシ・シデムシ・シバンムシ・ヒョウホンムシ・オオクスイ・クスイムシ・ハネカクシ・ハネカクシモドキ・キノコムシ・ケシクスイ・ヒメハナムシ・コガネムシ・クワガタムシ・タマムシ・タマムシモドキ・コメツキムシ・クチキムシ・シンクイ・ツチハンミョウ・オオハナノミ・ハナノミ・マルハノミ・ハノミダマシ・セススムシ・アリツカムシ・タマキノコムシ・クスイモドキ・マルトゲムツ・ヒメマキムシ・ツツシンクイ・コメツキモドキ・アカハネムシ

以上の幼虫を啄木鳥科・四十雀科・雉科等の一部が食し、成虫を野鳥のほとんどが捕食する。

有吻目 - カメムシ・ヘリカメムシ・ナガカメ・ホシカメ・イトカメ・メクラガメ・サシガメ・ゲンバ
イムシ・トコジラミ・コバンムシ・ナベブタムシ・タガメ・マツモムシ・マルミズムシ・フウセ
ンムシ・メミズムシ・タイコウチ・カワグモ・セミ・ツノゼミ・アワフキ・ヨコバイ・ウンカ・
キジラミ・アブラムシ・ワタアブラムシ・コブアブラ・コナジラミ・カイガラムシ

以上の有吻目中には、水棲と陸棲とがあり、従って野鳥のほとんどが捕食する。

虱目 - メラシシラミ

この科の中のある種、ウシジラミ・ウマジラミ・ブタジラミ等を鴉科の一都が捕食する。

毛翅目 - トビゲラ・カワトビゲラ・エグリトビゲラ・エダトビゲラ・ケトビゲラ・ハトビゲラ・ツノ
トビゲラ・ホントビゲラ・ツマトビゲラ・ナガレトビゲラ・ヒメトビゲラ

以上の水中にある幼虫を鶺鴒科、ミソサザイ科のカワガラス等が好んで食し、飛翔中の成虫を小禽の
ほとんどが好んで捕食する。

長翅目 - シリアゲムシ・ナカシリアゲムシ

以上は他の有害昆虫を捕食する益虫であるけれど、野鳥の多くがこれを捕食する。

脈翅目 - カミキリモドキ・ウスバカゲロウ・ツノトンボ・ヒメカゲロウ・クサカゲロウ・ヒロバカゲ
ロウ・アミカゲロウ・ラクダムシ・センブリ・ヘビトンボ

以上は農林関係ばかりでなく衛生上にも有益な昆虫であるが、燕科・雨燕科等空中の鳥が最も好んで
捕食する。

総翅目 - アザミウマ・シマアザミウマ・クダアザミウマ

以上を雲雀科・雀科・燕科等の一部が捕食する。

直翅目 - バッタ・ヒシバッタ・コオロギ・キリギリス・コロギス・カマドウマ・ノミバッタ・ナナフ
シ・カマキリ・ゴキブリ・ケラ

以上の中カマキリ以外は害虫であるが、地上の野鳥が好んで捕食する。

革翅目 - ハサミムシ

これは他の昆虫を捕食するが、蚕を食害するから賞罰共にありというところである。やはり賞罰共に
あるといわれたりする雉科・雀科の一部が之を捕食する。

食毛目 - ハジラミ

これは鳥類の寄生虫で、寄生主の種類によってその種名も異なる。鳥の血を吸って生きその鳥によって
食害されもするが、寄生主を吸殺する場合も生じる。

茶柱目 - チャタテ・コナチャタテ

標本等を食害する昆虫で、成虫を燕科・雀科の一部が捕食する。

白蟻目 - シロアリ幼虫を啄木鳥科・四十雀科の一部が食し、成虫を燕科・雀科等が捕食する。

積翅目 - カワゲラ・ヒメカワゲラ・アミカワゲラ

以上の幼虫は水中に棲み小虫を捕食する益虫で、釣魚の好餌ともなるが、鶺鴒科・ミソサザイ科のカ
ワガラス等が捕食する。成虫を鶺鴒科・燕科其の他の小禽等も好んで捕食する。

蜻蛉目 - トンボ・ヤンマ・ムカシトンボ・カワトンボ

以上はいずれも農林関係ばかりでなく衛生上にも有益な昆虫であるが、あらゆる野鳥が好んで捕食す
る。

蜉蝣目 - カゲロウ・マメカゲロウ・フタカゲロウ・オカゲロウ

以上を鶺鴒科・燕科等が多く捕食するが、其の他の小禽も捕食する。

総尾目 - シミ・イシノミ

弾尾目 - ツノトビムシ・トビムシ・マルトビムシ

以上を地上の野鳥が捕食する。さて、昆虫の多くは害虫で、蕃殖期には昆虫を捕食しない野鳥はほとんど無い。秋季雀科・雉科・ハト科・鴉科等の野鳥中には害鳥などと誤認されて嫌われるものもあるが、そのにくまれものの雀が蕃殖期には最も懸命に蠅のひつき幼虫を駆除する。引切りなしに林野や田畑に飛行しては多数の害虫を捕食する。深い意味で絶対の害鳥などというものはある筈は無い。雀は絶対に害鳥だなどと断言するのは雀を知って実は雀を知らなすぎる人なのである。燕は絶対に益鳥だなどというのも誤りで、農林上や衛生上に大害ある昆虫などを捕食するトンボ等を最も好んで捕食するのが燕である。だから益鳥の燕でも絶対の益鳥なのではない。その害益を比較検討してのち害益を定めるより外にない。

蕃殖期の野鳥 - それは比較的みんな益鳥だというべきである。

一九五一・五「蒼穹」

- 蜘蛛網 -

昆虫に次ぐ野鳥の食物は蜘蛛網で、これはあらゆる野鳥が捕食する。

水禽と雖も水中のクモを捕食する。

- 多足綱 -

ゲジゲジを鶺鴒科、雉科の一部が捕食する。

(以上節足動物門)

- ミミズ綱 -

ミミズを鶺鴒科の一部が好んで捕食する。鴉科・雀科・雁鴨科・鶺鴒科・雉科の一部も捕食する。

(以上環形動物門)

- 有爪綱 -

水禽・渉禽のほとんどが捕食する。

(以上節足動物門)

- 魚綱 -

小魚を捕食する野鳥は鶺鴒科・ウミウ科・翡翠科・カイツブリ科・鷺科・鶺鴒科・雁鴨科・海雀科・鶺鴒科の一部等がある。アジサシが鮭を捕食しようとして鮭の脊に爪を立てて水中に引き込まれ双方共疲れ果てたところを漁夫に拾われたということがある。アジサシと鮭の争も漁夫の利 - 。

非道なのはトウゾクカモメで他のカモメ達が捕えた魚を掠奪する。水禽は養漁家には敵ともなるが、カモメ達は漁業家にとってはよい道標ともなる。

- 両棲綱 -

カエルを水陸双方の野鳥が捕食する。

絶対の安全などということはないわけである。

- 爬虫綱 -

ヘビを鷲鷹科の一部・雉科の一部が捕食する。小禽にとっては大敵のヘビである。蕃殖期に猛禽の営巣地帯に小禽がよく営巣する。小禽がヘビにその巣を襲撃されると親鳥は大騒ぎをはじめめる。野鳥の警戒鳴と悲鳴はあらゆる鳥に通じるから、猛禽は速かに飛来して直ちにヘビを捕え去る。

- 哺乳綱 -

ネズミやリスを鷲鷹科やフクロウ科の一部が捕食する。ウサギやキツネ等を捕食する猛禽もある。

- 鳥綱 -

野鳥が野鳥を捕食するそれは珍しいことでもない。鷲鷹科・鳴科・フクロウ科・鴉科の一部等は小禽を捕食するばかりでなく自分より大型の野鳥を捕食することもある。

鷲鷹科の猛禽が中小禽を捕えるとその悲鳴をききつけた鴉科がすばやく追いついて、獲物を放棄させることがある。- その鴉が他鳥の雛を捕食することもある。盗賊は人類特有のものでなく、鳥類にもトウゾクカモメという盗賊があるばかりではなく、トウゾクカモメと烙印を捺された盗賊よりも、もっともっと非道な野鳥もある。ハヤブサ等の捕えた獲物の中小禽を空中で掠奪するばかりでなく、狩猟家につきまとは銃弾に傷ついた雉等を猟犬や狩猟家の前で掠奪するケアシノスリというものすごい盗賊もある(以上脊椎動物門)

四 卵

1 形態

鳥の卵 - それは卵形が多い。蛙の卵は沢山の卵が一塊とたっているが、その一つ一つは球形である。亀の卵は地中に産みつけられるが球形である。鳥の卵でも樹洞深く営巣するフクロウ科等は球形である。おそらく一般の鳥の卵もはじめは球形だったものと思われる。

鳥は必要上、水上や地上や樹上に営巣しなければならなくなったものであろう。水上や地上や樹上で抱卵される卵が球形であったら大変であろう。風も吹けば波も立つから球形だったなら互にぶつかりあって巢外にはじき出されてしまうであろう。それでは蕃殖不能になり、種の保存上由々しいことになる。

フランスのビュフォン(一七〇七~一七八八)の気象・環境による種の変化説。エラスムス・ダーウィン(一七三一~一八二二)の生物内にある外界の変化に必ずや応ずる力によって生物体は姿を変えろという説。さらにジャン・バプテストニフマルク(一七四四~一八二九)の用不用論。サンチレー(一七七二~一八四四)の境遇万能説~進化論。サンチレーは非常に勢力を持っていたキュービエ(一七六九~一八三二)天変地異説 - 種不変論 - と数年に亘り十数回も大論争をつづけたといわれる。

それでドイツのかの大政治家・博物学者でもある詩人ゲーテ(一七四九~一八三二)がフランスの革命よりも両者の論争を重しとみなし、サンチレーのためにわざわざイタリアに旅行して生物の原型を探求したということである。もはや今日にいたっては種不変論などは問題ではなからう。鳥の卵は必要上球形から卵形に進化したものであるだろう。亀の卵は風が吹いても四散する虞のない地中にあるから原型のままであろうが、地中ではいろいろな重みがかかるから鳥の卵とは比較にならないほど堅く進化したものと思われる。

鳥の卵ははじめ球形だったものが、必要に迫られたものだけが卵形に進化して、その必要の生じなかった種類~フクロウなどの如きもの~は原型をとどめているものと思われる。

一九五一・六「蒼穹」

2 色彩

鳥卵の色彩 - それは千差万別である。ナゴヤコウチンの卵殻は羽毛の色彩に似て赤褐色である。ハクショクレグホンも羽毛の色彩に似て白色である。もとは一般の野鳥の卵も羽毛の色彩に似ていたものであ

ったかもしれない。それが必要に迫られて今では親鳥の羽毛の色彩とは著しく異なる色彩に進化したものではなからうか。

例えば灰緑色のウグイスの卵は赤く、濃紅色のベニマシコの卵は空色、濃黄色のコウライウグイスの卵は淡紅色である。

野鳥の蕃殖期に野外でよく見受けられることは抱卵中や育雛中に外敵が巣場所へ近づくと親鳥は静かに巣外に出て擬傷を装い、わざわざびっこをひいたりして敵の注意を一身に集中させそそそと巣場所を離れて行く。敵は傷ついた親鳥をもう掌中のものと思ひ込んでどこまでも追いつづける。親鳥はもうよからうと思う地域まで敵を誘導すると、急に本気になって飛去るものである。敵はその巣場所を発見して置き乍らつい親鳥に誘われてその巣場所を忘れてしまう。そのようにして卵や雛を守る母性愛-父性愛もある。(雌ばかりではなく雄も抱卵する種類がある)どうかした人間などよりはるかに感心なものである。

ところが抱卵中に敵の襲撃を受けた野鳥が折角擬傷を装い敵を遠方へ誘導しようとしても、敵は親鳥と同色の卵や雛が巣中にあるはずそれに注意が移されて、その卵や雛が直ちに犠牲となってしまうであろう。そういう場合があったればこそ遂に親鳥の羽毛と大いに異なる色彩の卵を産むように進化したものであろう。

カイツブリのように水上の巣を離れる場合には巣上に董をして卵や雛をかくすという方法を獲得した種類もあるけれど -

チドリのように地上に産卵する野鳥は卵大の小石近くに小石のような色彩の卵を産む - というように進化したものもある。

3 孵化

昆虫の卵等は気象の関係で孵化日数の伸縮があるが、一定した親鳥の体温で抱卵される鳥の卵は孵化日数も一定している。それぞれ種類によって孵化日数に長短のあるのはいうまでもないが。

ホトトギス科の鳥はそれぞれ一定の他種類の鳥の巣に托卵するが、抱卵することなく自然を利用して孵化させるツカツクリなどもある。雉科のように孵化するとすぐに巣立する鳥と巣中で永々と親鳥の厄介になっている鷲鷹科のような鳥などもある。鶴科のように一腹一~二卵から、雉科のホクマンキジのように一腹一九~二一卵などというのものもある。年一回の孵化と二~三回の孵化とがある。鶉科などには育雛中雛鳥の袋糞を親鳥が食用とするものもある。

産座にヨモギの生葉を用い虫害を避けることを獲得している個体なども見受けられる。

一九五一・八「蒼穹」

五 巣材

鳥の巣材にはおよそ次のようなものが用いられる。松杉科の樹皮、禾本科の葉・茎・穂・細根、菊科のヨモギの生葉、女郎花科のオミナエシの茎、ウラボシ科のワラビの葉、ブナ科・樺木科の枝・葉、蘇苔類・地衣類・蘭科・バラ科の葉、茜科・石竹科・棕櫚科の繊維、灯心科の葉、芭蕉科の葉、クモの巣、紙屑、綿、布切、獣毛、鳥の羽毛、粘土其他。

野鳥達はそれらの巣材をそれぞれ組合せて営巣する。同種の野鳥は同種の巣材を用いる。同様の環境にあっても種が異れば巣材の組合せが異っている。同科の鳥であっても種が異なれば巣材の組合せや形状を異にする。例えば粘土や禾本科植物などで外部を固めるツバメの巣は上口の椀形であるが、コシアカツ

バメの巣はウグイスの巣のように横口でトックリ形である。禾本科植物の枯葉を主材とするシベリアホオジロは細葉のものを用いるが、コマホオジロは広葉のものを用いる。シベリアホオジロやコマホオジロは産座に獣毛を巻付けるが、同様の環境で営巣してもコウライウグイスは獣毛を用いない。オオルリなどは生苔を用いるが野鳥の多くは枯草を用いる。枯草の中にヨモギの生葉を混じる個体があるのは雀科のスズメばかりと限らない。ヤツガシラは石垣の奥底等を選ぶが、何一つ巣材を用いない個体もある。キジバト・ゴイサギ等のように、樹上に小枝を薄く布くだけの粗末なものもあれば、クロガモのように原野の地上にナラの枯葉などを沢山集めて、産座には自分の羽毛を厚く巻布いて羨ましいほど温かな巣をつくるものもある。

野鳥の多くは一卵や二卵採集されても抱卵を継続するが、敵にその卵を発見されただけで抱卵を断念するセッカの巣は、禾本科植物の茎にチガヤの穂で軟かにつくった念入りのもので断念するのは惜しいような巣なのである。樹木の下枝の先端にクモの糸で吊るメジロの巣も念入りなものである。ツカツクリのように土壌で高い塚をつくり、木の葉を敷つめて産卵という変わったものもある。繊維で木の葉を縫って営巣するものもある。カワセミのように土中に深い横穴を穿って営巣する種類もある。スズメでも土中に営巣する個体があるが、屋根瓦の下に営巣するスズメの巣材と巣材には変りがない。鳥の巣については今だに発見されていない巣材や卵がある。私は満洲の東寧で、昭和十四年に始めてコマホオジロの営巣を発見し、その巣材と卵は採集して山階芳麿理博(前の侯爵、元の宮殿下)に献上したが、その時世界中の何処にもその標本は無かったものである。その成鳥雌雄を山階博士が飼育されたことであるが、同鳥の飼育研究も世界ではじめてのことであった。この狭い日本中にでも今だにその巣や卵が発見されていないものもある。日本の鳥の研究もまだまだこれからである。

一九五一・九「蒼穹」

六 記録

鳥の研究に限ったものではなく、何の研究でも大切なのは記録である。記録をしない観察や調査研究はただみてすぎたというだけのものになってしまう。鳥の研究には何を記録すればよいかというと、次のように成果を記入することが肝要である。

第一表(目撃観察)

番号・年月日・氏名・場所・環境・目・科・種・雌・雄・計・特徴・摘要

摘要には候鳥・旅鳥・留鳥の別や初認・終認・習性・生態等を記入する。

第二表(採集測定)

番号・年月日・氏名・場所・環境・目・科・種・性別・翼長・尾長・嘴長・? 蹠長・重量・摘要

測定は規格通りに統一し、測定表には色彩を併記する。

第三表(営巣記録)

番号・年月日・氏名・場所・環境・目・科・種・樹種・地上高・外径・内径・深さ・巣材・卵数・卵長径・卵短径・色彩・重量・摘要

抱卵開始前から観察出来た場合には孵化までの抱卵日数を記入する。第四表(食性記録)番号・目・科・種・食物の内容

第五表(鳴声記録)

番号・目・科・種・囀鳴・地鳴・警戒鳴・悲鳴・悦鳴・怒鳴・摘要

雌雄の地鳴を分析して摘要欄に記入する。尚写真と録音がとれば記録として上々である。さて、以上の観察や調査の記録を十カ年位本気になって根気よく継続すれば、野鳥の地鳴一声で、その種名がわかり、その雌雄もわかり、飛翔の形態や羽音によってもその種名がわかるようになり、食性・習性・生態もわかるようになる。それは何等かの意味で人生を益するものであることはいうまでもない。

これから野鳥の研究をはじめようという向きにくれぐれも云って置きたいことは、ただみて過ぎてはいけない—何の研究でもそうであろうが—それでは飼育すればよいかというと、ただ飼育するだけでも研究にならない。それは観察した事実を細大もらさず記録することである。十年二十年などと大変なことだと、はじからおそれてしまつては何事でも成るものではない。何事でも四年や五年で成るものなら、何人も苦勞はしない。大観さんが一時間で一枚の絵を完成したとしても、それは一時間で完成された絵ではない。その絵は大観さんが四十年も五十年もかかっている絵なのである。十年や二十年位何んでもないことである。やはりはじめた事は真剣にやりとおすことである。四年や五年で凹垂れてはいけない。五年や十年位で自惚れても駄目である。自惚れたらもう何事もそれでおしまい。深い意味では、はじめからやらなかったことよりも尚いけないことになるであろう。

一九五二・二「蒼穹」

五七、珍鳥 大猿子

十一月頃から四月頃まで、大北溪谷に滞在する四十種程の冬鳥中で、特に珍しいのはオオマシコです。ベニマシコは毎年渡来して越冬しますが、オオマシコは気象その他の関係で稀にしか渡来しないのです。個体数も僅少です。

私は毎年観察をつづけて居りますが、終戦後は、昭和二十五年二月に、東京電力 KK 石岡第一発電所水槽附近で、六羽の一群を観察してからは渡来鳥無く本年二月五日に五年振りチイン!チイン!となつかしいオオマシコの地鳴を耳にしました。その後の観察で、それは十羽の一群であることが判明しました。ベニマシコの翼長は六五耗位でオオマシコの翼長は九〇耗位です。共に雄の頬から喉の輝く真珠白色の美麗さは格別です。ベニマシコの腹と腰は薔薇紅色ですがオオマシコは紫紅色です。

いずれもお猿さんに似ているので猿子(ましこ)と名づけられたものらしいのですが特にベニマシコのギョウギョウという悲鳴はお猿の悲鳴に似ています。

アトリ科中での美鳥なのですが、惜しいことには籠飼ではウソなどと異って、換羽後は元の紫紅色が現われなくなります。(一九五五・三・一五)

一九五五・四・一「常磐炭礪茨城礪業所タイムス」

五八、合磯海岸のウミウ

本日の読売新聞に左の記事がありました。

「福島県平市豊間の合磯海岸にある高さ二十米の二見ヶ浦という小島に数十羽のウミウが棲んでいるのを、このほど同県教委文化財保護委員会で調べたところ、この島で蕃殖していることがわかった。これまでは難になってから島に渡ってくるものと考えられていたが、附近の子供たちが卵をとっていたらしい……云々」

私は渡満前、昭和九年度に豊間漁港修築事務所長として勤務中、漁港周辺の豊間灯台附近でイソヒヨドリの蕃殖等は観察したのですが、ウミウの蕃殖は観察出来なかったものです。(一九五五・六・一二
一九五五・七「野鳥」

五九、大北溪谷探鳥会報告

五月二十七日、第四日曜日に大北溪谷の探鳥会を開催した。午前五時三十分、礪業事務所出発。生憎の雨天で参加者が少なかったが、野鳥の方では雨にもめげず熱心に囀鳴していた。録音して置きたかったのもある。先ず、東京電力石岡第一発電所水槽附近のオオルリの、ピピピピピイチ! ポイチ! ピイチ! ポイチ! の繰返しを堪能し、ホトトギスの、フギョ! キキョウ! キキョウ! を頭上にきき、ウグイスの、ホホホホケキョ! ケキョ! ケキョ! などの競鳴を耳にした。おそらくその巢のどれかには、ホトトギスの赤い卵が托されたものであろう。

継石不動尊ではキビタキの、ポッピッピッ ポッピッピッ ウォーシ……と、いつまでもながい変化のある囀鳴。横川発電所で休憩。林道を下り、正午頃解散した。参加者は塚本辰雄・高橋和夫・豊田農夫雄・山縣幸の四名で記録した野鳥は次の通りである。

1 スズメ(多)2 キセキレイ(普)3 ウグイス(多)4 セグロセキレイ(少)5 コチョウゲンボウ(一)6 イカルチドリ(少)7 ヒバリ(少)8 ホオジロ(多)9 シジュウカラ(普)10 ヒヨドリ(普)11 ヒガラ(普)12 オオルリ(普)13 メジロ(少)14 コゲラ(少)15 コカワラヒワ(少)16 ホトトギス(少)17 サンショウクイ(普)18 カケス(少)19 ハシブトガラス(少)20 キビタキ(少)21 ヤブサメ(少)22 カワガラス(少)23 エナガ(少)24 ヤマガラ(少)25 ムクドリ(少)26 ツバメ(少)

一九五六・六・二一「茨城礪業所タイムス」

六〇、愛鳥クラブの発足を祝して

「花鳥を愛すは聖なり」 - 古人は、うまいことを言ったものである。

当礪業所には、情操の高い人々が少くないのであるから、愛鳥クラブの発足によって益々情操が高まるだろう。自然科学の向上にも大いに役立つだろう。

近年のカスミ網・空気銃・農薬等のために、有益な野鳥が激減し心を痛めているが、会員は特別な研究以外には野鳥を飼育しないこととし、なるべく巣引鳥を飼育しようということになった。

小鳥の観察は、飼育一本立というわけにいかず、野外観察一本立というわけにもいかない。双方の観察によってはじめて成果が挙がるものであるから、野外探鳥もやろう。餌料なども調査研究しよう。巣箱もかけてやろう。皆の力で、大いに成果を挙げようというのが、目的である。

会員は、小野上正查(会長)石井謙三(副会長)豊田農夫雄(会計)西内義矩・池村昭(幹事)柴田三男・木村勝太郎(指導員)山縣幸(顧問)等で、目下二十名程であるが、愈々小鳥の囀鳴・蕃殖期となることであるから、同好の士は進んで入会されたい。餌の格安入手の便があり、飼鳥の交換なども出来る。五~六月には雨天でない限り、毎公休日に大北溪谷の探鳥会を開催する予定である。

一九五七・四・一一「茨城礪業所タイムス」

六一、野鳥報告

1

終戦前、私は八年ばかり大陸で暮したので、茨城あたりで冬鳥としてだけしか観察出来なかったベニマシコやジョウビタキ等の営巣を大陸では観察することが出来た。そのジョウビタキの雌を、五月下旬に同僚の松崎音次郎君(以下 M)が持参した。

「これは何という鳥か？」との質問。

頭部を一見ただけで、ジョウビタキの雌とすぐに判明した。

渡り遅れたにしても、あまりに遅れ過ぎているので、M君の掌を開かせたところ、もしやと案じた通りの負傷鳥。おそらく空気銃の被害であろう - 翼をやられている。

路傍で拾ったのだという。

「可哀そうだから飼育してくれ」とのこと。

私は今では、雀科のよう u 粒餌鳥だけしか飼育していない。摺餌鳥を飼育する意志はないので、断ったが、M君も飼育する気はないらしい。そのジョウビタキは不具になってはいるが、野外で採餌は可能と見定めたので - 負傷の跡が古く、肉づきもよい - すぐ草原へ放鳥するよう M君にすすめた。

春が来ても生れ故郷に帰られないジョウビタキ。

昨年の六月には、蕃殖期なのに、大北溪谷でオオルリを射とうとしている若い男女を目撃したが、私は自動車で通過したので、ただみてすぎたことを何かにすまなく思っている。

オオルリは大陸でも蕃殖する。

パイチイ...・ポイジイ.....パイチイ.....ポイジイ.....その囀鳴を耳にする都度、徳田博士に随行して白頭山周辺のしぐれ鉱産資源を調査した機に耳にした、あのセミ時雨のようなオオルリ等の囀鳴を想起する。

大陸では個体の多いコシアカツバメは日本では稀だけれど、茨城では戦前助川町(今の日立市)で営巣蕃殖したが、戦後は高萩駅構内でも営巣蕃殖した。昨年から同駅構内に帰来しないので、どうしたのかと案じていたところ、本年は磯原町中川書店の二階に営巣した。昨年から営巣したのだそうだが、昨年はスズメに襲撃破壊されてしまったそうである。

その巣跡に本年はツバメが営巣し、四、五米離れた位置に本年も営巣したものである。

これは昨日、高岡村役場へ出張の帰途、磯原駅附近で自動車の内からコシアカツバメ一羽の飛翔を目撃したので、本日高萩登記所へ出張の帰途、磯原駅附近の軒並を調べたところ中川書店でその巣を見つけたわけである。

おそらく、昨年迄は、高萩駅構内で営巣していた一族が、昨年から磯原町に移動したものでなかろうか？コシアカツバメの飛翔や営巣をみるにつけ、大陸の思出が甦る。

それにしても珍しい鳥だからなどと、空気銃の犠牲にでもなってはとの懸念から、中川書店主にはくれぐれも用心を依頼した。(一九五三・六・二四)

2

六月二十九日に、磯原町高林医院玄関内で営巣中のコシアカツバメ一番を観察した。本年は磯原町で二箇営巣したわけである。

七月二日に、大北溪谷の東電第一第二発電所間の林道切取の隙間で、オオルリの巣を見たが、四卵を雌が抱卵中のものであった。

尚採集されたとおぼしいオオルリの巣(コケの残材によって判明)を二箇見た。

巣立したらしい、キセキレイの巣も一箇見た。

ホオジロ・キセキレイ・ヒヨドリ・エナガ等の親子連やウグイス・サンショウクイ・ヤブサメ・メジロ・ヒガラ・キビタキ・オオルリ・カワガラス等の囀鳴や峰の頂上を円舞するトビやクマタカ等も目撃した。

七月九日に、横川発電所取入口敷地買収の交渉で松岡町の I 氏を訪問したおり、連日の雨が晴れたから、ニイニイゼミの初鳴を耳にした。松岡での用務を果してから、日立駅構内上屋に営巣中のコシアカツバメを観察した。十三巣あり、内一巣は破壊されていた。営巣を開始したばかりのものが多いけれども、完成したものもあって、抱卵中とおぼしく巣口に尾羽の先端が見られるのも一巣あり、二巣が一カ所に接続のもあった。古巣らしいのは見当らない。

白井邦彦氏が「野鳥」第一五九号に発表された通り、日立市には戦時中にもコシアカツバメが蕃殖して居り、現在でも駅構内のホーム上屋にだけでも十三巣ある。白井氏の希望もあることだから、いずれ又精査して報告したい。(一九五三・七・二二)

一九五三・一一「野鳥」

3

七月二十一日に、高萩町で、高萩土木事務所の周辺を飛翔するコシアカツバメ二羽を目撃した。

七月三十日に、常磐炭礪茨城礪業所タイムスの編輯人河野三郎氏と磯原町へコシアカツバメの巣を写真撮影に出向いた。中川書店の巣はスズメが奪って産卵、孵化したものの如く親スズメが餌を運んで出入していた。高林医院玄関内の巣にはスズメが近づけないとみえ、コシアカツバメが無事に産卵孵化して育雛中であつた。光線の具合で写真は不成功であつた。

八月一日に、日立駅のコシアカツバメを観察した。既報の七月九日調査一・二号ホーム上屋の十三巣は、完全なものが七巣大破八巣中破二巣という大変化であつた。尚第三号ホームの上屋にも完全な一巣があつた。完全なものはいずれも育雛中で、雛が巣口に首を出して餌を受けている巣立直前のものもあり、中破の巣に餌を運んでいるものもあつた。

心無き人もあればあつたもので、大破・中破された巣中の卵や雛はみじんになったことであろう。

尚七月六日に、大北溪谷で観察した四卵在中のオオルリの巣も十八日には巣材諸共何人かに採集された後となつた。

無用の殺生はつつしむべきだ - こんなわかり切つたことが、どうしてわからない人があるのかと、わからなくなった。(一九五三・八・九)

4

近年にない連日の雨。農家の憂慮もさること乍ら、羽族の苦勞も気の毒なほど。辛じて蕃殖を了えた夏鳥達は、八月に入ると次ぎつぎに南方へ飛去し、留鳥の一部もそれにつづいた。ツバメが飛去してさびしい空にも、八月二十一日には小型の可愛いショウドウツバメ三羽が先ず北方から飛来し、二十九日には三十羽位の一団となり、九月十二日迄滞在して一挙に飛去した。九月二十六日久し振りの晴間の空をアマ

ツバメが大群をなして北方から飛来し、滞在しないで通過した。いつもツバメより遅れて帰来し、ツバメより遅れて飛去するコシアカツバメだけが、日立・高萩・磯原各駅附近で飛翔しているだけになった。

十月十六日には、冬鳥のジョウビタキ雄一羽が渡来した。十月二十日に、日立駅のコシアカツバメを調査したが三羽だけ渡り遅れて残っていた。

十月二十四日に、ピンズイが一羽渡来した。二十五日に、東京本社へ出張の途中車中から日立駅のコシアカツバメを探したが一羽も見当らなかった。東京で、二十七日の朝、根津神社の境内でシメニ羽、オナガ一羽、ムクドリ一羽を目撃出来たのはうれしかった。

大北溪谷の冬鳥は、その後三十日にアオジー一羽、シメ一羽、十一月四日にカシラダカ一羽、二十日にマヒワ三羽、二十四日にルリビタキ一羽、ハヤブサ一羽、アカハラ一羽、三十日にベニマシコ二羽、十二月四日にツグミ一羽、ミソサザイ一羽、七日にウソ一羽、シロハラ一羽、十一日にカヤクグリ一羽、クロジー一羽等の渡来を確認した。

十二月十八～二十日の三日間、冬には珍しい温暖な日和だったせいか、二十日の朝、溪谷入口の桜坂附近の畑で季節はずれのヒバリが囀鳴した。

本年の冬鳥は、ジョウビタキ・ベニマシコ等が例年より多いようで、マヒワ・ピンズイ等が少く、アトリ等はまだ姿を現さない。まだ降雪がなく、山に雪でも積れば冬鳥の個体が増し、尚出現する鳥種もあるだろうと思う。(一九五三・一・二・三)

一九五四・五「野鳥」

六二、野鳥だより

1

私は昭和二十五年二月石尊山(茨城県多賀郡磯原町)で捕獲したオオマシコの雌雄を飼育しました。ところが、ベニマシコ同様換羽期に美しい濃紫紅色が灰白色に変わりました。同時に捕獲したウソの内、雌雄二羽だけが換羽期でもないのに雄は頬の紅色の極一部だけ紅色を残して全身漆黒色に変わりました。雌は両翼だけ白色に変わりました。他のウソは換羽後も雄の腹部の紅色が青灰色となっただけで頬はやはり美しい紅色です。

籠はカナリヤ用の箱籠で、北向の日光の直射をうけることのない玄関の下駄箱の上で飼育したものです。いずれも同居。給餌はヒエを主としエゴマ・黒ゴマ・アワ・イノコズチ等少量。青物は菜の生葉です。

黒変したウソはいつも片隅の暗い止木の端を独占して他鳥の止まる事を許しませんでした。そして一群中最も健康で元気つづきでした。白変したウソは明るい方を好んでいました。アトリ科の野鳥は異種と同居させても餌が不足しない限り闘争が激しくなく平和です。万一をおもって写真をと考え同僚の K 氏に依頼した事もあります。都合で遅れているうちに二十六年五月十八日隣家の坊やに、黒変したウソと変化のなかったウソの二羽を逃がされてしまいました。九月末に又家の子供達に白変中のウソとベニマシコの雄の二羽を逃がされてしまいました。変化をつづけて観察するつもりだったのに残念でした。

今年は五十年来の大雪とかで、雪の都度奥山から里へ野鳥の小群が渡来しました。

ここの社宅から約一軒位東南の N 家(農)で、その群中から白色のホオジロ?を一羽捕獲したとのことでした。見てやってくれと、同僚の M 氏の報告を受けたので、出向いたところ、すぐ落ちたので放棄してしまったとの事でした。(一九五二・三・二)

2

私は今、飼育中の野鳥をカナリヤ籠二箱に分け、一組にはイカル(雄)・ベニマシコ(雄)・コカワラヒワ(雄)・ウソ(雄)・アオジ(雄)を入れ、二組にはオオマシコ(雌)・ウソ(雄)・不具のウソ(雌)・ウソ(雌)を入れてあります。

いずれもアトリ科の鳥で温和でも、同時に入れたのではないから、はじめは古顔がはばをきかせるのはやむを得ないことです。

然し、それはものの一カ月とつづかず、給餌の時の小争いから勝負がつくと地位が顛倒してしまいます。

一組ではコカワラヒワとアオジが互に譲らないで勝負の見定めがつかない小争いを継続中に、ベニマシコとウソとすぐイカルを入れてみたのですが、イカルは少しも争わずに直に王座を占め、コカワラヒワとアオジの争いはやみ、ウソが頑張り出してコカワラヒワ・アオジ・ベニマシコを近づけずに飽食するまで採餌し、水浴もほしいままにしてからでない譲らないという状態です。イカルはそれらの争いには知らぬ顔です。イカルが採餌水浴をするときだけはウソもそっと身をひきます。

二組の古顔オオマシコはウソ達を近づけず優位。ウソ達の間で争いが起り、右足が折れている不具の雌が二位となりました。私は不具の雌があまりいじめられるようなら、別の籠に移してやろうと思っていたほどですから、それは意外だったのです。不具でない雌が三位。雄が四位。雄は皆が順々に飽食した後でなければ採餌出来ないというような状態になりました。

それが、どうした風の吹き廻しかオオマシコが、足の不自由なウソの雌とウソの雄をさけるようになり、先ず不具のウソが採餌してから後が騒しくなりました。オオマシコが採餌しようとする、ウソの雄が襲い、それをウソの雌が襲い、それをまたオオマシコが襲う—それを繰返すようになったのです。これでは不具の雌以外の一羽を別の籠に移すよりなからうと思っているうちに、オオマシコがまたウソの雄を襲うようになったので、今では安心してそのままにしてあります。オオマシコの雌雄、ベニマシコの雌雄、ウソの雌雄—いずれも雌雄を同居させた事がありますが、古参、新参の順位はつかのまで、その多くはすぐ雌が優位になりました。

異種の同居では、古参ではあるが、一番小型のベニマシコがすぐウソに負け、ウソがオオマシコに負け—というようになり、我意を得たりと微笑したのですが、しばらくしてベニマシコがにわかに優位となり、オオマシコやウソを従えてしまったことがありました。それも意外だった一つです。

野鳥の世界では古いものが勝、強いものが勝、とばかりもいわれないものがあるようです。(一九五二・八・二四)

3

昨年換羽で灰白色に変わったオオマシコの雌が、本年換羽では淡紅色に変わりました。ベニマシコの雄は本年換羽でも、やはり灰白色です。餌は昨年よりエゴマを少量増しただけです。十一月二日に一立坪の禽舎を修理して飼鳥をカナリヤ籠から禽舎に移しました。

十月下旬、猫の傷害を受けたウソの雄一羽が十一月四日に落命しました。六日には不具のウソ雌が水

浴中に凍死しました。十五周にウソの雄一羽が猫に食害されました。夜金網に止まって就寝しているのを襲撃されたのです。猫害防止と防寒のため、夜間は禽舎にコモをかけることにしました。

十一月九日に渡来したクロジの雄一羽を捕獲し禽舎に入れました。新参なのでびくびくしています。採餌の際にウソ雌がイカル雄を追い払うようになり、オオマシコ雌がウソ雌を追い払い、イカル雄はオオマシコ雌を追い払い、優劣不明になりました。コカワラヒワ雄はベニマシコ雄を、ベニマシコ雄はクロジ雄をとという順になりました。

さて大北溪谷の野鳥ですが、八月三十一日に下君田～上君田間の溪流でミソサザイを一羽目撃しました。渡来にしては早く、蕃殖にしては一羽だけというのはどうかと思います。蕃殖期中にキクイタダキを目撃した年があったので留鳥かと思っていましたが、まだ当地では営巢の確認にいたりません。

十一月二十一日正午頃、横川～下君田間でツツドリのポン……ポン……ポン……という鳴声がきけたのは意外でした。

本年の冬鳥は例年より種類も個体も少く、いつも大群をなすビンズィ・アトリ・カシラダカ・イヒワ等僅かに十羽内外の小群を目撃出来るだけなのです。(一九五二・二一・二八)

一九五三・三「動物文学」

4

大北溪谷の春の鳥 - 本年は四月一日にツバメ一羽帰来してから、日毎に個体を増しました。十五日にヤマセミ二羽を目撃しました。二十一日にオオルリ雄一羽帰来してパイチイ! ポイジイ! パイチイ! ポイジイ! と囀鳴をはじめました。二十五日に横川で花崗岩の断崖に点綴する赤・紫・白の山ツツジの美しい天然の景色にみとれた時に、谷間の清流のほとりからヤブサメの初鳴を耳にしました。ジイ ジイ ジイジイと虫のような可憐な声。

間もなくチョチョ ビィッ! チョチョ ビィッ! とセンダイムシクイの声。留鳥のウグイス・ヒヨドリ・ホオジロ等は石岡～下君田間十余軒の溪谷いたるところでほとんど絶間なく耳にしました。その日は下君田に宿泊。翌二十六日に下君田～横川間の小山でセグロセキレイの雛が河原で親鳥から餌を受けているのを目撃しました。篠藪でモズの雛が親鳥に餌をねだる声も耳にしました。徒歩のこととて同行の二名と小山～横川間で小憩中、路傍の岩石隙間にセグロセキレイの巣を見つけました。孵化直前の卵が四個。カワガラスの雛はもう一本立になり水中で餌を漁っているのがありました。

五月二日にはオオルリ・ヤブサメ等著しく個体が増し、サンコウチョウも帰来して、ツキ、ヒ、ホシ、ホイホイホイ……等と囀鳴して居りました。キビタキも帰来囀鳴。

五月八日には小雨の空で、ピリ! ピリ! とサンツョウクイが囀鳴しました。夜ホトトギスが囀鳴。その夜は同行の一名と下君田に宿泊しました。

四月二十四日に冬鳥のマヒワ約百羽位の一群を目撃したのが終認かと思っていたところが、五月十二日に石岡地内で一羽目撃したのが終認となりました。

五月十七日に上君田牧場で、ワラビがりをしました。久慈郡と境する分水嶺に立てば、にわかに眺望が開けます。刈るほどワラビがありますからとの S 氏の誘いであったが、誇張でなくほんとに刈るほどのワラビに驚きました。谷間には刈るほどの蔭。それよりも私を悦ばせてくれたのはオオルリをはじめ平地では耳にすることの出来ない諸々の野鳥の囀鳴と、意外にも山地には稀なオナガを一羽標高八〇米以上の山地で目撃出来たことです。これは大北溪谷に於いては私にとっての初発見です。

大北溪谷は十一月下旬の紅葉と、四月下旬から五月上旬のツツジがすばらしいのですが、五～六月の野鳥の囀鳴は又格別です。(一九五三・六・四)

一九五三・六「動物文学」

蜂須賀先生の思い出

五月十四日蜂須賀正氏理博(元侯爵が狭心症で一言の遺言も無く急逝されたとのこと、五十二歳では、私より二年先きに生れただけで、老衰ならとにかくとして、人生のはかなさが感じられる。

戦時中私が満洲から蒙疆へ赴任の機に、蜂須賀博士は「是非カンガルーネズミの雌雄を捕獲して貰いたい、飼育研究したいから」との御依頼であった。

在蒙一カ年で突然終戦となったので、残念乍ら御希望を叶えることが出来なかった。それは終戦直後の天津集結中に「東亜新報」紙上で発表した通りであった。

蜂須賀先生は「野鳥」「動物文学」やその他の拙稿を楽しみにしてくださった。私も先生の御発表が楽しみだった。広く世界を踏査されていたので、教えられることが実に多かった。

先生の著作がまとまって出版されることを望んでやまない。

一九五三・六「動物文学」

5

五月二十二日に、横川～下君田～若栗～松岡～高萩を一周しました。山地ではオオルリをはじめ、あらゆる野鳥が囀鳴して居りましたが、松岡～高萩の平地ではヒバリと僅かの鳥が囀鳴するだけで、セッカのビッ! ビッ! ビッ! ビッ! ビッ! という囀鳴に耳を傾けさせられただけのものでした。

五月二十六日に横川字切アケの河原でイカルチドリを一羽目撃出来たのは意外の喜びでした。

五月二十八日に東京本社へ出張、三十日山元着、その足で横川～下君田へ、発電所の調査に立会しました。その機も横川地内でイカルチドリを目撃しましたから、大北溪谷の河原でも蕃殖するものと思われます。

六月二日下君田のS氏宅で飼育中のハシボソガラスの雛を観察。四日に横川で非常に仲のよいヤブサメ一番目撃。七日に横川～下君田～若栗～松岡～高萩を一周し、若栗でイカルとウグイスが交互に鳴合っているのを微笑ましく耳にしました。十日に下君田でサソコウチョウを目撃。十一日に横川の雑木林でキビタキ雄一羽目撃、その羽掃除を観察。十三日、十九日、二十二日にも横川へ出向きましたが記録するほどのものもなく、二十三日に若栗～松岡～磯原を一周した機に磯原駅前珍らしくコシアカツバメ一羽の飛翔を発見しました。

二十四日に磯原町中川書店の二階に営巣したコシアカツバメ一巣を発見しました。昨年一巣営巣したそうですが、スズメに襲撃され破壊されてしまったとのこと。

本年はその巣跡にツバメが営巣して居ります。

二十九日に磯原町高林医院玄関内に営巣中のコシアカツバメを観察しました。出来形八〇%という程度のものでした。

七月二日に石岡～横川間(東電第一～第二発電所中間)の路傍で切土の隙間にオオルリの巣があり、四卵を雌が抱卵中のものでした。

六日にも石岡～横川間(東電第一発電所とその取水口間)で花崗岩の切取隙間にやはり四卵在中のオオルリの巣を見つけました。

九日に日立駅のホーム上屋に営巣中のコシアカツバメを観察しました。十三巣あり、内一箇は破壊されて中止したものでした。

十二日早朝禽舎のオオマシコ雌が野猫に食害されました。イカル雄も傷つけられ、ウソ雄一羽重傷です。

十四日に石岡～横川間大北溪谷の林道を離れて送電線敷地となる各峰々の分水嶺を踏査しました。林中でサンショウクイ約四十羽の一群を目撃しました。キョロロロ……キョロロロ……キョロロロ……とアカショウビンが囀鳴して居りました。アカショウビンは春秋二季に通過するだけのものと思っていたのですが、大北溪谷でも蕃殖する夏鳥であったことが判明しました。

二十一日に高萩土木事務所附近を飛翔するコシアカツバメ二羽を目撃しました。

三十日に磯原町のコシアカツバメを観察しました。中川書店の巣はスズメに奪われ親スズメが巣中の雛に餌を運んで居りました。高林医院玄関内のは無事でコシアカツバメが育雛中でありました。(一九五三・八・二四)

一九五三・九「動物文学」

6

庭内の禽舎は蛇・猫の被害防止が容易でないので、それは養鶏舎とし、別に母家に下家をおろして五立方メートルの禽舎を新築して、昨年七月十五日からイカル雄一・ベニマシコ雄二・オオマシコ雄一・ウソ雄一・雌一等を新舎へ移しました。新舎は三分目金網の二重張なので、その後は蛇や猫の害は一度も受けません。

昨秋の換羽もベニマシコは灰白色に変わったままで元の紅色は現われませんでした。今度オオマシコは淡赤褐色に変わりました。ウソは頬だけでなく腹部もそのまま紅色が再現しました。イカルは老鳥中の老鳥となったからか、両翼と尾羽が白化しました。

禽舎の周囲には毎日スズメ達が集ります。私はスズメにも餌を与えて遊ばせているのですが禽舎の鳥にはもう歯が立たなくなった猫が、禽舎の床下にかくれていてスズメがよると飛びつくのです。それとわかったので、私は床下をふさぎましたところ、またスズメが近よって遊ぶようになりました。

本年は空気銃の猟者が少なくなったことをうれしく思いますが、ツグミ・アトリ・カシラダカ・マヒワ等の冬鳥の個体が激減したのはかなしいことです。

害鳥駆除だなど一実には有益な野鳥なのに一カスミ網で一網打尽などとは、一文惜しみの百知らずも甚だしいものと思います。

野鳥を乱獲するカスミ網は嚴重に取締るべきだと思います。自然の平衡が破られたら大変です。(一九五六・一・二〇)

一九五六・三「動物文学」

7

本年はオオマシコ雄が八月中に換羽を終り、美しい白光のある赤褐色になりましたが、元の紫紅色は現われません。ベニマシコ雄二羽共遅れて十月に換羽しましたが、依然として灰白色で美しい紅色は現われません。ウソは雌雄共九月中に換羽し、雄の腹部の紅色が僅かに淡色となりました。イカル雄も九月中

に換羽し、これは昨年と大いに異り翼も尾も自然の黒色に戻りましたから、昨年白化したのは必ずしも老齢となったからではなかったようです。餌は黒ゴマ・落花生を増し、リンゴ・イチジク等の果物も与えました。

ベニマシコの先輩の方がオオマシコを追い、オオマシコはイカルを追うこともあり、ベニマシコはイカルに遠慮しているようです。ウソが下積です。

本年は珍らしく、当地でコチョウゲンボが蕃殖したらしく、蕃殖期にも禽舎の附近を飛翔したので、いながらに観察することが出来ました。(一九五六・一一・一八)

一九五六・二一「動物文学」

六三、ヒヨドリについて

五月二十八日中郷診療所裏山林の土地境界藪刈中、地上高一米二〇糎(センチ)の小松の枝にヒヨドリの空巣一箇発見し、次いで六月三日、八米離れた、地上高一米二〇糎のサルツボサカキの枝上でも又一箇発見した。いずれも本年の巣で、巣立後のものと思われるものであった。巣の外径一五〇糎、内径八糎、深さ八糎で、外側のつる巣材は、ヤマウルシ・ウツギの実房・ヘクソカズラの蔓・杉皮・ダッシメン・モメン白布・半紙・ヤママユ・大根の茎葉・禾本科の穂その他で、産座には獣毛・鶏の羽が用いられてあった。

ヒヨドリは、桜桃・グミ・ミカン・カキ等の果実や、菜・大根の葉や、ナンテン・モチノキ・サカキ・ヘクソカズラ・ウメモドキ等の実を啄んだりするが、山林・果樹園・畑・庭園等で捕食する昆虫の種類や数量は挙げ切れない。

夏鳥のツバメ等は、空中で成虫を捕食するが、ヒヨドリは、スズメ・キセキレイ等と共に、地上や樹上の幼虫を多く捕食する。ウジ等をも大いに捕食するから、農林関係ばかりではなく衛生上にも役立っている。

ホウタイ・ダッシメン・獣毛等を巣材として診療所周辺や豚小屋あたりから運んでいるが、その周辺のウジ・ハエ等をも大いに捕食していることであろう。

ヒヨドリの一部は、冬季南方へ渡って越冬するが、診療所附近のヒヨドリは、いつも渡去しない。附近にノイバラ・ヘクソカズラ・ヤマウルシ・ヌルデ等が自生しているし、冬季の食糧にもことかかないとみえて、移動せずに地鳥となっているものであろう。

四季を通じて、入院中の傷病者を楽しませてくれてもいるだろう。(一九五七・六・一九)

一九五七・七・一「茨城礦業所タイムス」

六四、ウソ・ハシロ

1

ウソ(アトリ科)のハシロは、北方の高山帯で生れた。秋になると、祖先達に習って同腹の兄弟姉妹達と一緒に、食糧を求めて、だんだん低山帯に移動した。ハシロ達同腹の四羽はいつも行動を共にした。

ハシロ達は、昆虫が好きで、幼虫でも成虫でもよろこんで捕食した。羽族のなかには、昆虫を生きたまま呑み込む種類もあるが、ハシロ達は、どんな小さな昆虫をでも、必ずよく噛んだ上で呑み込んだ。

秋から冬にかけて、山中の昆虫達がだんだん姿を消したので、ハシロ達は、ウソ特有の黒くて太くて強い嘴 - 烏賊(いか)のそれに似た - で、木の実、草の実の殻を入念に摺除いては、その中の実を食べた。ハギ(マメ科)・ツツジ(石南科)・カエデ(カエデ科)・ウツギ・ガクウツギ・サワアジサイ(ユキノシタ科)・イヌザンショウ(ヘンルウダ科)等の実を、ぽつりぽつりと音を立て乍ら、ゆっくりと食べる。蔓生草本のヘクソカズラ(アカネ科)の種子は特に好物である。谷間のイノコズチ(ヒユ科)・ヤマジソ(シンケイ科)やタデ科や禾本科植物の種子等も食べ、早春の頃には、ふくらんできたサクラ・ウメ・モモ(バラ科)等の蕾の芽を好んで食べるが、葉の芽は決して食べない。

ハシロは低山帯で越冬した最初の冬から種々の経験を積むことが出来た。

ハシロは頬が鮮紅色に輝き、胸毛もうっすらと紅色を帯びた雄で、右翼の風切羽に一枚白色の挿羽があるので、羽白と愛禽家の Y によって命名されたものである。

十二月には珍しい小春日和の日に、ハシロは、茨城県多賀郡南中郷村石岡地内の大北溪谷(東京電力 KK 大北川石岡第一発電所水槽附近)の藪中で、ウツギの実を食べていた。ふと気付くと、同腹達が近くに居らない。フェイ……フェイ……と呼んでみたが、応えがない。それで、小高い分水嶺の松の梢に飛翔して、フェイ……フェイ……と声高に連呼した。すると、四十米程南方の山道から、ヒョウ……ヒョウ……と応えがあった。ハシロは発声地へ一直線に飛翔した。ヒョウ……ヒョウ……と又、声がする。ハシロも、フェイ……フェイ……と応じ乍ら同種の姿を探求した。雑木林の枝から枝へと、首をかしげ、羽ばたきをし、尾を斜左右に振り乍ら。小声で親しみの言葉をかけたが、同種の姿が見当らない。ただ路上に、登山帽をかぶりジャンパーを着た、ゲートル巻の人間 Y が一人で、たたずんでいるだけである。ハシロと Y の視線が会った。Y は又、ヒョウ……と口笛を吹いた。発声主が、人間の Y とわかってハシロは驚いた。僅かに三米ばかりの近距離である。

「ほう、珍しい挿羽だなあーハシロか」

と、Y はつぶやいた。

Y が歩み去ったので、ハシロは又、フェイ……フェイ……と同種を求めた。フェイ……ヒョウ……と、百米程東の谷間から同種の応えがあったので、ハシロは一直線に、その谷間へ飛翔した。

その谷間には杉の小森があり、中央には清水が細く流れている。

大北川の支流足田内川の更に細流の細久保沢の水源地である。山腹は雑木林で、谷間にはススキ・イノコズチ・ヤマジソ・サワアジサイ・ヘクソカズラ・ウド・タラノキ・アオキ・アケビ・ノブドウ・ムラサキシキブ・キイチゴ・クサイチゴ・ヤマブキ・フジ・クズ・ネコヤナギ・ミヤマヤナギ等があり、山腹にはヌルデ・ヤマウルシ・ハギ・ツツジ・カエデ・ハンノキ・サクラ・ナラ・カシ・サカキ・ガマズミ・イヌツゲ・ヒイラギ・ネムノキ・アカマツ等が混生している。植林したクヌギ林やヒノキ林もある。ハシロは水辺のミヤマヤナギの小枝に止まった。同腹達は、もう水浴を了えて羽掃除に懸命であった。ハシロはうれしかった。小声で挨拶をして、Y の眼前でした通りに親しみの表現をしてから水辺に降り、三口ばかり水を飲んで水浴を開始した。そのとき、十羽ばかりのマヒワ(アトリ科)の小群が、ギョーン……ギョーン……と地鳴高く水源地の上空を回翔してから、北面の雑木林中にあるハンノキに降り、その種子に鈴成りにぶら下った。間もなく、一羽が谷間の水辺に飛来すると、ついで皆飛来した。花崗岩の小流 - ちょろちょろとかすかな流れでは、マヒワ達が押しあい乍ら水を飲み、盛んな水浴がはじめられた。水浴を了えたマヒワ達は、周囲の杉の木の種子に鈴成りとなって、その実を食べはじめた。クロジ(アトリ科)の雌雄が、チュウン……チン……と藪から現われて、そのこぼれ種子を地上で拾いはじめた。がさがたと音を立て

乍ら落葉をはねて、地虫を拾っていたシロハラ(鶇科)が飛来して水を飲み、水面の落葉をはねて虫を探した。ジュッ……ジイッ……とウグイス(鶯科)の雌雄が、下流の藪で餌を漁っている。水源のサワアジサイの枝上で、ハシロが羽掃除をしていると、ジュルルル……ジュイリリリ……と、エナガ(四十雀科)の一群十余羽が、山頂から木々を伝わって谷間へ降りて来た。エナガは一腹十羽内外で、蕃殖期以外は、一腹が必ず連立っていて、決して紛れることがない。和やかな家族連である。その一群には、同行者がある。チョウ……チイッ……と、メジロ(メジロ科)の雌雄。シジュウカラ(四十雀科)が、ジュジュビイ……カラカラ……などと、嘎れ声で交じっている。ヒガラ・コガラ・キクイタダキ(四十雀科)も同行し、殿りのヤマガラ(四十雀科)は頂上からいきなり谷間に先駆して、ツッ・…・パイ　パイ　パイと嘆声を挙げながら水辺に降り立った。ルリビタキ(鶇科)がムラサキシキブの実を啄み、ジョウビタキ(鶇科)はヘクソカズラの実を啄み、ヒヨドリ(鶇科)はヌルデの実を啄んでいる。タラボやウドの実は、もう已に留鳥のメジロやヒヨドリ達が、先に食べ尽したものであろう一粒も残ってはいない。シメ(アトリ科)がチイッ……ツウッ……と東方の人里へ向って波状に飛んで通過した。キイッ……キョッ……キョッ……と、前奏をしてから、ツキ…ヒイ・ホシ……と、イカル(アトリ科)が山頂で囀鳴をした。お先に水浴を了えて、ヌルデやカエデの実を飽食して満足したものであろう。ゼイッ……ゼウッ……とミソサザイ(ミソサザイ科)が水流を辿って下流へ去る。 IPPITZ ケイジョウ ツカマツリソロ と、きけばきけるホオジロ(アトリ科)の囀鳴。いつのまにか、クロジの傍でアオジ(アトリ科)も餌を拾っている。パイッ…　ピョウ……、パイッ……ピョウ……とベニマシコ(アトリ科)が山と谷で呼応していたが、山の方が、水辺に飛来した。パイッ…　ピョウ…　パイッ…　ピョウ……と小声の濁音になってしばらく挨拶を交している。一羽が谷間でイノコズチの実を啄んでいたのがあった。

キリイッ…ケョウレ……と、コカワラヒワ(アトリ科)の雌雄が峰の松林から飛来した。樹幹をたたくアカゲラ(キツツキ科)。ケイッ!ケウッ!と、鋭いアカゲラ(キツツキ科)の声、樹幹をよじ挙がるコゲラ(キツツキ科)のギイッ……ギョウ……。カケス(鴉科)のいろいろな擬声。谷間を奪い合う二羽のアカハラ(鶇科)。ノイバラやヘクソカズラに集う、ツグミ(鶇科)。ピンズイ(セキレイ科)のズイッ……ズウッ……と空を飛翔する声、地上で上下に尾を振る姿。カシラダカ(アトリ科)の地上で、チイッ……チュッ……と餌を拾う小群。それらの野鳥達にとっては日課である、朝の水浴を了えた彼等の賑かなコーラス。小鳥達の悦びの物語。真冬でも高らかに囀鳴するものもある。

そのひとときであった。キジバト(ハト科)が一羽、あわただしく水源の杉森へ飛込んで来た。そして、ハシロは魂も凍るような恐怖を、すぐその後で感じたのである。

一九五三・一二「動物文学」

2

丁度その時、クヌギの樹幹をポクポクとたたいていたアカゲラが、

「ツウイッ！」

と、危険信号を發した。

あらゆる野鳥達が、沈黙した。何事だろう？ と耳をすませた。野鳥達は、目よりも耳が敏感である。すると、すぐするどい羽音が起って、キジバトを驚掴みした猛禽がある。クマタカ(鷲鷹科)であった。

キジバトの羽毛が、ぱっと飛散し、「キュウッ!　キュウッ!」と悲鳴が起った。が、すっかり肝をつぶして、すくんでしまった、小鳥達には、キジバトを救出する業がない。

ハシロは、同種達と、杉森へ飛込んで、ただうろうろするばかりである。ハシロは生後幾度か、やさしい父母や同胞達から注意を受けて、じっとすくんだ経験を持ってはいるが、これほどに肝を冷したことは、はじめてである。羽族同志で、このような恐怖が起りうるものとは、夢にも想わぬことであった。

キジバトを引搦んで飛去ったクマタカの恐ろしさ。……

そのとき、キジバトの悲鳴を聞きつけたハシボソガラス(鴉科)の雌雄が、山頂から飛来した。見る間に一羽は上空からクマタカの背部をすどく突撃し、一羽は下空から腹都を突撃した。それを二、三回繰返されて、クマタカはついに獲物を放棄した。キジバトは風に木の葉が舞落ちるように、ふわりふわりと杉森に向って姿を消した。

ハシロはこれを目撃して、羽族中には少しでも油断の出来ない恐ろしい仲間と、安心して頼れる救主の仲間とがあることをはじめて知ったのであった。

それからしばらく時間が過ぎて、ハシロ達はウツギの実を啄んでいると、山腹の雑木林から同種のフェイ! フェイ! という呼び声が耳に入った。このあたりにはハシロ達四羽以外の同種は、まだ渡来していない筈だけれど、或は今同種が渡来したのかもしれないと思い、四羽が相談の上で発声地へ向って偵察に直行した。

その雑木林のナラの下枝に鳥籠が吊下げられてあり、籠の中の同種が呼んでいたのである。

ハシロ達は、そこではじめて囹というものを見たのであった。ハシロはへんに不安を感じた。見れば二十米程離れた松の下で、学帽姿の中学生が二人、じっとハシロ達をみつめている。

ハシロは同腹達に小声で注意を与えた。同腹達は松の葉かげから、二少年をじっと観察した。ハシロ達が飛去しようとするやいば、囹は「心配無用」と、ささやくので、不安乍ら飛去を断念し、樹下のツツジの枝に飛移り、その実を啄み乍ら、尚二少年を観察した。囹はなつかしきりに呼びかける。二少年が音も立てず、動きもしなかったので、不安が薄らぎハシロ達はだんだん囹に近づいた。囹の周辺で挨拶を交している、少年の一人が急に駈寄って来た。ハシロ達は驚いて、松林に逃げ込んだ。ところが、同腹の一羽が、囹の上で飛立てもがいている。少年が二米程に近づいたとき、その同腹は死力を出して羽ばたいた。囹の上には、とりもちが仕掛けられてあったのだ。少年が同腹を掴もうとした瞬間に、同腹はとりもちの棒から辛うじて離れることが出来た。その同腹を置去りには出来ないハシロ達は松葉のかげでいらいらしながら様子をうかがっていたのである。

二少年は息をはずませ乍ら、「惜しいことをした!」と口惜しがっている。とりもちから離れることが出来た同腹は、谷間の杉森めざして飛込んだ。フェイ! ヒョウ! とハシロ達も杉森へ飛込んだ。そしてハシロは、とりもちのついた同腹の翼や足のとりもち除きを助勢した。そのとりもちは種油で練ってあった。嘴についたとりもちを杉の枝にこすりつけて除去する事も一苦勞であった。大きな不安 - 然し、死線を越した後の喜びは、その苦勞もまた楽しかった。ハシロ達は、しばらく喜びのささやきを交していた。囹がまたしきりに呼んでいる。ハシロ達は危険だからもう囹には近寄るまいと互にいさめあった。とりもちにかかった同腹には、もう尾羽がない。尾羽はとりもちの棒につき、脱げてしまったのだ。尾無しになったそのウソはハシロの配偶者であった。それはその日愛禽家の Y によって、当分の間オナシと称されることになった。オナツが羽や足のとりもちを除き去った頃には、とても空腹を感じていた。

オナシはハギの藪に移って、その実をつづけさまに啄んだ。ハシロはオナシの身近に附添って、やさしく保護を加えた。水飲場へも連添って降り、カエデの実も並んで啄んだ。ウソ達はヘクソカズラの実を啄もうとしたが、ツグミとヒヨドリとジョウビタキが、交互に独占していて機会が来ない。そのうちに太

陽が西に傾いて、人里に出ていたシメ・アトリ・カシラダカ等の同科の群や、ビンズィ・ツグミ等の大小群が山麓から、それぞれの峙を目ざして帰って来る。カシラダカの一部小群は水槽附近で、風当りの少い草原の峙についたものもある。ハシロ達も峙に帰る相図を交して一斉に飛立った。ハシロ達の峙は水槽から四軒程奥山の高岡村横川地内の杉森であった。ハシロ達は太北川の溪谷に沿って西方の上流へ向って飛翔した。

オナシが間もなく水槽へ向って引返して来た。横川の境まで飛翔し得ないので途中で断念したものである。オナシが引返したので、ハシロも二羽と別れて引返した。

水槽の分水嶺に立って、野鳥達の峙行を観察している Y。その頭上の松で、ハシロとオナシは、しばらくの間ささやいていたが、相談一決。連立って水槽下の杉森へ飛込んでいった。 - 太陽が西山に没してから、Yも自分の峙をめざして山路を降って行った。

翌朝、ハシロとオナシが目をさました時には、禾本科植物の枯葉の根元を峙としているホオジロが、すでに峙を離れ、小杉の梢で、パイ パイ ツウ! チョ チョ チョ パイ チョパイ チョウツ と朗かに囀鳴をはじめていた。

オナシが、すぐ水源地へ飛翔したので、ハシロもそれにつづいた。いつも乍ら、早朝の水飲場は小鳥の群で賑かである。水を飲み、水浴し、羽掃除を了えた野鳥達は、朝のよこびを歌い、それから、前日までに見定めて置いた、それぞれの採餌場に向って飛立って行く。当のない、無駄な翔路は通らないのである。

ハシロ達は、先ずヘクソカズラの実を啄んでいると、昨夜は峙を異にした、同腹の二羽が、そのヘクソカズラの実を食べに飛来した。間もなく、ツグミが飛来したので、その採餌場はツグミに譲らなければならなくなった。それから、ハギ・カエデ・ウツギ・サワアジサイ・ツツジ等の実を啄み、渴すれば、すぐ水飲場へ飛翔した。ハシロは、尾羽を失って飛翔に不自由な配偶者のオナシを守り、外敵を警戒し、外敵が出現すればいつでも杉森へ逃避出来る範囲で採餌し、終日その杉森の周辺で日を送った。

そして、それからの数日間は別に変った事もなく、同じような事が繰返されたのであった。

一九五四・三「動物文学」

3

その日は、今にも雪が降り出しそうな寒い曇天だったので、野鳥達は皆、採餌に大童であった。

気象に敏感なのは、野鳥共通の本能である。常に大食家のウソであるが、ハシロ達のその日は特に見事な食慾振りであった。

ハシロ達が、谷間でウツギの実を啄んでいると、フェイ! フェイ! と、同種の呼声が聞えた。ハシロ達は、それに応えてはみたが、飛立たない。

しばらくすると、先日の二少年が水源地に姿を現わした。みれば鳥籠を手にしている。罟が盛んに呼ぶ。オナシは高飛信号を発して、峰の松林に向って飛立った。ハシロがそれにつづき、同腹の二羽も相續いて松林へ飛去った。少年達は罟を、ナラの枝に吊し、とりもちの棒を仕掛けた。それが終ると、水源地の沢にカスミ網を張った。長さ約四米で、二段の絹網は、三米位の竹竿二本の間に、縦横共びいんと張り渡された。

水辺にいた、クロジとアオジはすぐ姿を消したが、ルリビタキの雄が一羽、ヒイッ! ヒイッ! と、尾を上下に振り乍ら、少年達の行動を観察している。少年達は、やがてウソの飛去った山頂へ坂路を登って

いった。

口笛を吹いて、ウソを探している。

その頃、ハシロ達はすでに水源地のウツギの木に引返して、その実を啄み乍ら、秘かに罎を観察していた。少年達の行動をも黙々と観察していたのである。ルリビタキが竹竿の先端に止まって、カスミ網をのぞき込んでいる。まもなく、ヘクソカズラの実を啄んでいたヒヨドリが一羽、水飲場へ向って飛翔した。勢よくカスミ網にぶつかって、はね返された。続いて、峰の松林から、コカワラヒワが二羽飛来した。二羽共カスミ網に触れて袋に入った。が、袋が浅かったので、二羽共難なく網から飛出せた。

二少年は、山腹の坂路を通らずに沢伝いに降りて来た。地上で採餌していたアオジが下流へ向って逃込んだ。二少年は、それを追っているうちに、ウツギの実を啄んでいるハシロ達と視線が会った。二少年は胸を躍らせ乍ら、

「ウソだ!」

「ウソだ!」

と、肯きあっている。

瞬間、オナシの危険信号—

ハシロ達は一齐に杉森へ飛込んだ。

二少年が、水飲場から十五米程上流まで近づいたとき、アオジが一羽カスミ網に飛込んだ。一人が駈付けたが袋が浅かったので飛出してしまった。少年は立止まって、

「また、逃げられた!」

と、愚痴をこぼした。もう幾度か失敗を繰返しているのであろう。

大胆にも、ルリビタキが二少年の身辺にいて、どんな些細なことでも見逃すまいと監視しているものようである。ハシロ達は杉の葉かげにかくれて観察していたのだが、そっとハギの枝に飛移ってその実を啄みはじめた。下流からマヒワの一群が飛来して網に触れた。そのうちの三羽が袋に入った。二少年は雀躍して駈寄ったが、三羽共袋から飛出してはるか下流へ飛去してしまった。

反対側から駈寄ったのも、いけなかったのであろう。

ハシロ達が啄んでいるハギの実の枝は、罎も網も少年達も同時に観察出来る位置にある。

そういう都合のよい場所を選んで、食慾を満たし乍ら観察を怠らないのである。

二少年は、ウソ達を罎や網の方へ追いやろうとして、遠廻りに後方から近寄って来た。

その時、山頂から、エナガ・シジュウカラ・ヤマガラ・ヒガラ・メジロ等の一群が、水飲場めざして下りつつあった。

二少年は、ウソに注意力を集中していて夢中であった。二少年が後に廻ったので、ハシロ達は小声で相談をはじめた。相談一決意外にも、ハシロ達は、二少年の頭上を掠めてその後方へ飛立った。二少年はがっかりして谷間へ戻って行く。

ハシロ達は、空高く回翔しながら二少年から目を放さなかった。二少年が谷間に戻りついたときには、もうハシロ達は二少年の頭上杉の枝に羽をやすめて、じっと二少年をみつめていた。二少年には、それがわからなかった。ウソは遠方へ飛去したものと思っている。

その時、水飲場では大騒動が起っていた。エナガ・シジュウカラ・ヤマガラ・ヒガラ・メジロ等、いずれも網に触れていた。袋から飛出したのが、再び網に飛込むというものもあるあわてかたであった。

彼等はもう、水飲や水浴どころではなかった。

二羽のシジュウカラは、とうとう二少年の手中のものとなった。

メジロ達は袋に入っても網を掴まなかったので飛出せたけれど、二羽のシジュウカラは、袋の中で網を掴んでもがいたので、網が足にまきつき、頭も翼も網目に突入れてしまい、もう身動きも出来なくなっていた。二少年は一羽ずつシジュウカラを網からはずそうとしたが、容易にはずれない。少年達は、足からはずしていくという順序を弁えていないのだった。そのシジュウカラの悲鳴。周辺の野鳥達の右往左往

。二少年が、シジュウカラをはずした後の網には、大きな穴が二つずつあけられてあった。

それにしても、少年達が網の上下の間隔を十糎程つめて置いたとしたら網には深い袋が出来た筈だから、その日の野鳥達の被害はシジュウカラ二羽だけに止まらなかったことであろう。

ハシロ達は罔やとりもちやカスミ網や人間の如何に怖ろしいものであるかがよくわかった。

そして、その水源の水飲場で起った騒動を目撃した野鳥達は、その後その水飲場へは一切姿を現わさなくなったのであった。

ハシロ達の本能が教える通り、その翌日はしんしんと雪が降り積った。

林野の鳥達にとって、雪は共通の大きな恐怖なのである。

大雪では、採餌不能となって餓死する鳥もある。

路傍等で、人に雪球を投げつけられて捕獲される鳥などもある。

飢えて弱って、満身に飛べないのだから造作がない。

ハギ・ツツジ・カエデ等、皆雪を深くかぶったので、ハシロ達は水槽敷や水管敷に植えられてあるヨシノザクラの固い蕾を啄んでいた。

すると、十里上峠の方面から、同種の一群が飛来した。フェイ……ヒョウ……と呼び交してその一群六羽はハシロ達の採餌場ヨシノザクラに飛降りた。飢えているので、しきりに蕾を啄みはじめた。雪は十糎あまり積っている。

だんだん樹下一面に、蕾の殻が増し、樹上の枝は裸になっていった。

雪の晴天であった。

山麓から例の二少年が現われた。発電所の方からも K 青年が現われた。いずれも罔のウソを持参した。

二少年は、ヨシノザクラの樹下で蕾の殻を発見するや顔を見合せて肯ずき合い、罔を桜の下枝に吊り下げて、籠の周囲にとりもちの棒をさした。それから桜と桜の間にカスミ網を張り渡した。

K 青年は、五十米程離れて、タンクの裏側の桜の下枝に罔を吊り下げた。そしてとりもちの棒にウソの好物であるこがねいろヘクソカズラの黄金色の美しい房をそっとのせた。

その場所は、少年達の邪魔にならないよう又邪魔をされないようにと考慮された、互には見えない位置を選んだものであった。

ハシロ達は、その時その中央にあるヨシノザクラの蕾を啄んでいたのである。

間もなく、双方の罔が友を呼びはじめた。

六羽が、それに応じて飛立とうとしたので、ハシロはそれを制止した。ハシロの注意を守って同種達は沈黙した。そして熱心に蕾を啄み続けた。双方の罔が盛んに呼応していたが、しばらくして二少年の罔が沈黙した。K 青年の罔が、ヒイ! ヒイ! ヒョッヒョッヒイ! ヒイ! ヒョッヒョッ……と、囀鳴をはじめたからである。樹上のハシロ達が瞬間動揺した。同種の六羽が又飛立とうとした。ハシロは小声で制止したが、とうとう六羽は飛立ったので、オナシが危険信号を発した。六羽は罔から十米ばかりのところから

引返して、傍の松林に飛込んだ。ハシロ達が戻れと合図をしたので、六羽は又ハシロの周囲に飛来して蕾を啄んだ。

突然、銃声が轟いた。

驚いたウソ達は一齐に松林へ飛込んだ。

キジ(雑科)の雄が一羽、その松林へ飛込んで来た。地上に降りたキジは、そこにたたずんでいる Y を発見すると、野獣のような早さで北面の凹地へ走り去った。麓の谷間では道楽で獵をやっている A 翁が愛犬を呼んでいる。K 青年や二少年や A 翁を同時に観察出来る松林。そのハシロ達の松林の樹下では Y が、ハシロ達を観察していた。

ウソ達は、それとわかると、高飛相談の上で一齐に飛立った。六軒程東には太平洋が青黒く広がって見えるだけで、三方は見渡す限りの白雪。飛立ってはみたものの平常のように飛翔力のないハシロ達。半径百米ばかりを一周しただけで戻って来た。ウソ達は同種の声をもよりにヨシノザクラの梢に羽を休めた。

その下枝には、K 青年の罠が吊り下げている。罠はしきりに呼びかけている。

ハシロの同腹達は、危険を知悉しているので、警戒して十米程離れている隣のヨシノザクラへ飛移った。K 青年は、じっとウソ達の動きをみつめている。

同種の六羽は、蕾を啄み乍らだんだん罠に近づいて行く。ハシロの同腹達が飛立つ信号を与えても六羽はそれに応じない。一羽がとりもちの棒のヘクソカズラを啄みに飛下りた。ハシロが急信号を発したので、一齐に飛立ったときには、もう遅かったのだ。その一羽がとりもちの棒から飛立ってない。そのウソの雄は K 青年の手中のものとなった。

ウソの二群九羽が一群となって、二少年の罠の方へ飛翔した。然し、彼等はもう罠に近寄ろうとするものは一羽もなかった。一応罠近くのヨシノザクラに飛下りて、蕾を啄みはじめたがだんだん枝移りして少しずつでも罠から遠ざかろうとつとめたのだ。

経験というものは尊いものである。やがてはそれが本能ともなる。

オナシが、先ず罠から遠退こうと思って、隣の桜に飛移ろうとしたときであった。ハシロは、樹間に仕掛けられてあるカスミ網を発見した。

「危い!」

ハシロは、オナシに退去の信号を送った。同腹の四羽は一齐に飛上った。同種の五羽は飛上らない。

ハシロの同腹達は、二十米程離れた松の木で盛んに同種達を呼びつづけた。同種達がそれに応えて一齐に飛上ればよかったのであるが、罠から遠ざかればよかろうと考えて一空腹だったからでもある一隣のヨシノザクラの蕾を啄みつづけようとして、飛び移ったのがいけなかった。五羽のうち一羽雌がカスミ網に入ってしまったのである。

まことに欄れなのは、そのウソであった。

二少年はよろこびのあまり、焦ってそのウソを握りしめてしまった。脊に圧力がかかって、そのウソは少年の手中で吐血しながら落命したのであった。

すべて、小鳥等は軟かに掴み、両足を揃えて中指と薬指の間に挟みさえすれば、逃げられることも少く、掌中で吐血落命などという事は起さないで済むものである。

これも少年達には、おりおり繰返されている失敗の一つであった。

四羽のウソは驚き怖れて、ハシロ達の松の木へ飛込んだ。

ウソ達は、それから囀と囀の中間にある分水嶺、タンクの脇のヨシノザクラに飛移った。そこで、K 青年や二少年を観察し乍ら黙々と蕾を啄みつづけた。雪で、谷間のノジソ・イノコズチ・ヨモギ等の採餌が不能となって、ベニマシコの雌が一羽飛来してヨシノザクラの蕾を啄みはじめた。すぐ後から雄二羽飛来して共に蕾を啄んだ。

一羽は見事な紅色である。

ウソもベニマシコも皆丸くふくれている。

水飲場へは飛翔しないで雪片を啄んでは、のどをうるおした。見れば、Y と K とが枯木を集めて焚火をはじめている。

「この寒いのに、よく出掛けられましたね」と、Y。

「な在あに、パチンコなどやっているより、運動になりますし、親達もよろこびますから」と、K。

「そうですね、健康にはよいでしょうね、ここは海拔二百三十米、住宅は六十米位だから、百七十米程高いし、二軒の坂路はいい運動になりますね」

「東には太平洋、西は大北溪谷、空気は新鮮で、眺望はよいし、ほんとうに一石二鳥です」

「ところで、ウソはとれましたか？」

「あの通りです、囀へ寄りつきません」

「子達も、ときどきくるようだし、こりさせてしまったのでしょうか」

「一羽だけとれましたが、この通り、餌を食べているのに、首の下がふくれて元気がありません、昨年もこんなになって落ちたのがありました、きっとこれも駄目でしょう」

K は Y に、風呂敷包みの籠の中のウソを見せた。

K は、そのウソを一見すると、

「これは大丈夫です。このままでは、落ちるが、皮と肉との間に入った空気を抜いてやればいいのです」

「どうして空気を抜くんでしょう？」

「肉を傷つけないように、皮をニカ所傷つけるんです、放って置けばだんだん空気が拡がって落ちるから」

Y は、ポケットからナイフを取出し、そのウソを、そっと掴み出し首の下の空気袋を二耗ずつニカ所傷つけてから、親指で空気を押し出してやった。

そのウソはみるまに元気になった。

二少年が去り、K も去り、野鳥達が峙に帰来帰去する頃、Y は、東京電力 KK 大北川石岡第一発電所水槽北緯三六度四七分・東経一四〇度四一分一の傍で、野鳥達の峙行を観察していた。

峙定めぬ渡り鳥—それは、ほんとうの言葉であるだろうか？

Y の、これまでの観察によれば、冬鳥でも、夏鳥でも、決して毎夜峙を替えるものではない。滞在期間中の峙が一定している。

夏鳥のツバメ(燕科)等が、元の家やその附近によく帰来するように、冬鳥達も元の場所によく帰来するそして、寝室が同場所であることが多い。彼等はやむにやまれない事清の生じない限りは、その採餌場・水浴場・寝場所等を替えるものではない。

友遠方より来る、楽しからずや Y は、遠来の旧友や新友を、毎年水槽の峙で迎え送り、その生態を観察することが、楽しみ以上のものなのである。

カシラダカ・アトリ・ツグミ・ビンズイ等が、山麓から飛来して、それぞれの埒についた。

Yは、日暮まで観察をつづけていたが、期待していた、オオマシコ(アトリ科)や、レンジャク(連雀科)を認めることが出来なかった。

それ等は、気象や其の他の関係で、渡来したり、しなかつたりする冬鳥なのである。

ヨシノザクラの蕾を啄んでいた、ベニマシコ達が水槽下の藪中に飛込んだ。一斉に飛立った八羽のウソは、二羽が大北溪谷沿いに横川方面へ向い、四羽は十里上峠に向った。ハシロとオナシは水槽下の森に向った。

Yは、家路を辿り乍ら、途中で路傍の切取奥を、昨年の冬に埒としたジョウビタキが、本年の冬も埒としているその就埒を確認した。

それから、路傍で飢えて飛べなくなっていたホオジロの雌一羽を拾って帰った。(一九五四・四・四)

一九五四・六「動物文学」

六五、鶏が先か卵が先か

現在北海道にあって生物の研究に熱心な同志、永田洋平氏は「佐渡のとり」第二号に、「化学、そして物の創造」- 鶏が先か卵が先か - を発表された。

私は「佐渡のとり」の編者小杉偵二氏よりその第二号を受贈、一読しているうちに永田氏の論説で足踏させられてしまった。何回かそこを讀返さなければならなかった。

文中に、

『宮崎伝三郎氏は「親とちがったものが出来るためには、動物では卵、植物ではタネのときもしくは、その発生のごくはじめに変化しなければならない。新しい種類はいつでも卵からはじまる。」とっているが、今日万人のおそれる放射能の汚染による遺伝的異変をとる多くの遺伝学者達はその直接汚染にさらされる親にその影響を指向している。これは宮崎氏の「ニワトリより卵が先だ」という説に間接的に、それも極めて有効な反証を唱えていることになる。』云々。それから又、

『親と子、ないしは鶏と卵といった両者の関係はいわば一種の生物についての老幼を区分しただけのものであって、それだけでは又、生物の進化を推して知るだけの一つの尺度にもならない。これをおおまかにいえば、実際には鶏と卵、親と子は現在われわれの目の前に実在する対象だけであって、それ以前のものはすべて親であり鶏であって子や卵は一つとして存在しないのである。』云々。

と、あるが、私にはどうしても永田氏の説は肯定し得ないものがある。私は宮崎氏の説を肯定するものである。永田氏の説に従えば、サンチレール(一七七二～一八四四)の境遇万能説～進化論～を否定して、キュービエ(一七六九～一八三二)の天変地異説～種不変論～を肯定しなければならないことになりそうである。私はキュービエの種不変論を否定し、サンチレールの進化論を条件をつけて肯定するものであるが、私は私流に『あらゆる生物—動植物の一切—には無形の精神的な実在があり、進化はその無形の精神的な実在の表現であろう』と思っている。又、あらゆる生物には有形の化学的な実在があり、変化はその有形の化学的な実在の表現であろうと思っている。生物の最初の発生—それがその卵であり、タネでなくて何であろう。鶏がはじめからある筈はない。鶏を果して何者が創造し得たろうか?他に造物主などというものがある筈はないだろう。鶏は鶏自身が卵から鶏になったのである。これなら証明し得られるであろう。

生物の進化は環境に因る無形の精神的な表現であり、生物の変化は境遇に因る有形の化学的な表現でなければならないと思う。

永田氏はペニシリンの発生も挙げられたが、ペニシリンは発見された生物の一つに過ぎまいが、この種の人類その他にとって有益な生物はまだまだ発見されるであろう。

放射能の汚染はあらゆる生物に化学的な変化を与えるであろう。これは実に怖ろしいものがあるであろう。これこそ新しい生物の卵やタネを発生させかねないし、それが成育し進化するとき生物界は大混乱に陥る場合無しともいえない。少くとも実在する現生物だけでも化学的な大変化を受けるに至るであろう。それはとにかくとして、甚だ抽象的ではあるが、生物の発生は鶏が先ではなく卵が先であって、親はその成長しただけのものであると私は思う。(一九五七・一〇・三一)

紹介

『やまで自漫は』"小鳥と暮す五十年・庶務の山県さん"

山県さんは礪業所の庶務係にあって、主に用地関係の仕事に従事して居る。戦前より日本野鳥の会の会員であり、号を「深雪」と称し『満洲の野生鳥』という著書もあり広く世の知るところである。

これまでも数回に亘りタイムス紙を通じ、野生鳥についての特ダネを発表した事もある。

幼少の頃より小鳥に対して興味を持ち始めたと言うから実に五十年の長い間「共にないたり笑ったり」小鳥と一緒に生活をして来た訳である。

現在ウソ・ベニマシコ・オオマシコ・イカル等有名無名合せて十五羽計り飼って居るのであるが、朝は鳥と共に起き、(時には起されることもある)夜は鳥と共に休む、正に一心同体であり、餌の食べ方や鳴き方の変化を見て相手の体の具合までもはっきり判ると言うから、鳥になりきって居ると申しても過言ではあるまい。

鳥捕りは鳥捕りに終ると言われるが、山県さんの場合は警書にも見られる通り、鳥というものの生態についての研究に対しては感歎の外はない。奥義に達したと謂うか、その中にとけ込んだ人でなくては到底知ることが出来ないもの計りである。

用地関係の仕事は山が多く、小鳥にめぐり会う機会も多いだけに、今度発電所建設が決定している横川方面にも相当数の珍鳥が棲息して居ると言う事がもたらされたが、山県さんならではの観察であり発見である。(一九五三・一〇・一)

「常磐炭礪茨城礪業所タイムス」

『野鳥とともに二十年』"夢を捨てぬ山県さん"

野鳥の世界を究明しようと小鳥とともに明け暮れている野鳥研究家の話題と初春のプランを紹介する。

この人は北茨域市中郷町石岡八六五常磐炭礪茨城礪業所総務課の山縣深雪氏で「日本野鳥の会」の全国委員でもある。山県さんは二十数年前に知り合った「日本野鳥の会」会長中西悟堂氏の指導で、勤めのかたわら鳥類の研究をはじめた。その後間もなく満洲へ転任したが研究はやめず、とくにスズメなど小鳥を重点に観察をつづけ、昭和十七年『満洲の野生鳥』という著作を出版した。

この本は内外の愛鳥家から好評をうけた。戦後、現在の炭礪に帰っても社宅の片すみに一坪足らずの鳥舎をつくるほどの熱心さで、その研究が認められて「日本野鳥の会」全国委員に選ばれた。山県さんはことしこそはあらゆる鳥を捕獲し、それぞれの足に標識をつけ全国的に鳥の移動を観察、「どれ位生きられるか」「どれ位帰ってくるか」との研究をしようとプランをたてている。昨年暮までに実った同氏の研究発表の一つ二つを見ると……

その一、日本の北から南に生息しているが、その数は少ないといわれる「イカル」を六年前から飼っているが、一昨年秋に頭の黒色部を残して全身が白色になった。そこで老衰による変化かと思っていたら昨年秋には再び羽毛が黒色に変わった。これは夏頃からエサを黒ゴマに変えた結果色素の欠乏がみだされたことを立証したものだ。

その二、シベリア方面から五年に一回ほど飛んでくる珍しい「オオマシコ」を一昨年二月に近くの山で捕えた。その当時は胸毛が紫色だったものが一昨年秋に灰色に変わり昨年秋にはさらに赤褐色となり、色素の補給により毛色が変わることがわかった。

その三、スズメは「害鳥」か「益鳥」かについて調べたところ、益鳥であることがわかった。エサの場合をみると A 五羽にヒエ、B 五羽にモミ、C 五羽に混合物を数年間あたえたところモミ飼料のは一年以内で死に、ヒエと混合飼料のは長命することがわかった。スズメが実りの秋にタンポに集まるのはモミのほか雑草・ヒエもあって餌料がとれやすいので集まるが、好物はヒエや雑草でモ、ミは主食でないという。(一九五七・一・八)

「読売新聞・茨城読売」

幼少の頃から鳥好きだった私をタイムスでは五十年、野鳥の生態を発表しはじめてから二十数年となったので読売では二十年と紹介してくれたものと思います。全く私は、鳥のことを考えているときは、私はもう私ではなくすっかりその鳥になりきってしまいます。

私は大雪の後で野鳥を拾ったことがあり、それを飼育しましたが、飢え果てて死の直前とも思われたその鳥は、与えられた粟粒を悦んで啄んでくれましたが、やがて日を経るに従って粟などには見向きもせず嘴ではじき出してしまおうようになりました。エゴマだけを、撰り出すのです。

丁度それは私が大陸から引揚げたときに、炭車(とろ)の後押でも何んでもやろうと決意していながら、喉元過ぎればだったのと相似です。小鳥や人間には共通なところもあればあるもので意外なところで小鳥から、自分自身を見出す場合があるものです。(一九五七・秋)

著者